



TITLE:

彙報 (2012年1月-2012年12月)

AUTHOR(S):

CITATION:

彙報 (2012年1月-2012年12月). 人文學報 2014, 105: 167-231

ISSUE DATE:

2014-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/189496>

RIGHT:

彙 報

2012年（平成24年）1月～2012年（平成24年）12月

- * 「研究状況」は2010年（平成23年）1月より2011年（平成24年）12月も含む
- * 紙幅の関係上、2013年の彙報は、2014年度中に刊行予定の106号に掲載する

研 究 状 況 (2010年)

公募型研究班

グローバル化する思想・宗教の重層的接触と人文学の可能性 班長 高野山大学文学部教授 奥山直司
グローバル化が進行する現代社会において、思想や宗教の流通と消費にはどのような特徴があるのか。本研究は、この思想・宗教の流通と消費の問題を、複数文化の重層的接触という観点でとらえ、現代のみならず、過去150年程度のスパンの中でこれを分析、考察することを目的とする。そのための柱として、宗教と進化論（ダーウィニズム）をテーマに据え、それらの伝播の諸相を人文学の諸分野にわたって検討する。今年は初年度ということもあり、最初の会合で班長が趣旨説明を行い、これについて参加者全員がこれまでの研究を踏まえて議論するという形をとった。

10月30日 奥山直司 趣旨説明
全員 討論

生命知創成に向けたプラットフォームの構築

班長 大阪大学コミュニケーションデザインセンター教授 小林傳司

平成22年7月から12月の活動報告 生物学研究は、1970年代を起点として、実験室に閉じたかた

ちで営まれていた自然哲学的色彩を伴う研究から、医学領域のみならず人々の日常生活における生と死の領域全般に具体的な影響を持つ生命科学へと変容を遂げた。このような科学の構造転換の状況において、生命科学を社会の中にあらためて位置づけ、社会の視点を加味した新しい「知」として把握しなおすが必要である。本研究班では、このような社会的視野と見識を備えた生命の科学に関する新しい捉え方を「生命知」と呼ぶこととし、その創出のために、科学者、社会学者、人類学者、哲学者、歴史学者などが共同で検討を行う。

本年度は、合成生物学と呼ばれる、細胞の機能や構造を人工的に再現することで生命現象の理解と有用な技術の創出を目指す研究分野を中心に、人文系研究者と生命科学者がお互いの情報を共有し、検討を行う場を設けた。2011年1月には、海外からのゲスト（生命倫理学）を講演者とする公開研究会、3月には、東京で公開シンポジウムを開催する予定である。

平成22年

- 7月30日 「基本構想の確認と具体的戦略の協議」
- 10月6日 （研究報告）「生命倫理の土台をつくる」 礒島 次郎
- 11月29日 （研究報告）「細胞を創る ― 合成生物学の現状」 加藤 和人
- 12月12日 （公開シンポジウム）「合成生物学・倫理・社会」（第4回研究会）（立命館大学 GCOE「生存学」と共催）（講演）「生命システムの理解と制御を目指す合成生物学 ― その現状と課

題」 齊藤 博英（京都大学）
（講演）「合成生物学の論理とその社会的課題」 米本 昌平（東京大学）

トラウマ経験と記憶の組織化をめぐる領域横断的研究 — ナラティブからモニュメントへ —

班長 田中雅一

2010年4月から12月まで

トラウマ（心的外傷）の原因は、幼児のころの虐待、家庭内暴力、学校でのいじめ、暴力行為、とくに戦争での経験、犯罪や事故、自然災害などである。本研究では、トラウマをより広い意味で苦悩（suffering）や痛み（pain）とみなす。この苦悩に対し人びとがどのような形で対峙し、克服しようとしてきたかについて考えてみたい。2010年度は初年度ということもあり、報告者には自身の専門（社会学、精神分析学、臨床心理学、文化人類学など）におけるトラウマ研究の紹介や関連事例の分析を中心に報告していただいた。

4月12日 「トラウマ経験の組織化をめぐる領域横断的研究の射程」 田中 雅一

研究紹介 班員全員

5月17日 「紛争経験の語りにおける『事後性』の感覚：北アイルランドのライフ・ストーリーから」 酒井 朋子
「カンボジアにおけるボル・ポト時代の記憶」 武田 龍樹

5月31日 「コンバット・ストレスの周辺：軍事組織とケアをめぐる」 福浦 厚子
「トラウマと精神分析」 立木 康介

6月7日 「2001年インド西部地震の経験と、記憶が埋め込まれたモノ」 金谷 美和
「シェル・ショックからシェル・アートへ：惨事トラウマとモノをめぐる」 田中 雅一

6月14日 「トラウマとしての進駐軍：ヨコスカ米軍基地と自己形成」 清水 展
「『トラウマ語り』とフローレス島山岳民の暴力経験の語り」 青木恵理子

7月5日 「トラウマと展示」 兼清 順子
「『表象する』から『証人になる』へ：生政治の時代におけるトラウマをめぐる」 松嶋 健

7月12日 「原爆被害者は苦難の経験をいかに語るか：在韓被爆者の生の軌跡から」

情報処理技術は漢字文献からどのような情報を抽出できるか — 人文情報学の基礎を築く

班長 関西大学外国語学部教授 山崎直樹
(2010年7月～2013年3月)

本研究課題は、さまざまな情報処理技術 — マークアップ言語によって構造化されたテキストの処理、日本語の解析で成果を挙げている形態素解析・構文解析技術、n-gram モデルによるデータマイニングの技術、テキスト間の近縁性を調べる系統学的分類法、ネットワーク構造を抽出し、その構造を可視化する技術 — を用いて、あらゆる角度から漢字文献の解析を試みる予定である。

本年は7月23日に最初の会合を開催したのち、各情報処理技術に関して、電子メールで意見交換をおこなった。さらに12月3日に2度目の会合を持ち、それらの技術を、今後の研究にどう活かしていくか議論をおこなった。なお、来年（2011年）2月18日に本研究班主催のシンポジウムを開催予定である。

人文学研究部

複数文化接触領域の人文学 班長 田中雅一
2010年1月から3月まで

4年間続いた研究会が3月で終わった。最終年は論文集に収める原稿の発表が半分を占めた。この研究班の成果の一部は2010年に出た『コンタクト・ゾーン』3号に収められているが、最終成果は『コンタクト・ゾーンの人文学』（全4巻）として順次公刊される予定である。

2月15日 「ヘラートのカーマ・スートラ：複数文化接触領域としての古代アフガニスタン再論」 稲葉 稯
「コンタクト・ゾーンとしての占領期ニッポン」 田中 雅一

- 松田 素二
「『心のケア』は誰の仕事か：HIV カウンセリングの成立と展開をめぐる
て」 佐藤 知久
- 10月18日 「日本人「慰安婦」被害者をめぐる表
象：1970年代から1990年代初頭の言
説を概観して」 木下 直子
「心理療法とトラウマ」 花田里欧子
- 11月29日 「アルメニア人虐殺とその記憶」
伊藤 順二
- 12月13日 「あの日、あの場にいた、あの人を想
起する：出会い損ねてきた「他者」と
の対話を求めて」 三田 牧
「社会をめぐる二重のトラウマ：イス
ラエルの生業システムにみる社会生成の
原理的苦痛」 大村 敬一
- 移民の近代史 — 東アジアにおける人の移動 —
班長 水野直樹
- 1月30日 「朝鮮人満洲移民統制政策の成立と変
遷 — 満鮮拓植設立（1936年）から
「満洲開拓政策基本要綱」策定（1939
年）まで —」 金永 哲
「植民地期朝鮮における水産加工業 —
竹中缶詰製造所をめぐる人々 —」
河原 典史
- 3月6日 「第一次大戦下の東南アジアと日本 —
堤林数衛の移民論を中心に —」
籠谷 直人
- 4月10日 「植民地朝鮮と牧山耕蔵」 金 玄
「植民地期朝鮮からの人口流出の要因
に関する一試論」 水野 直樹
- 5月8日 「近代朝鮮における中国人の野菜栽培
及び販売活動 — 京畿道を中心に —」
李 正熙
（文献紹介）「戦後北朝鮮における日本
人留用に関する文献」 水野 直樹
- 6月12日 （映像紹介）「戦時期の朝鮮を描いた
ニュースフィルムなど」
「20世紀の中国東北地域をめぐる人口
移動と「華」」 上田 貴子
- 7月10日 「第二次世界大戦後朝鮮華僑に対する
中国共産党の政策について — 朝鮮華
僑聯合会の設立と華僑の帰国に対する
中国政府の方針 —」 宋 伍強
「満洲移民と郷土主義 — 岐阜県郡上
村開拓団を事例として —」
猪股 祐介
- 9月11日 （紹介）金光烈著『韓人の日本移住史
研究 1910～1940年代』（ソウル、ノ
ンヒョン、2010年） 小野 容照
「近代舞鶴港と朝鮮半島 — 軍縮期の
対岸貿易ルートの形成を中心に —」
長沢 一恵
- 11月13日 「『三矢協定』締結過程をめぐる —
赤井晴海資料を中心に —」
松田 利彦
「在朝日本人と映画」 梁 仁實
- 12月11日 「20世紀前半、日本からみた東アジア
漁業 — 樺太、朝鮮、関東州、青島、
台湾を比較して —」 太田 出
「戦前京都の朝鮮人労働者」
高野 昭雄
- 虚構と擬制 — 総合的フィクション研究の試み —
班長 大浦康介
- 平成 21 年度が最終年度である当研究班は、昨年
に引き続き、研究成果報告書の作成に向けた以下の
原稿検討会を開いた。
- 2月1日 「あなたはどこ？ 私はだれ？ — 歌謡
曲のフィクション論に向けての一考
察」 久保 昭博
- 2月15日 「語る行為（ナレーション）の存在論
（オントロジー）」 河田 学
「民謡の生成と競合 — 富山県五箇山
地方「こきりこ」を中心に」
川村 清志
- 3月1日 「メタフィクションにおける物語階層
違反 — 「道に沿って持ち歩く鏡」のた
くらみ」 岩松 正洋
- また6月には人文研アカデミーの連続セミナーお
よび京都大学研究科横断型教育プログラム（B タイ

プ)として、以下の講演会を開催した。

6月3日 「透明人間の夢 — 科学的実証性と〈本
当らしさ〉」 大浦 康介

6月10日 「遊び時間の終わり — 遊びのなかの
虚構、虚構のなかの遊び」 近藤 秀樹

6月17日 「ヴァーチャル・リアリティー — 科
学技術が可能にする現実の見え方・見
せ方」 塩瀬 隆之

6月24日 「あなたはどこ？ 私はだれ？ — 歌謡
曲のフィクション論に向けて」

久保 昭博

同じく6月に、『国際シンポジウム 西洋のフィ
クション・東洋のフィクション』（日仏語版）を人
文科学研究所共同研究資料叢刊第8号として刊行し
た。

11, 12月には外国人研究員フランソワーズ・ラ
ヴォカ教授による以下の講演会を催した。

11月15日 «Fiction et cultures»

Françoise Lavocat

12月2日 «Relating catastrophe in early modern
Europe» Françoise Lavocat

世界的視野から見た日本の人種・民族表象

班長 竹沢泰子

平成22年の研究成果

人種の表象と社会的リアリティについて、日本、
台湾、韓国、フィリピン、インドの専門家を招き、
アジア各国における差異の表象の特徴を明らかにし
ようとした。その結果、とりわけ、アジア社会にお
いてしばしめられる、非視覚的に生活感覚によって
語られる「見えない人種」の表象についての理解を
深めることができた。

1月10日 「iPS細胞研究を進めるための社会的
課題と展望」 加藤 和人

「アガンベンの生政治学」 金森 修

1月11日 「文化的要因によってヒトゲノム多様
性は変化するのか？」 太田 博樹

3月13日 「沖縄人をリアルなものとする表象の
仕組み Neither hard-boiled nor soft-
scrambled: How not to say I am an
Okinawan Part2」 前高西一馬

コメンテーター：喜納 育江

「清き乙女、強き母、彷徨う戦士たち
〜「在日」表象の非対称性」(映画上映
を含む) 梁 仁實

コメンテーター：高 みか

3月14日 「戦争・占領経験のなかの「人種」・
「民族」 成田 龍一

日本・アジアにおける差異の表象 班長 竹沢泰子

5月8日 「アジアにおける差異の表象〜今後の
研究会の課題」 竹沢 泰子

「アメリカ文学における混淆人種の表
象と創造」 喜納 育江

5月9日 「植民地帝国と〈比較のポリティクス〉
— アン・ストローラーの呼びかけと東
アジアからの応答可能性」 水谷 智
「古沢岩美の描いた〈慰安婦〉— 戦
争・敗戦体験と主体の再構築」

北原 恵

6月4日 “Stories They Tell Themselves About
Themselves: Japanese and American
Swimmers, African and Korean
Distance Runners, and American and
Mexican Mythologies of a “A Hidden
Tribe of Superathletes” — American
Nationalism in International Contexts”

16:00-18:15 Mark Dyreson マーク・ダイレソン
“Race and Law in the U.S. in Compar-
ative Perspective”

Ariela Gross アリエラ・グロス

6月8日

主催：京都大学人文科学研究所「日本・アジアに
おける差異の表象」研究班

共催：京都大学人文科学研究所人文学国際研究セ
ンター

ISEAS: イタリア国立東方学研究所,
EFEO: フランス国立極東学院,

ECAF: ヨーロッパ・アジア研究コンソー
シアム

「血が告げぬもの〜アメリカ合衆国の裁判
における人種の歴史」

What Blood Won' Tell: A History of Race
on Trial in America

ARIELA JULIE GROSS

(南カリフォルニア大学教授)

8月2日 「人種表象の日本型グローバル研究プロジェクトについて」 竹沢泰子+全員
「差別はいかに表象されるか — フィ
クションからドキュメンタリーまで」

斉藤 綾子

8月3日 映画鑑賞『破戒』
「封建時代の亡霊」/のしかかる「身の
素姓」—『破戒』2つの映画作品から」
黒川みどり
「フィリピン映画におけるエスニシ
ティ表象の変容」

ニカノール・チョンソン

8月4日 「日本映画にみる朝鮮人慰安婦と在日
女性」 高 みか

9月5日 (慶尚大学)「韓国の白丁について —
起源・社会的排除・闘争・現状」

金 仲燮

「インドのダリットについて — 差異
の保持と不平等の解消」

タンカ・ブリッジ

Brij Tankha

コメント 田辺 明生

9月6日 「被差別部落について — その歴史的表
象をめぐって」 吉村 智博

「『世系』、『職業と世系』に基づく差別
と部落差別についての若干の考察」

友永 健三

12月4日 「縫合線上を生きる：植民地下台湾の
沖縄県出身移民」 松田ヒロ子

「戦前日本のエロ本における人種表象」

李 昇燁

12月5日 「米国人類遺伝学会における Roderick
R. McInnes 会長の講演紹介」

東島 仁

「ゲノム研究に関する文献紹介」

菅野 優香

「日系アメリカ人研究に関する文献紹

介」

後藤 千織

近代古都研究

班長 高木博志

「近代古都研究」では、「歴史と都市」を一つの手
がかりとして、京都・奈良・首里等の王権と関わっ
た古都のみならず、金沢・仙台・岡山・大阪等の城
下町も研究対象にしてきた。各地の「古都」は、ナ
ショナリズムの高揚とパラレルに、古代や平安時代
や藩祖の開市時など、その特色となる時代や来歴を
顕彰し「お国自慢」を定式化させた。前近代の「歴
史」や「伝統」と、その近現代における捉え返しや
葛藤を、歴史学・建築史・造園史・美術史などから
学際的に考えた。本年度は3月に江田島・呉の軍都
をめぐり、7月には城下町熊本近代を考える巡見
をおこなった。

班員 岩城卓二、金文京、高階絵里加、水野直樹、
黒岩康博（以上所内）、伊従勉、中嶋節子、藤原学、
谷川穰、福家崇洋、小林丈広、青谷美羽、秋元せき、
飯塚一幸、井上章一、井原緑、岩本馨、内田和伸、
大場修、岡村敬二、長志珠絵、小野健吉、小野芳朗、
川口朋子、河西秀哉、桐浴邦夫、工藤泰子、清水愛
子、清水重敦、鈴木栄樹、ヘンリー・スミス、高久
嶺之介、高田祐介、田島達也、田中智子、谷山正道、
辻岡健志、中川理、並木誠士、羽賀祥二、幡鎌一弘、
原田敬一、日向進、廣瀬千紗子、福井純子、福島純
子、福島栄寿、丸山宏、毛利紫乃、本康宏史、山上
豊、山田誠、吉井敏幸、吉田栄治郎

2010 年

1月23日 「京都における戦時期建物疎開」

川口 朋子

「北畠治房の南朝史蹟考証」

黒岩 康博

3月7・8日

江田島・呉巡見（旧海軍兵学校・呉市
海事歴史科学館・入船山記念館）

案内：飯野 俊明

「日露戦後の舞鶴鎮守府と舞鶴港」

飯塚 一幸

4月17日 「文人たちの動向と近代数寄者の志向
について — 近代和風建築・庭園の意
匠と煎茶文化 —」 矢ヶ崎 善太郎

- 5月15日 「近代京都と泉涌寺」 高木 博志
「近世城下町と都市計画法都市 — 岡山
の招魂社・陸軍・公園を巡る問題
—」 小野 芳朗
- 6月19日 「明治初期の政教関係と〈教団〉形成
— 真宗四派の大教団分離運動を中心
として —」 辻岡 健志
「近代日本の地方中核都市 — 地理学
における広域中心都市論の成果と課題
—」 山田 誠
- 7月17・18日
熊本巡見（山崎練兵場跡・辛島公園・
花畑公園・高橋公園・徳富記念園）
案内：三澤 純
『新熊本市史』勉強会
小林 丈広・高木 博志
田中 智子・三澤 純
- 10月16日 「城下町金沢」の記憶 — 創出された
「藩政期の景観」をめぐる —
本康 宏史
「『軍都』論と近代都市史研究」
原田 敬一
- 11月20日 「『神都』の形成過程 — 近代伊勢のな
りたちについて —」
ジョン・グリーン
「『町人の都市』論の可能性」
小林 丈広
- 12月18日 「戦前沖縄県振興計画と都市計画」
伊従 勉
「幸野棟嶺の《秋日田家》について —
明治期画人の中の日本と中国（と西
洋）—」 高階絵里加

第一次世界大戦の総合的研究

班長 山室信一・岡田暁生

本年度も全学共通科目（後期）にリレー講義を提
供したほか、人文書院よりブックレット「第一次世
界大戦を考える」シリーズ全6冊の刊行を開始した。
既に出版された小関隆『徴兵制と良心的兵役拒否』
および岡田暁生『クラシック音楽はいつ終わったの
か』に続き、残りの4冊（山室信一、藤原辰史、久

保昭博、河本真理）も来年1月および2月に刊行さ
れる予定である。そのほかに今年度は、2014年度
における最終的な成果とりまとめを視野に入れ、シ
ンポジウム形式の研究会をスタートさせている。ま
たベルリン自由大学およびボッフム大学の第一次世
界大戦研究プロジェクトとの連携を準備中である。

2010年度のこれまでの研究会

- 4月10日 「問世代的な歴史認識と大戦：北アイ
ルランドのライフ・ストーリーから」
酒井 朋子
- 4月26日 「チャリティから見たイギリスの第一
次世界大戦経験」 金澤 周作
- 5月8日 「アルザスと第一次世界大戦・再考」
中本真生子
- 5月24日 「大戦を人類学する — トレンチ・
アートと戦場の記憶」 田中 雅一
- 6月12日 「小シンポジウム — 第一次世界大戦
と芸術史」 岡田 暁生
（パネラー 河本真理、小黒昌文）
- 6月28日 「日本陸軍は第一次世界大戦から何を
学んだか？ — 小畑敏四郎、石田保政、
中柴末純等々にふれながら」
片山 杜秀
- 7月12日 「第一次世界大戦と東中欧のユダヤ人
— 帝国内少数民族から国民国家内少
数民族へ」 野村 真理
- 9月27日 「文学の「動員」— 戦中から戦争直後
にかけてのフランス文学」 久保 昭博
- 10月9日 「農本主義とファシズム — 農業史に
おける第一次世界大戦」 藤原 辰史
- 10月25日 「賢治と戦争」 西谷 修
- 11月13日 「アルメニア人問題」の形成とその
「解決」 伊藤 順二

王権と儀礼

班長 藤井正人

本共同研究は、王権と儀礼との関係を古代インド
の王権儀礼を中心に研究することを目的としている。
ヴェーダ文献を基礎資料にしているが、インド学の
諸分野のほか、言語学、歴史学、考古学、美術史、
人類学などの複数の視点から資料を分析するととも
に、さまざまな時代と地域における王権と儀礼に関

わる問題を比較研究の対象としている。

隔週に開いている研究会では、会読と報告をほぼ交互に行なっている。会読では、ヴェーダ祭式文献の中から王即位式（ラージャスーヤ）に関するすべての箇所を読解し、この儀礼に関する資料の集成をめざしている。報告では、王権と儀礼に関係してさまざまな分野の異なる視点から報告をおこなっている。最終年度の今年度は、会読資料全体の検討を完了するとともに、中心資料の原典と英訳の出版に向けて資料の再読を進めるために、会読を集中的に行なった。

研究成果として、ヴェーダ王即位式関係資料のうち未訳のもの2種に関して、校訂原典と英訳に詳細な解説と索引を付した英文の研究書の出版を準備している。また、これまでの報告をもとに、さまざまな地域と時代の王権と儀礼をめぐる論考を集めた論文集を出版することも予定している。

研究会記録

- 4月30日（会読24）
Vadhula-Srautasutra 10, 12, 0-16
藤井 正人
- 5月14日（会読25[再読3]）
Vadhula-Srautasutra 10, 1, 1-17
梶原三恵子
- 6月11日（会読26[再読4]）
Vadhula-Srautasutra 10, 1, 18-60
手嶋 英貴
- 6月25日（会読27）
Vadhula-Srautasutra 10, 13, 1-29
藤井 正人
- 7月9日（会読28[再読5]）
Vadhula-Srautasutra 10, 1, 18-60
手嶋 英貴
- 7月23日（報告23）
Birch-bark Scrolls and Precious Metals: Writing Buddhism In Ancient Gandhāra
Stefan Baums
- 10月15日（会読29[再読6]）
Vadhula-Srautasutra 10, 1, 61-10, 2, 20
梶原三恵子
- 10月29日（会読30[再読7]）

Vadhula-Srautasutra 10, 1, 61-10, 2, 20
梶原三恵子

11月12日（会読31）

Vadhula-Srautasutra 10, 14, 1-45

藤井 正人

11月26日（会読32[再読8]）

Vadhula-Srautasutra 10, 2, 21-43

大島 智靖

12月10日（会読33[再読9]）

Vadhula-Srautasutra 10, 2, 44-10, 3, 28

横地 優子

研究準備会

1月22日, 2月19日, 3月26日

古典のなかなかのアジア史

班長 籠谷直人

4月17日 「アジア経済史の基本問題 2年目のまとめと報告成果に向けて」

籠谷 直人

5月22日 「満鉄東亜経済調査局『印度概観』」

木谷名都子

6月12日 「大島真理夫編『土地の稀少化と勤勉革命の比較史—経済史上の近世』（ミネルヴァ書房, 2009年12月）をめぐる「古典班」からの論点提示」

籠谷 直人

7月24日 「成果報告にむけて」 籠谷 直人
「ケインズの「インド通貨論」Part 2」

西村 雄志

10月23日 神戸華僑華人研究会との共同開催、陳来幸、陳天璽、上田貴子、溝口歩の組織にて、「パネル・ディスカッション：華僑華人ネットワークの新世代」（神戸元町・中華会館）。

10月30日 「田保橋潔の朝鮮感」 石川 亮太

11月27日 「ブーケの『二重経済論』」 島田 竜登

12月18日 「合股論再考」 陳 来幸

色道書の言語をめぐる文明史的研究

班長 横山俊夫

(2009.4-2011.3/2012.3まで延長予定)

安定社会が閉塞せず、文にして明なる状態に赴く

かどうかは、その社会を構成する諸要素が適切に交わり続けるために必要な豊かな媒介があるかどうかにかかっている。とりわけ問われるのは、言語による媒介機能の質である。この研究では、17世紀末からの安定期日本の上方に栄えた丸腰の閉鎖空間である遊里を、文明化の要素をはらんだ安定社会のいわば小規模実験例と見立て、そこでの言語の虚実柔剛明暗を観察し、その媒介機能の人類史的価値について考える。

資料として、西水庵無底居士の『難波鉦』（大坂、1680）を選び、そこに記された言語生態の諸相をとらえ、文明化の観点から分類を試みる。そのことにより、当班の旧組織「文明と言語」が試みた同書の校訂試訳を修補するとともに、未校未訳部分を加え、独自の意味づけを持たせた一篇を編むことを目指している。2年目は傾城や大尽よりも、媒介者としての働きが直接に期待される挙げ屋や遣り手といった人々の言語に注目する機会が増えた。また『難波鉦』の輪読以外の研究報告では、各班員が属している多様な現代学術分野における、それぞれに特殊な言語習慣の文明史的批評を提起した。文字表記以前の言語表現についての関心を高めてきている。

班 員

岩城卓二、菊地 暁、古勝隆一、武田時昌、田中祐理子（以上、所内） 梶 茂樹、木村大治、塩瀬隆之、田辺明生、松田文彦、山極壽一（以上、学内） 上村多恵子（日本エッセイストクラブ）、遠藤彰（立命館大）、後藤静夫（京都市立芸術大）、斎藤清明（文筆業）、廣瀬千紗子（同志社女子大）、深澤一幸（大阪大）

1月23日 「『難波鉦』〈細道 山の井〉」

菊地 暁

「江戸の虫たちの事情 —『五百崎虫の評判』とその周辺」

遠藤 彰

2月6日 「『難波鉦』〈稚立 あつま〉」

深澤 一幸

「〈コッホの条件〉と細菌学の誕生」

田中祐理子

2月27日 「『難波鉦』〈恋手引 あげや〉」

横山 俊夫

「言葉の機能変化と社会変容 — イン

ド・オリッサの民主化における下層民の行為主体性」

田辺 明生

3月6日 「幸田露伴の数学研究と少年雑誌『小国民』」

武田 時昌

4月24日 「『難波鉦』〈雲井月 遣手〉」

後藤 静夫

「平生鈇三郎の言語力 — 教育者、政治家、実業家としての生涯をささえたもの」

上村多恵子

5月12日 「『難波鉦』〈開眼 小むらさき〉」

斎藤 清明

「雑書体の興隆・注釈 —『篆隸文體』を中心に」

全 容範

（地球環境学堂招聘・漢字意匠作家）

5月22日 「〈傾城と誠〉をめぐる言説」

廣瀬千紗子

「展示解説・科学技術 X の謎」

塩瀬 隆之（於 総合博物館）

5月29日 「『難波鉦』〈続 雲井月 遣手〉」

後藤 静夫

「iPS細胞（人工多能性幹細胞）をめぐる社会と倫理」

加藤 和人

6月12日 「葉徳輝の『双梅景闇叢書』をめぐる」

深澤 一幸

「公開講演・秋成とその時代」

中野三敏 氏（九州大学）

（於 同志社女子大学デントンホール）

6月26日 「浪華隠士 山本序周のおもかげ」

横山 俊夫

「もえぐゐ — 続 傾城と誠」

廣瀬千紗子

7月10日 「『難波鉦』〈細道 山の井〉」

菊地 暁

「『交詢社』と『紳士』イメージ」

竹内 里欧（学術振興会）

9月15日 「アフリカの言語・文学」

梶 茂樹

（アジア・アフリカ地域研究研究科）

9月18日 「公開講座・暴力の起源とその解決法」

山極 寿一

（於 時計台百周年記念ホール）

- 10月2日 「文明化と言語力・原稿読み合わせ」
深澤 一幸・廣瀬千紗子
- 10月16日 「文明化と言語力・原稿読み合わせ」
廣瀬千紗子
- 11月13日 「ガラパゴスは『ガラパゴス化』する
のか？」 斎藤 清明
「展示解説・柳原睦夫展」
柳原 睦夫 氏（陶芸家）
（於 ギャラリー器館）
- 11月27日 「『難波鉦』〈続々 雲井月 遣手〉・現
代上方語訳」 後藤 静夫
- 12月18日 「『難波鉦』校訂訳本出版計画につい
て」 菊地 暁, 横山 俊夫
「廓の言葉」 廣瀬千紗子

近代日本と異文化接触 ―「同時代化」を生きた人々の記録― (2010年1月～12月)

班長 ヴィータ, シルヴィオ
前年から継続していた「外から見た近代日本の記録」を2009年3月で終え、引き続き「近代日本と異文化接触 ―「同時代化」を生きた記録―」として再スタートした。後者は3年かがりて交流の場としての「近代」という時代を扱うことにして、日本から見た洋行という行為も視野に入れた。人文科学国際研究センターの活動の一環として考え、ゲスト・スピーカーを含めた参加者の個別発表の形を取った。研究会の成果は3年後、論文集にまとめる予定である。

- 1月18日 「国際社会と古都奈良・京都」
高木 博志
- 2月1日 「日本人旅行者が見た1900年前後の
ヨーロッパ」 真銅 正宏
- 2月17日 「見い出す (Seeing), 関連させる (Re-
lating), 織り込む (Integrating) ―日
本における中国人移民と諸外国人コ
ミュニティの史的研究」
Timothy Y. TSU
- 3月29日 「異文化体験と〈日本〉イメージ」
西村 将洋
- 12月1日 「明治日本におけるヨーロッパクラブ
文化の改造」 (The Re-creation of Eu-

- ropean Club Culture in Meiji Era
Japan) Darren Swanson
- 12月16日 「死に際の態度を見つめるお雇い医師
―エルヴィン・フォン・ベルツの記
録を読む」 Silvio Vita

人文研探検 班長 岩城卓二・菊地 暁
本研究班は、人文研の歴史を基礎データに基づいて検証し、日本の人文社会科学のあり方を再検討する試みである。研究対象は、人文研の活動により産出されたさまざまな知的プロダクトであるが、大別して1) 著作物, 2) 人的資源, 3) 資料群, 4) 方法的蓄積, がある。これらを相互に関連させつつ、時代状況との相関において把握することが本研究班の課題となる。

本年は昨年度に引き続き、基礎データのリストアップ作業を遂行した。

このほか、創立80周年記念事業をはじめとした各種イベントの企画・運営などに協力した。

本研究班は今年度をもって終了し、資料調査の成果を中心とした報告書を作成する予定である。

2月22日 新村出記念財団資料調査

3月5日 国立民族学博物館資料調査

3月15日 「人文研保存事務方文書の特徴と、保存のための課題」 岩城 卓二
「人文研探検」管見 ―3年間でできたこと、できなかったこと―

菊地 暁

東方学研究部

西陲發現中國中世寫本研究 班長 高田時雄
平成22年における西陲發現中国中世写本研究班の活動としては、隔週に班員およびゲストスピーカーによる研究発表を行い、それに基づいて討論を行ったほか、夏季に「大会」を開催して集中的な議論を行った。本研究班では例年年度末に正式の研究報告書として『敦煌写本研究年報』を刊行しているが、本年度は3月にその第4号を刊行した。そこに収録された論文を列挙すると以下のようなものである。
藏經音義の敦煌吐魯番本と高麗藏 (高田時雄)

《敦煌變文集》〈下女夫詞〉の整理兼論其與「咒願文壹本」,「障車文」,「驅難文」,「上梁文」之關涉問題 (王三慶)

敦煌吐魯番文書中三等級供食問題研究 (高啓安)

唐宋時期敦煌土貢考 (余欣)

《俄藏敦煌文獻》中的西夏科舉“論”稿考 — 簡論唐宋西夏的科舉試論 (金澄坤)

書儀と詩格 — 變容する詩文のマニュアルとして (永田知之)

敦煌書儀中の“四海範文”考論 (山本孝子)

唐代西州における群牧と馬の賣買 (中田裕子)

古代チベットの長さの單位: mda' と sor mo (岩尾一史)

Another Hungarian looting China's treasures?: Sir Aurel Stein, Lajos Ligeti and a case of mistaken identity (Imre Galambos)

スタイン地圖と衛星畫像を用いたタリム盆地の遺跡同定手法と探検隊考古調査地の解明 (西村陽子・北本朝展)

また8月11日に開催された夏季大会では以下の報告を得た, 2011年3月刊行の『年報』第5号に掲載予定である。

敦煌寫本書儀中の僧尼書儀について (山本孝子)

『金剛醜女緣』寫本研究 (高井龍)

寫經題記所反映の古人病患者理念 (趙青山)

杏雨書屋・中國國家圖書館藏敦煌縣勘印曆 —— 羽061, BD11177, BD11178, BD11180 (赤木崇敏)

書儀 Dx11038 をめぐって (松浦典弘)

敦煌本八關齋戒文の研究 (荒見泰史)

羽039V を中心とした變文資料の再検討 (玄幸子)

漢簡語彙の研究 (2005. 4~2010. 3)

班長 富谷 至

本研究班は, 前年度に終了した「漢簡語彙の研究」の作業を継続し, 漢簡語彙辞典の公刊を目標として, 毎週研究班を開催し, 辺境出土漢簡中の語彙を採録し, その語義を検討・確定した。今年度末には, 採録語彙数はのべ3,500に達する予定である。今年度の担当者は次の通りである (排列は担当順)。

土口史記, 井波陵一, 鷹取祐司, 角谷常子, 藤井律之, 森谷一樹, 吉村昌之, 辻正博, 大川俊隆, 鷲尾祐子, 劉欣寧, 陳捷, 門田明, 吉川佑資, 佐藤達郎。

傳統中國の生活空間

班長 田中 淡

中國の傳統的な生活空間および造形, すなわち具體的には住まい, 宮殿, 庭園, あるいは家具配置, 室内空間, 日常生活と儀禮等々の諸相をととして, その特質を探ることを目的とする。時代・地方を限定せず, また建築空間に限らず, 廣義的な意味で日常あるいは儀禮の生活空間を対象として, 中國學の關連分野および東アジア, 周邊地域の専門家の参加を得て, 多様な研究主題をとりあげてきた。また研究發表と併行して明・方以智『通雅』卷三十八宮室を會讀し, 研究期間終了までに讀み終えた部分については, その譯注を『東方學報』第86冊に掲載する豫定である。本年中におこなわれた研究發表と擔當者は以下のとおり。

2010年

1月26日 「中國初期佛教寺院の空間構造」

向井 佑介

2月9日 「中國南北朝における佛教伽藍の變貌について」

黄 蘭翔

2月23日 「中國および韓國の古園林における方池の意匠について — 朱熹の「半畝方塘」を中心に —」

外村 中

三教交渉の研究 (Ⅱ)

班長 麥谷邦夫

本研究班は, 「三教交渉の研究」研究班の後を承け, 引き続き中國中世における儒佛道三教間のかかはりをさまざまな角度から研究することを目的に, 2005年度から5年間の豫定で組織された。本年は, 研究報告書の出版に向けて下記の研究發表を行った。なお, 研究報告書『三教交渉論叢續編』は今年度末に研究所から出版の豫定である。

1月20日 「元始天尊をめぐる三教交渉」

神塚 淑子

「道藏輯要の編纂と電子化をめぐる諸問題」 ウィッテルン クリスティアン

2月3日 「王安石の思想における『莊子』」

藤井 京美

- 「臺灣道教の異常死者救済儀禮について」 山田 明廣
 2月17日 「敦煌文獻 S. 2438 に見られる服餌辟穀法について」 池平 紀子
 「六朝時代の「信仰」に関する試論」 宇佐美 文

10. 25 : 齊趙郡李氏碑
 11. 1 : 齊趙郡李氏碑
 11. 15 : 齊趙郡李氏碑
 11. 22 : 齊趙郡李氏碑
 11. 29 : 齊趙郡李氏碑
 12. 6 : 齊趙郡李氏碑
 12. 13 : 李憲墓誌

唐代道教の研究 (2010-2012 年度) 班長 麥谷邦夫

本研究班は、唐代に撰述された道教教理書、とりわけ佛教教理の影響を強く受けた『玄珠録』等の解讀を通じて、唐代道教の教理上の特徴を解明することを目的として組織された。本年は、『玄珠録』の解讀と譯注の作成を行なった。年度末までに讀了する豫定である。

北朝石刻資料の研究 班長 井波陵一

1月～3月

内容：人文研所蔵石刻資料の会読（おもに北魏）

1. 18 : 蕭儋碑
 1. 25 : 北魏馬鳴寺故根法師碑
 2. 1 : 北魏馬鳴寺故根法師碑
 2. 8 : 北魏馬鳴寺故根法師碑
 2. 15 : 北魏馬鳴寺故根法師碑
 2. 22 : 北魏馬鳴寺故根法師碑

北朝石刻資料の研究 (Ⅱ) 班長 井波陵一

4月～12月

内容：人文研所蔵石刻資料の会読
 （おもに東魏・北齊）

4. 19 : 張玄墓誌
 4. 26 : 張玄墓誌
 5. 10 : 張玄墓誌
 5. 17 : 司馬昇墓誌銘
 5. 24 : 司馬昇墓誌銘
 5. 31 : 司馬昇墓誌銘
 6. 7 : 王僧墓誌銘
 6. 21 : 王僧墓誌銘
 6. 28 : 王僧墓誌銘
 7. 5 : 高盛墓碑
 7. 12 : 高盛墓碑
 10. 18 : 齊趙郡李氏碑

長江流域社会の歴史景観

班長 森 時彦

本研究班は、中国の中枢部ともいべき長江流域社会が如何に形成され、如何に發展して近代世界と向きあうようになり、そして中国社会に如何なる影響を及ぼしてきたのかといった様々な問題を、人文的、とりわけ歴史学的なパースペクティブから多角的に解明することを目指して、2008年4月にスタートした。本年度は3年計画の最終年度に当たり、報告論文集のとりまとめに向けて意欲的な研究報告が目白押しであった。特に若手研究者の斬新な視角の研究報告が目立つ一年であった。

- 2月12日 「李揚オベトナム侵入事件 (1878 年) とフランス」 望月 直人

- 2月26日 「南京国民政府期內モンゴル後套開發に関する一考察」 島田 美和

- 5月7日 「戦時上海の情報戦 ― 中西功と日森虎雄を中心に」 江田 憲治

- 5月28日 「祝大椿の企業者活動」 金丸 裕一

- 6月4日 「清末の長江沿岸で働く人々」 蒲 豊彦

- 6月18日 「海外と繋がる近代長江下流域：上海・蘇州を中心に」 陳 來幸

- 7月2日 「台趙鉄道と津浦鉄道」 袁 広泉

- 9月24日 「長江流域における歴史的な風景 ― 長江デルタ南翼の都市・農村に関する若干の考察」 鍾 獅

- 10月8日 「「軍港都市」旅順の形成と景観変容」 柴田 陽一

- 10月22日 「戦後の在外モンゴル人と文化伝統」 田中 剛

- 11月5日 「孫文『実業計画』『第二計画』の成立に関する一考察」 武上真理子

11月19日 「同治光緒初めの山東黄河治水策」

細見 和弘

12月3日 「ミッションスクールとスポーツ」

高嶋 航

東アジア古典文献コーパスの研究 班長 安岡孝一

本年は、漢文コーパスの制作作業の準備、および制作環境の構築を中心に、共同研究をおこなった。なお、本研究班では、参加者全員が文献や書籍を見ながら論じ合うというスタイルを取っているため、特定の発表者等は記さないことにする。

2010年

1月15日 CHISE に基づくグリフ・オントロジーの試み

ベイズ階層言語モデルによる教師なし形態素解析

2月19日 中古和文を対象とした形態素解析辞書の開発

訓点資料釈文制作における構造化記述の試み

近代文語 UniDic

語の品詞と素性

漢學文典

3月5日 品詞素性案

4月16日 科学研究費補助金の配分と今後の研究計画について

5月7日 制作環境プラットフォームの設計

5月21日 富山房の漢文大系

國譯一切經

言選 Web

2010年6月4日

爾雅

中国哲学書電子化計画

7月2日 Mac OS X 上での作業環境構築 (1)

7月16日 Mac OS X 上での作業環境構築 (2)

9月3日 Book Scanners

Mac OS X 上での作業環境構築 (3)

9月17日 Mac OS X 上での作業環境構築 (4)

10月1日 Mac OS X 上での作業環境構築 (5)

10月15日 『漢文大系』のPDF化

Mac OS X 上での作業環境構築 (6)

11月5日 Mac OS X 上での作業環境構築 (7)

11月19日 Mac OS X での作業環境構築 (マシン間のコピー)

12月3日 emacs 上での mecab-kanbun 自動処理

[2010年12月17日](予定)

銀雀山漢墓竹書殘簡の整理

— 中国古代の基礎史料 —

2010年1月より2010年3月まで 班長 浅原達郎

引き続き上海博物館藏楚簡にとりくんだ。鬼神之明・融師有成氏(1月15日～22日)を読み、競公瘡(1月29日～2月5日)は、まだ途中である。2月12日には、「文字編の文字編」の作成のための作業を試行的に行った。これで3年の研究期間を終了。本題の銀雀山漢墓竹書殘簡については、「銀雀山漢簡分類別竹簡番号リスト」を作成したのが成果である。

『曰古』第15号(3月19日)を発行。浅原の論文「漢初の紀年」を掲載した。

上海博物館藏戰国竹書を読む

— 中国古代の基礎史料 —

2010年4月より 2010年12月まで

班長 浅原達郎

名実ともに上海博物館藏楚簡を対象とした研究班として、出発する。研究機関は3年である。

まず、競公瘡を読み終え(4月16日～4月30日)、続いて孔子見季桓子(5月7日～7月2日)、莊王既成・申公臣靈王(7月9日～16日)、平王問鄭寿(7月23日)、平王与王子木(10月1日～10月8日)、慎子曰恭儉(10月15日～22日)、用曰(10月29日～12月10日)と読み進んだ。

『曰古』第16号(10月1日)を発行し、上海博物館藏楚簡の民之父母、從政、昔者君老・内礼の読書札記、および孔子見季桓子の配列修正案を掲載した。

陰陽五行のサイエンス

班長 武田時昌

陰陽五行説は、物類や自然現象の法則性や相互関係を説明する原理として大いに用いられた学説であ

り、中国の諸分野において独自の理論構造を生み出すパラダイミ的な役割を果たした。これまでの研究においては、陰陽五行説の成立過程や配当説、それを援用した漢代の政治思想等に詳しい考察が試みられてきた。しかしながら、三国時代以降の史的展開や理論構造の特質については、十分な検討がなされているわけではないように思われる。そこで、自然科学に限らず思想、宗教から文学、諸技芸に至る多彩な分野において、天人感应、物類相等等を含めた陰陽五行の説明原理が、実際にどのように活用されているのかを分析し、包括的、複眼的な見地からその構造と特色あるいは限界性を考究したいと考えている。

本研究班は、2004年より6年間行ってきたが、終了するのに際して、1月7日に大正大学にて、総合的な研究集会を東京で行った。というのは、会読テキストに選んだ『五行大義』の総合的な研究を行った駒澤大学の中村璋八博士をお迎えして、研究会の最終成果を報告しようと考えたからである。研究集会に、中村博士はあいにく昨年末から体調を崩され、出席していただけなかったことは遺憾なことであったが、班員に加えて関東で活躍する研究者も多数参加し、活発な議論を繰り広げることができた。2月20日に京都でも最後の研究会を行った。2回の集会において、2010年度より術数学研究会にグレードアップして研究を続行することを決議した。また、『五行大義』に関しても、巻三、論配聲音まで読み進めることができたので、今後さらに継続して会読を行うことにした。毎月の研究会には、中村璋八博士と共訳で訳注書（明治書院刊）を著した清水浩子、古藤友子両女士にも参加してもらったので、きわめて有意義な読解を行うことができたことも附記しておく。

2回の研究集会は、以下のようなプログラムである。

1月9日 東京ワーキング「中村璋八先生を囲む」での研究集会」

第1部 研究発表

「吉益東洞と陰陽五行説 — その医術と医論 —」 館野 正美

「相術における心の問題」 佐藤 実

「『黄帝内経明堂』系統の継承と変化の

考察」

閻淑 珍

第2部 座談会「陰陽五行説研究の新展開」

基調報告：「『五行大義』再読と新出土史料」

武田 時昌

2月20日 陰陽五行研究会

(会談)

『五行大義』巻三、論配聲音

(担当：宮崎順子)

(研究発表)

「釈宝誌の識詩について」 佐野 誠子

「江戸後期 土御門家の陰陽五行研究」

水野 杏紀

術数学 — 中国の科学と占術

班長 武田時昌

術数学は、自然科学の諸分野と易を中核とする様々な占術とが複合的に絡み合った中国に特有の学問分野である。しかし、包括的な見地からの考察がなされていないのは言うまでもなく、術数学を明確に定義し、その学問的輪郭を明らかにしたものすらほとんどない。東アジア世界の科学文化を構造的に把握し、学問的な本質や特色を明確にするには、近代科学の先駆的業績として離散的な発見、発明を時系列に並べて顕彰するだけではなく、当時の科学知識がいかなる役割を担っていたかを分析的に考察する必要がある。そのような研究を遅滞させている最大の要因は、術数学がほとんど未開拓のままに放置されているところにある。

これまでの科学史研究においては、天文占、風角、六壬、太乙、遁甲、九宮といった種々の占術は象数易とともに疑似科学として考察対象の枠外に置かれていた。しかしながら、西欧近代科学に対峙する中国伝統科学を構造的に把握しようとするならば、術数学というコンセプトにおいて科学と占術を包括的に考究すべきである。そこで、術数学を総合的に考察する研究プロジェクトを立ち上げることにした。

術数学の学問的起源は、先秦の方術まで遡る。漢代の思想革命において、陰陽五行説が儒家の政治思想に取り込まれていくなかで、方術から天文暦学、鍼灸医学、本草学といった自然科学が自立していく。ところが、方術的な自然探究のあり方がすっかり廃れてしまうわけではなく、中世、近世において子部

術数類に分類される書物＝術数書が多数著される。

したがって、易理、科学知識と占術の数理との理論的な関連性を解きほぐしながら、先秦の方術から中世、近世の術数学への変容がどのようなものであったのか、多角的、複眼的な視座から検討しなければならない。その手がかりとして、近年出土した簡帛資料には先秦から漢代に至る科学や占術に関する論説が満載されていることが注目される。また、本邦に残存した『五行大義』『医心方』や陰陽道資料にも、中世の術数書の佚文が多数引用されており、きわめて有益である。そこで、それらの読解を通して、術数学の全体像を解明し、理論構造の特色を探ることとした。

本年は、ゲストスピーカーの特別講演と班員による研究発表を行う研究集会を毎月1回程度開催し、同時に『五行大義』の会読を行った。また、天文暦法、医薬学、中国占術等の主要文献の読解ワーキングを月2、3回行った。取り上げたテキストは、張杲『医説』、張衡『靈憲』、方以智『物理小識』等である。特別講演及び研究発表は以下のような内容である。

6月6日

(藪内清博士追悼東アジア科学史研究集会)

「中国数学史研究の新たな地平」

武田 時昌

「浪速の和算家たち」 小寺 裕

6月19日 「岡本一抱『格致余論諺解』に見える中国医学概念の解釈」 熊野 弘子

7月19日 「中国出土竹簡情報最前線」

小澤 賢二

「出土術数文献による思想史研究」

大野 裕司

9月11日 「中山城山『黄庭内景経略注』について」 坂出 祥伸

「国際ワークショップ「東アジア術数学知識の交流と伝播」参加記」

三浦 國雄

10月2日 「古代養生説の理論的枠組み ― 出土文献を中心に」 白杉 悦雄
「ベトナム医学形成の軌跡」

真柳 誠

「阮朝時代のベトナム東医学」

NGUYEN THI Duong 阮氏楊

(ベトナム社会科学院・漢喃研究所研究員)

10月30日 「上清経における水と火のシンボリズム」 金志 玟

「四時宜食をめぐる議論と五行説」

古藤 友子

12月7日 「五行、五数と植物」 森村 謙一

東アジア地域間交渉の文書と言語 班長 岩井茂樹

「元代の法制」共同研究班の成果を立脚点として新たな共同研究の課題と方法を模索するために、試行的な共同研究として本研究班を発足させた。モンゴル支配のもとでは、言語の翻訳が行政の制度に組みこまれたほか、独自の伝統をもつ集団の制度や文化が接触し、融合や変形などが発生した。『元典章』礼部、工部に含まれる官牘文書の研究をつうじ、これらの過程の重要性を再確認するとともに、東アジアのエスニック集団の交錯と共存の過程を理解するための鍵がこうした過程にあること認識することができた。文字や言葉の交換にとどまらず、制度や文化の翻訳とでも言うべき一般的な問題にまで視野を拡大することも可能であろう。こうした観点にたつて、行政や外交の場において用いられた文章の書き手であった書吏の制度とその実態について理解を深めることを目的として『元典章』吏部に含まれる儒吏、職官吏員、令史、書吏、典史、訛史通事、宣使奏差、司吏、典史、獄典、庫子の条を会読するほか、研究報告と討議を交えて研究会を開催した。

2010年1月～3月の活動を下に示す。

1月19日 (研究報告)「金元北方雲門宗初探」

劉 暁

2月2日 (會讀)「『元典章』十二 吏部六 吏制 典史 獄典 庫子」 岩井 茂樹

2月16日 (研究報告)「17世紀日朝間の武器密貿易」 金 文京

3月16日 (研究報告)「中朝外交と吏文 ― 『同文彙考』読解のために」 矢木 毅

東アジア地域間交渉と情報

班長 岩井茂樹

16世紀の東アジアは社会経済の転形期を経験した。日本における銀の増産やポルトガル人を嚆矢とするヨーロッパ人の来航などがその要因であった。利益の追求に促されて、人々は海洋に乗り出して交易に従事した。「天朝」をもって自認する中国の王朝は海禁と朝貢制度を有力な手段として通交秩序を維持しようとしてきたが、この中国中心の秩序は私的な交易の拡大によって動揺することになる。

それを禁圧しようとする強硬策は「海商」を「海賊」の側に追いやるという結果をもたらした。また、陸上の辺境においても、関門における互市を楨杆として商業—軍事集団が形成された。朝貢からも貿易からも排除されていたモンゴルは通貢を求めたが、明朝朝廷がこれを峻拒したため、侵攻と略奪によって圧力を加える策を選択した。こうした情勢のなかで、言語とエスニシティを超えて、国家支配の枠から外れた人々が集団の一翼を担うという現象が現れ、軍事的な衝突もしばしば発生した。近世の社会と国家は、危機を揺籃として自らを形づくることとなった。

この時代、外からの脅威に対処するという観点から、中国では域外についての知識への希求が高まり、かつてない精度と情報量をもつ著述が出現した。1550年代、蘇州出身の鄭若曾は、倭寇防衛の責務を担った総督胡宗憲の幕下にあって、情報の収集と戦略の策定に従事し、『籌海図編』や『江南経略』などを編纂した。この共同研究班は、鄭若曾および同時代人の著述活動に焦点をあてて、当時の域外情報の流通と集積の様相を明らかにする作業をつうじて、転形期の東アジアの地域間交渉の特質を理解することを目的とする。

2010年4月～12月の活動を下に示す。

- 10月26日 (研究報告)「17世紀における泰山巡礼と香社・香会 — 靈巖寺大雄殿に残る題記をめぐる —」 石野 一晴
(紹介)「鄭若曾とその著述についての研究状況」 岩井 茂樹
- 11月16日 (會讀)『江南経略』汪鏜序 岩井 茂樹
- 11月30日 (會讀)『江南経略』鄭若曾引、顧存仁序 岩井 茂樹

12月14日 (會讀)『江南経略』凡例、卷一「舉要」

唐代文学の研究

班長 金 文京

1月30日

— 斎藤茂 (36 信講読)

陳先行氏 (上海図書館歴史文献中心高級研究院) 講演会

題目:「明清時代の稿本・抄本・校本の鑑定について」(中国語)

3年間の予定を終了し、『杜家立成』の訳注原稿をすべて作成、現在公表に向け整理、準備中である。

真諦三蔵とその時代

班長 船山 徹

本研究班の最終年度として今年度は原稿の作成と班員による研究発表を行った。班長の海外出張(ライデン大学に出講)に伴い10～12月の研究班を一時中断し班員諸氏の前稿準備に当たったが、年明け1月より会合を再び積極的に行う予定である。また例年どおり、研究班開催日の席上での討論のみならず、メーリングリストを通じて情報交換や補足訂正等を活発に行った。

1月15日 「「七事記」の再検討その他」

船山 徹

1月29日 「「大乘唯識論後記」「阿毘達磨俱舍釈論序」「広義法門経後記」の再検討」

船山 徹

2月12日 「真諦三蔵未同定佚文集成」

大竹 晋・池田 将則

2月26日 「「金光明経疏」佚文の再検討」

船山 徹

4月16日 「「金光明経疏」佚文の再検討」

船山 徹

4月30日 「「勝天王般若経序」の再検討」

船山 徹

5月14日 「真諦三蔵未同定佚文集成」

大竹 晋・池田 将則

5月28日 「『統高僧伝』警韶伝と慧曠伝の訳注」

金 志玟

6月11日 「真諦三蔵未同定佚文集成、真諦三蔵佚文補遺」 大竹 晋・池田 将則

6月25日 (発表)「吉蔵と摂論学派」中西 啓子

(会読)『続高僧伝』慧侃伝の訳注

金 志弦

中国古鏡の研究

班長 岡村秀典

後漢鏡・三国西晋鏡・紀年鏡に分けて銘文の集成と注釈を作成したほか、漢・三国・西晋時代の鏡とその関連文物にかんする研究発表をおこなった。また、班外から中国と日本の講師を1人ずつ招いて講演会を開いた。2010年度末発行の『東方学報』京都第86冊に後漢鏡と三国西晋鏡の銘文にかんする論文2本と集釋2本を投稿し、2012年刊行予定の『東方学報』には紀年鏡の集積1本とその関連論文3本を投稿する予定である。また、共同研究の話題として『人文』第58号に岡村「古鏡研究と収蔵家たち」を載せた。研究会の会読と講演会と研究発表は以下のとおり。

班員：

所内：金 文京、向井佑介、安藤房枝、福田美穂、朱 岩石、郭 永利

所外：下垣仁志（立命館大学）、森下章司（大手前大学）、光武英樹、廣川守（泉屋博物館）、山泰 幸（関西学院大学）、原田三壽（関西外国語大学）

1月26日	「紀年鏡銘の会読」	光武 英樹
2月2日	「三国両晋鏡銘の会読」	森下 章司
2月9日	「後漢鏡銘の研究」	岡村 秀典
2月16日	「紀年鏡銘の会読」	光武 英樹
3月23日	「紀年鏡銘の会読」	光武 英樹
3月30日	「後漢鏡銘の会読」	岡村 秀典
4月6日	「三国両晋鏡銘の会読」	森下 章司
4月13日	「紀年鏡銘の会読」	光武 英樹
4月20日	「後漢鏡銘の会読」	岡村 秀典
4月27日	「三国両晋鏡銘の会読」	森下 章司
5月11日	「紀年鏡銘の会読」	光武 英樹
5月18日	「後漢鏡銘の会読」	岡村 秀典
5月25日	「三国両晋鏡銘の会読」	森下 章司
6月1日	「紀年鏡銘の会読」	光武 英樹
6月8日	「後漢鏡銘の会読」	岡村 秀典
6月15日	「三国両晋鏡銘の会読」	森下 章司
6月22日	「紀年鏡銘の会読」	光武 英樹
6月29日	「後漢鏡銘のまとめ」	岡村 秀典

7月6日 「漢鏡七期～三国鏡の銘文」

森下 章司

7月13日 「紀年鏡銘の会読」 光武 英樹

7月20日 「三国両晋鏡銘のまとめ」 森下 章司

9月28日 「紀年鏡銘の会読」 光武 英樹

10月5日 「有意味的選択 — 以徐州・日本出土の方格規矩四神鏡為例，再論三角縁神獸鏡的起源」

楊 金平（中国・徐州工程学院）

10月12日 「紀年鏡銘の会読」 光武 英樹

10月19日 「根津美術館新収鏡の紹介と蛍光X線分析」 廣川 守

10月26日 「紀年鏡銘の会読」 光武 英樹

11月9日 「紀年鏡銘の会読」 光武 英樹

11月16日 「後漢鏡における呉派と淮派」

岡村 秀典

11月30日 「柿蒂内行花文鏡群と後漢鏡の系譜」

上野 祥史（国立歴史民俗博物館）

12月7日 「後漢の鎮墓陶文と鏡銘」 金 文京

12月14日 「紀年鏡銘の会読」 光武 英樹

東アジア初期仏教寺院の研究 班長 岡村秀典

京都大学デジタルアーカイブでの公開を目的とし

て、東方文化研究所が1938～1944年に調査した中国山西省雲岡石窟の写真を石窟ごとに整理した。開催した研究会は以下のとおり。

4月13日 「研究会打合せ」 岡村 秀典

4月27日 「雲岡石窟第一洞」 安藤 房枝

5月11日 「雲岡石窟第一洞」 安藤 房枝

5月25日 「雲岡石窟第一洞」 安藤 房枝

6月8日 「雲岡石窟第一洞」 安藤 房枝

6月22日 「雲岡石窟第二洞」 安藤 房枝

7月13日 「雲岡石窟第二洞」 安藤 房枝

9月28日 「雲岡石窟第二洞」 岡村 秀典

10月12日 「雲岡石窟第三洞」 向井 佑介

10月26日 「雲岡石窟第三洞」 向井 佑介

11月9日 「雲岡石窟第三洞」 向井 佑介

12月14日 「雲岡石窟第四洞」 向井 佑介

中国社会主义文化の研究 班長 石川禎浩

【期間】2006年4月—2010年3月

【時間・場所】隔週金曜日 14 時 00 分—17 時 00 分
本館セミナー室 4 (311 室)

【概要】冷戦体制の終結以後、いわゆる“社会主義の文化”は世界中で風化しつつあるが、今日の中国には、社会主義的な文化様式やイデオロギーがなお根強く残存している。現にそれらは、一般民衆の思考様式になお影響を与え、現体制の文化政策を方向付け、そして中国共産党史の歴史記述を強く規定している。2006 年 4 月より 4 年にわたって行ってきた本研究班は、20 世紀中国の社会主義文化の諸相を主に歴史的視点から研究することを目指し、最終年にあたる今年は、1-2 月に以下の研究報告・討議を行うと共に、共同研究の成果として、報告論文 17 篇を収めた『中国社会主義文化の研究』を 5 月に刊行して終了した。

1 月 22 日 「近代上海における映画女優 (1921～1937)」 張 雯

2 月 5 日 「小説『劉志丹』事件をめぐる」 石川 禎浩

2 月 19 日 「1950 年代の中国の対日米外交 — 孤立打開策としての留学生・華僑帰国促進政策」 王 雪萍

現代中国文化の深層構造

班長 石川 禎浩

【期間】2010 年 4 月—2014 年 3 月

【時間・場所】隔週金曜日 14 時 00 分—17 時 00 分
本館セミナー室 4 (311 室)

【概要】2010 年 4 月に発足した共同研究班「現代中国文化の深層構造」は、百花繚乱の如く見える現代中国文化が内包している歴史の刻印や記憶、そして政治との軋轢を、20 世紀初頭から今日に到るおよそ 100 年を対象に、歴史学的手法によって解明しようとするものである。共同研究班 B として共同研究班員を公募した本研究班は、主に研究報告の発表とそれの討議を行うという形式で、4-12 月に以下の日程で 11 回にわたり研究活動を行った。なお、本研究班は、京都大学現代中国研究拠点（人文研附属現代中国研究センター）の研究グループ 1 の事業という性格を合わせ持っている。

4 月 23 日 「共同研究班 “現代中国文化の深層構造” を始めるにあたって — 毛沢東の

非公式著作集を例に」 石川 禎浩

5 月 14 日 「孫文と現代新儒学：主として「哲学範疇」において」 中村 哲夫

5 月 21 日 「王清穆『農隱廬日記』より見た民国江浙紳士の活動について」 小野寺史郎

6 月 11 日 「クルジャ事件をめぐる中ソ交渉 (1944 年～1945 年)」 吉田 豊子

6 月 25 日 「中共冀魯豫区根拠地の象徴と民俗利用」 丸田 孝志

7 月 9 日 「抗日戦争期の曹禺作品上演 — 重慶・上海・延安」 瀬戸 宏

10 月 1 日 「アジア・太平洋戦争期におけるアメリカ華僑の動態と特質」 菊池 一隆

10 月 15 日 「広西土司と民族識別」 山崎 岳

11 月 12 日 「近代中国の自己認識への道程：雑誌『孤軍』における王学文を中心に」 三田 剛史

11 月 26 日 「日中外交における東部内モンゴル — 勢力圏外交の潮流の中で」 鈴木 仁麗

12 月 10 日 「留学生・翻訳・引用からみる日中地理学交流：1920-40 年代を中心に」 柴田 陽一

南アジア北辺地域における文化交流の諸相

班長 稲葉 穰

本年は、南アジア北辺地域における古代から近代にかけての文化交流、文化変容にかかわる研究報告と並行し、11 世紀半ばに著された Gardizi の歴史書 Zayn al-Akhbar におさめられた中央アジア民族誌に関する記述の会読と訳注作成を行った。これは、12 世紀以降のインド・イスラム時代において、支配者たるテュルク (truska) がどのような存在として理解されたのかを考察する材料とするためである。各回の内容は下記の通り。

1 月 15 日 (研究報告) 「帝政ロシア・ソ連領中央アジアからアフガニスタンを目指して」 帯谷 知可

2 月 5 日 (研究報告) 「カシミールへの人々の往来、およびその経路：13 世紀から 16 世紀まで」 小倉 智史

2 月 19 日 (研究報告) 「本年度の研究班総括と新

- 刊研究紹介」 稲葉 稜
- 4月23日 (会読)「Zayn al-Akhbar」
担当 稲葉 稜
- 5月8日 (研究報告)「7世紀から12世紀までのチベットの西方への進出と古チベット語碑文」 岩尾 一史
- 5月21日 (会読)「Zayn al-Akhbar」
担当 二宮 文子
- 6月5日 (研究報告)「彫刻技術から見たガンダーラ・クシャン朝時代の一画期」
内記 理
- 6月18日 (会読)「Zayn al-Akhbar」
担当 二宮 文子・宮本 亮一
- 7月3日 (特別講演)「Ashoka, the Past Buddhas and Kapilavastu in the Light of Archaeological Excavations」
Giovanni VERARDI
- 7月16日 (会読)「Zayn al-Akhbar」
担当 宮本 亮一
- 9月17日 (特別講演)「Reconsidering the Presence of Buddhism in Eighth-Ninth Century Gandhara and Eastern Afghanistan」 Giovanni VERARDI
- 9月25日 (研究報告)「『ターリーヒ・ラシーディー』のチベット・カシミール誌」
小倉 智史
- 10月8日 (会読)「Zayn al-Akhbar」
担当 井谷 鋼造
- 10月23日 (研究報告)「2010年度レバノン・ティール、ローマ時代地下墓の調査」
内記 理
- 11月26日 (特別講演)「The Khataynameh as one of the last documents of the Silk Road」
Ralph KAUZ
- 12月3日 (会読)「Zayn al-Akhbar」
担当 川本 正知

研 究 状 況 (2011 年)

公募型研究班

情報処理技術は漢字文献からどのような情報を抽出できるか — 人文情報学の基礎を築く

班長 山崎直樹

本研究課題は、さまざまな情報処理技術 — マークアップ言語によって構造化されたテキストの処理、日本語の解析で成果を挙げている形態素解析・構文解析技術、n-gram モデルによるデータマイニングの技術、テキスト間の近縁性を調べる系統学的分類法、ネットワーク構造を抽出し、その構造を可視化する技術 — を用いて、あらゆる角度から漢字文献の解析を試みる予定である。

本年は2月4日に最初の研究会を開催し、2月18日にシンポジウム『文字と非文字のアーカイブズ／モデルを使った文献研究』を人文研で開催した。発表タイトルおよび発表者は以下の通り。

「文字アーカイブズの現在」

岡本 真

「動画のテキスト処理」 安岡 孝一

「写真の検索可能性について考える」

守岡 知彦

「ネットワーク分析から見た共観福音書間の比較研究」 三宅 真紀

「異なる文献間の数理的な比較研究をふり返る」 師 茂樹

さらに7月8日に研究会を開催し、ネットワーク分析を用いた文献解析の可能性を議論した。この議論を9月30日の研究会でさらに突き詰め、11月19日に公開セミナー『ネットワーク科学は道具箱』を人文研で開催した。講師と発表テーマは以下の通り。

「ネットワーク解析の道具を理解しよう」 藤原 義久

「大規模社会ネットワーク分析の事例と展望」 湯田 聴夫

また、上記公開セミナーに先立つ 11 月 4 日の研究会では、メタデータとその処理に関する議論をおこない、『情報の構造とメタデータ』と題するシンポジウムを 2012 年 2 月 24 日開催で決定した。

グローバル化する思想・宗教の重層的接触と人文学の可能性

班長 奥山直司

初年度は班員間で問題意識を共有することに努め、同時に調査と関連文献の収集を行った。2 年目は共通テーマを巡る、各班員の関心に沿った研究発表を進めると共に、その過程でテーマとして浮かび上がったエンゲイジド・ブッディズム等の仏教の新潮流に的を絞った公開講演会・発表会を、この分野における内外の代表的な研究者を招聘して開催した。こうしたことを通じて、仏教を始めとする諸宗教のグローバルな動きを複数文化の接触という観点からとらえ直すことに手応えを感じている。

3 月 29 日 「アーユルヴェーダのグローバルな広がり：生命の智から『伝統』医療、そして『癒し』へ」 加瀬澤雅人

「明治セイロン留学生」 奥山 直司

5 月 21 日 「アメリカにおける日系仏教再考」

守屋 友江

「グローバル化にともなう仏教概念の応用 — グライ・ラマ 14 世の思想を中心に —」 辻村 優英

6 月 25 日 「南アジアイスラーム研究におけるシンクレティズム論超克の試み」

二宮 文子

「ネオリベラリズムと進化論：プロテスタントの世界観」 藤本 龍児

7 月 23 日 「エンゲイジド・ブッディズムの定義とその課題」 阿満 利磨

コメンテーター：泉 恵機、シルヴィオ・ヴィータ、川橋範子

7 月 24 日 「グローバリゼーションと伝統宗教 — シンガポール・ヒンドゥー教の事例によせて」 山下 博司

「進化論と狩野芳崖筆『悲母観音図』」

佐藤 道信

10 月 15 日 「植民地朝鮮における宗教政策の導入

と宗教的領域の再編成」 金 泰勲

「ヒンドゥークシュ南北に於けるイスラームとインド宗教の接触」

稲葉 稜

10 月 16 日 「グローバル化の時代における「社会参加仏教」」

ランジャナ・ムコパディヤヤ

11 月 19 日 「インドの「エンゲイジド・ブッディズム」 — B. R. アンベードカルの仏教改宗と現代インドの仏教運動 —」

舟橋 健太

「イスラーム法事案をめぐる信徒の世界と非信徒の世界の位相」 — ヒジャブ論争を通じてみた教義と対立の構図 —」 四戸 潤弥

生命知創成に向けたプラットフォームの構築

班長 小林傳司

生物学研究は、1970 年代を起点として、実験室に閉じたかたちで営まれていた自然哲学的色彩を伴う研究から、医学領域のみならず人々の日常生活における生と死の領域全般に具体的な影響を持つ生命科学へと変容を遂げた。このような科学の構造転換の状況において、生命科学を社会の中にあらためて位置づけ、社会の視点を加味した新しい「知」として把握しなおすことが必要である。本研究班では、このような社会的視野と見識を備えた生命の科学に関する新しい捉え方を「生命知」と呼ぶこととし、その創出のために、科学者、社会学者、人類学者、哲学者、歴史学者などが共同で検討を行う。

本年度は、昨年度に引き続き、細胞の機能や生命システムの理解を目指す研究分野をテーマとして取り上げ、情報共有を行うための研究会を開催することにした。

第 1 回目の研究会では、遺伝子概念とその名称の変化についての検討を行い、第 2 回目の研究会では、生物物理学の手法を用いた生命システムの理解をめざす研究を取り上げた。11 月に行った人文研アカデミーの特別セミナーでは、20 世紀後半のライフサイエンスの発展を、ゲストの中村桂子氏の講演をもとに多様な分野の参加者とともに検討した。

現在、報告冊子を作成中である。

平成 23 年

9 月 8 日 第 1 回研究会

(研究報告)「科学的用語としての「遺伝」・「遺伝子」の由来」 松原 洋子

12 月 5 日 第 2 回研究会

(研究報告)「細胞のおしあいへしあいによる生物の形づくり」 杉村 薫

11 月 16 日 人文研アカデミー 特別セミナー

「ライフサイエンスの半世紀 ― 歴史を振り返り現在を考える」

中村桂子, 小林傳司, 加藤和人

ヨーロッパ現代思想と政治 班長 市田良彦

公募研究班 A「ヨーロッパ現代思想と政治」は、市田良彦・神戸大学国際文化研究科教授を班長とし、全国から計 20 名の班員の参加を得て、2011 年 4 月に発足した。期間は 2013 年度末までの 3 年間で予定している。この研究班の目標は、ポストモダニズム・ポスト構造主義とも呼ばれる、1960 年代以来のフランスを中心とするヨーロッパの現代哲学・思想を、現代のマルクス主義、ポスト・マルクス主義の政治運動とのかかわりで批判的に再検討する点にある。その際、特に日本の現代の思想・政治状況との異同の検討にも留意している。この研究班では 4 月以来、以下の 4 回の研究会・講演会を組織した。研究班の問題設定を、第二次世界大戦から現在にいたる政治・思想状況の変動を視野に入れながら、どのように具体化してゆくかが焦点となっている。

① 2011 年 4 月 8 日 (金)

「問題設定 ― 戦後政治のなかの哲学者群像」 市田 良彦
各班員の自己紹介・抱負

② 2011 年 6 月 25 日 (土)

「『レ・タン・モデルヌ』創刊直後の政治的布置 ― サルトル, メルロ＝ポンティ, アロン」 佐藤 淳二
「『プレザンス・アフリケーヌ』誌とその周辺」(フランツ・ファノンを中心に) 崎山 政毅

③ 2011 年 10 月 8 日 (土)

「〈国家論なき政治論〉からドゥルーズ／ガタリへ」 小泉 義之

「誰が経帷子を縫ったのか ― 縫合をめぐるいくつかの事情」(アルチュセール, ラカン, ミレール, ルクレールをめぐる) 信友 建志

④ 2011 年 6 月 24 日 (金)

Journée de travail Rousseau-Rawls : Histoire, raison, fondation

― セリヌ・スペクトール講演「ルソー／ロールズ：歴史・理性・創設」および討議

京大人文研(富永茂樹・班長)「啓蒙とフランス革命 ― 1793 年の研究」班、北海道大学(佐藤淳二・研究代表者)「フランス啓蒙思想における〈戦争〉表象と、〈平和〉表象の包括的研究」科研研究グループとの共催

このほか、2011 年 5 月 14 日 (土) には、市田良彦、小泉義之、王寺賢太の班員の参加を得て、人文研アカデミー「政治を考える」セミナーシリーズ 1「アルチュセール」を開催した。2011 年度中には、さらに 2 回の研究会のほか、2012 年 2 月 5 日 (日) に、西川長夫『パリ五月革命私論 始まりとしての 68 年』の刊行を記念して、人文研アカデミー・シンポジウム『日本から見た 68 年 5 月』を予定している。

人文学研究部

トラウマ経験と記憶の組織化をめぐる領域横断的研究 ― ナラティヴからモニュメントまで ―

班長 田中雅一

初年度はメンバー間で基本的な問題を共有することに徹し、ある程度達成できた。このため 2 年目はトラウマ研究で目覚ましい成果をあげている研究者 5 名を招聘し、発表をお願いした。また後期では若手研究者や大学院生を中心にハーマンの『心的外傷と回復』会読を企画した。いくつかの研究発表を通じて 3 月 11 日の東日本大震災によって生じた多大な被害やその後の心的外傷問題は、本研究でも取り

組まなければならない課題であることを認識した。

2月14日 「野蛮な過去とトラウマ：1950年代日本のアサイラム空間における〈文学〉と〈政治〉」 有蘭 真代
「不確かな生：エチオピアにおけるHIV 不一致カップルの経験」

西 真如

4月11日 「昨年度のトラウマ研活動をふりかえって」 田中 雅一
「出来事はいかに〈いまここ〉に立ち現われるか：狩猟採集民グイの談話分析から」 菅原 和孝

4月25日 「証言を「聴く」こととその技法：刑事事件における捜査・裁判を事例として」 高木光太郎
「人が「過去の出来事」を語るというとき、実のところ、何を語っているのか：裁判のなかの4つの語りから」

浜田寿美男

5月9日 「元特攻隊員の回想：エリクソンの見地からの分析」 高橋 正実
Last Kamikaze の上映

5月30日 「あの日、あの場にいた、あの人を想起する：出会い損ねてきた「他者」との対話を求めて」 三田 牧
「ホロコーストと「和解」：プラハの事例を通して」 小田 博志

6月6日 「環状島モデルからみえてくること：東日本大震災という文脈」『環状島＝トラウマの地政学』 宮地 尚子
書評会コメンテーター：萩原 卓也
花田里欧子
石井 美保

6月20日 「トラウマ経験とインナーチャイルド：セックスワーカーのライフ・ストーリー調査から」 田中 雅一
「トラウマの解体に抗して：日本社会の『多文化化』における在日コリアンの再帰性」 岡田 浩樹

7月11日 「芸術家になるために：ライフ・ストーリーからみる苦悩の経験」

渡辺 文

「生きのびて在ることの了解不能性：インド・パキスタン分離独立時の暴力の記憶と日常生活」 田辺 明生

10月31日 「「語らないで在ること」と〈P-ness〉の肯定：フェイス・サルベーション教会における癒しの儀式にみる女性信者の苦悩と救済」 石井 美保
(会読)『心的外傷と回復』1, 2章

福西加代子

11月14日 「奴隷という「経験」：アフリカ系アメリカ人のトラウマとオリシャ崇拝運動」 小池 郁子
(会読)『心的外傷と回復』3, 4章 飯塚 真弓

12月19日 「ナショナルな歴史となったトラウマ―先住民の経験」 窪田 幸子
(会読)『心的外傷と回復』5, 6章 河西瑛里子

移民の近代史 ― 東アジアにおける人の移動 ―

班長 水野直樹

1月8日 「朝鮮人満洲農業移民政策の衰退過程―「満洲開拓政策基本要綱」の策定(1939年)から終戦(1945年)まで―」

金 永哲

「植民地時期(1910-1941) 京都帝国大学の朝鮮人留学生研究」 鄭 鍾賢

2月12日 「門司＝釜山労働共済会小論 ― 海峡を跨ぐ「職業紹介」団体とその担い手たち ―」 坂本 悠一

「近代日本における人と土地の結びつき ― 外国人の土地所有という視点から ―」 安岡 健一

3月12日 共同研究のまとめについて

日本・アジアにおける差異の表象 班長 竹沢泰子 第1回

「日系／アジア系アメリカ人の人種表象」

場所：京都大学東京オフィス

1月8日 Introduction Yasuko Takezawa
Asian/Japanese Americans and the U.S. Social Formation Gary Okihiro

Vernacularizing Racism: Japanese Immigrants and the Language of Race

Fuminori Minamikawa

The Unbearable Whiteness of Being: Representations of Japanese/Asian Americans in Contemporary Sociological Theory

Michael Omi

Postcolonial Nihonmachi: Commodifying Racial Differences in the Age of Globalization

Sachiko Kawakami

Japanese Americans and Progressive Political Identity: Intergenerational Portraits

Mari Matsuda

Comments: Eiichiro Azuma and Masumi Izumi

第2回

「日系／アジア系アメリカ人の人種表象」

会場：人文科学研究所

1月10日 Introduction Yasuko Takezawa
Colorblind?: The Contradictions of Racial Classification” Michael Omi
Comments: Mari Matsuda

Critical Race Reconstructions: Japanese/Asian-American Interventions (narratives) in the Black-White Binary of American Racial Discourse

Charles Lawrence

Comments: Gary Okihiro (Columbia University)

第3回

「人文学とゲノム研究のインターフェイス」

人類学研究交流会と共催

場所：京都大学人文科学研究所

1月22日 Introduction Kazuto Kato
Between Political Equality and Human Biological Difference: Interpreting African Genetic Diversity in American Genome Science Duana Fullwiley
Biomedical Genomics, Identity and National Politics Amy Hinterberger
Exploring the Purchases and Pitfalls of

a Pan-Asian framework in Human Genetics Studies” Shirley Sun

Genome Diversity and Regional Differences in Disease Genes

Katsushi Tokunaga

第4回

「人文学とゲノム研究のインターフェイス」

場所：京都大学人文科学研究所

1月23日 Beyond the critique: How understanding genomic racialization can improve-disease research Michael Montoya
How should we think of “population” in population genetics? Hiroki Oota
Comment: Troy Duster

第5回

場所：人文科学研究所

2月19日 「現代日本のレイシズム点描 — 朝鮮学校への攻撃・排除を事例に」

板垣 竜太

「沖縄研究の変貌と「沖縄人」という問題構成の現在 — 近現代史研究者の視点から」

戸邊 秀明

第6回

「文理融合ワークショップ」 「沖縄人の表象をめぐって」 人類学研究交流会と共催

場所：沖縄県立博物館

3月25日 「沖縄の歴史 — 平和・自立・共生への道」

大城 将保

第7回

「文理融合ワークショップ」 「沖縄人の表象をめぐって」

場所：ホテルグランビュールガーデン沖縄

3月26日 「石垣島名蔵地区の長期的景観史研究」

山口 徹

「貝塚時代後期前半（弥生時代～古墳時代並行期）の文化と社会」

新里 貴之

「人骨形質から見た沖縄人」

土肥 直美

「ゲノム人類学にみるウチナンチュの特徴」

木村 亮介

第8回

「文理融合ワークショップ」 「沖縄人の表象をめぐって」

場所：ホテルグランビュールガーデン沖縄

3月27日 「The Okinawan Reality Show：揺れる「沖縄人」、掠れる「沖縄口」」

前高西一馬

「占領期日本における「混血」表象をめぐって」

成田 龍一

「抵抗する映画 ― 映画の中の沖縄表象」

高 みか

第9回

6月18日 「20世紀初頭の社会福祉における人種主義と部落問題」

関口 寛

コメント：金仲燮（人文科学研究所／慶尚大学）、通訳：李昇燁（佛教大学）

「小林よしのり漫画に描かれる天皇・植民地帝国・レイシズム (Emperor, Empire, and Race in Kobayashi Yoshinori's Manga World)」

タカシ・フジタニ

コメント：成田 龍一（日本女子大学）、北原 恵（大阪大学）

第10回

海外学会発表：国際人類学民族学連合大会セッション

“Changing Representations of Indigenous and Migrant Groups in Globalizing Japan: Genes, Bones, and Cultures”

場所：西オーストラリア大学

7月5日 Save As History: Jinruikan Incident in Okinawan Modernity

Kazuma Maetakenishi

Differences in the Prevalence of Tuberculosis Mortality Among the Ainu and the Ethnic Japanese during the Early Twentieth Century: Socio-Economic and Political Structural Influences

Noriko Seguchi

The Ainu of Japan in the Indigenous Movement: International and Domes-

tic Aspects

Shunwa Honda (Henry Stewart)

Being the Muslim “Other” in Japan: The Experiences of Pakistani Muslims and their Japanese Wives

Masako Kudo

The Lesson of the Great Kobe Earthquake and Changing Representations of Multicultural Coexistence in Japan

Yasuko Takezawa

How Do Physical Anthropologists Have Committed Themselves on Genome Medicine?

Hiroki Oota

第11回

合宿研究会

場所：KKR びわこホテル

7月30日 「「混血」についてディスカッション」
南川 文里, 河上 幸子, 工藤 正子,
日下 渉, 竹沢 泰子, 岩渕 功一,
高 みか, 前高西 一馬

第12回

7月31日 「「科学と社会」ディスカッション」
「「見えない人種」ディスカッション」
川島 浩平, 坂野 徹, 加藤 和人,
斉藤 綾子, 北原 恵, 金 仲燮,
関口 寛

全体ディスカッション

第13回

UCLA と合同主催シンポジウム

“Japanese and Asian Americans: Racializations and Their Resistances”

場所: University of California, Los Angeles

10月13日 (木)

Welcome speech

Lane Ryo Hirabayashi

Introduction Yasuko Takezawa

Part I

Racial Formation in the Representations of Japanese in Early American Cinema”

Gary Okihiro

(co-authored with Daniel Valella)
 Vernacular Representation of Race
 and the Making of an Ethno-racial
 Community of Japanese in Los
 Angeles Fuminori Minamikawa
 Gender and Racial Representation:
 the Japanese Immigrant Community
 in Los Angeles before World War II

Yuko Matsumoto

Comments (Valerie Matsumoto) &
 Discussion

Part II

Race and Conflict in the Study of
 Japanese Americans Lon Kurashige
 The Making of Japanese Racial Identity
 in America, and Why Are There
 NoImmigrants in Postwar Japanese
 American History? Eiichiro Azuma
 Barefoot Journalists and the Making of
 Asian America, 1969-1974

Karen Ishizuka

Comments (Lane Ryo Hirabayashi)
 & Discussion

第 14 回

UCLA と合同主催シンポジウム

“Japanese and Asian Americans : Racializations
 and Their Resistances”

場所 : University of California, Los Angeles

10 月 14 日 (金)

Part III

The Unbearable Whiteness of Being :
 Representations of Japanese/Asian
 Americans in Contemporary Sociologi-
 cal Thought

Michael Omi

The Nakayoshi Group: Post-War
 Okinawan Immigrant Women Arti-
 culation of Okinawan Identity in
 America

Wesley Ueunten

Japanese American Artists With and
 Against Representations : An Anthro-
 pological Study Yasuko Takezawa

Japan/America : Mixed Race History
 and Prospects Duncan Williams

What Brings Korean immigrants to
 Japantown?: Commodifying Racial
 Differences in the Age of Globalization

Sachiko Kawakami

Comments (Clement Lai, California
 State University, Northridge) &
 Discussion

第 15 回

合宿研究会

場所 : KKR びわこホテル

11月19日 「「見えない人種」ディスカッション」

「「混血」ディスカッション」

川島 浩平, 関口 寛, 前高西一馬,
 北原 恵

第 16 回

11月20日 「「科学と社会」ディスカッション」

加藤 和人, 日下 渉, 河上 幸子,
 南川 文里, 竹沢 泰子

総合ディスカッション

第 17 回

12月3日 「The Hyongpyongsa : The Abolition of
 Social Discrimination against
 Paekjong」 金 仲燮

「「見えない人種」と中国国民統合のポ
 リティクスー『中華大家庭』表象のエ
 スニシティとジェンダー」松本ますみ

第 18 回

12月4日 「「不浄」から「野生の聖」へー南イ
 ンドのプータ祭祀におけるヒエラル
 キー, 憑依, 環境ネットワーク」

石井 美保

「「牡丹社事件」にみる人種表象」

大浜 郁子

近代古都研究

班長 高木博志

最終年度は前半で研究報告が終わり, 後半は研究
 成果報告書の作成にかかった。研究会を積み重ねる
 中で, 奈良・京都の古都だけではなく, 城下町の歴
 史性も議論となった。その成果として, 18 編の論

考からなる『近代日本の歴史都市 ― 古都と城下町』（思文閣出版、2013年）を刊行した。なお都市論一般については、『人文学報』104号（2013年）「近代都市の諸相」特集号としてまとめた。

班員 岩城卓二 金文京 高階絵里加 水野直樹 黒岩康博（以上所内） 伊従勉 中嶋節子 藤原学 谷川穰 福家崇洋 小林丈広 青谷美羽 秋元せき 飯塚一幸 井上章一 井原縁 岩本馨 内田和伸 大場修 岡村敬二 長志珠絵 小野健吉 小野芳朗 川口朋子 河西秀哉 桐浴邦夫 工藤泰子 清水愛子 清水重敦 鈴木栄樹 ヘンリー・スミス 高久嶺之介 高田祐介 田島達也 田中智子 谷山正道 辻岡健志 中川理 並木誠士 羽賀祥二 幡鎌一弘 原田敬一 日向進 廣瀬千紗子 福井純子 福島純子 福島栄寿 丸山宏 毛利紫乃 本康宏史 山上豊 山田誠 吉井敏幸 吉田栄治郎

2011年

1月22日 「城下町尼崎と士族の19世紀」

岩城 卓二

「三都論」と「三府論」 丸山 宏

3月12日 「「南都」・「古京」・「平城京」― 宮址保存と奈良―」 黒岩 康博

「1950年代京都における高山市政の一断面」 福家 崇洋

4月16日 「明治期京都を訪れた外国人皇族たち― ロシア・オーストリア・暹羅（シャム）の皇族たち―」 高久嶺之介
「露伴・（荷風・）潤一郎の東京論」

藤原 学

5月28日 「京都における風致地区指定の経緯と重層する意図をめぐって ― 関与した人物からの検討と接続する事項との関係―」 中嶋 節子

「技術者・町組織など多様な観点から捉える京都の都市改造」 中川 理

6月18日 「社寺建築の造営からみた近代京都 ― 創建神社を中心に ―」 清水 重敦
「大正・昭和期における京都御所・御苑」 河西 秀哉

7月23日 「明治期京都における仏教をめぐる諸相」 谷川 穰

「近代日本「教育拠点」配置をめぐる文部省と府県 ― 高等学校設置問題の基礎的考察 ―」 田中 智子

「歴史都市と修学旅行 ― 1910年代の奈良女子高等師範学校の事例 ―」

高木 博志

第一次世界大戦の総合的研究

班長 山室信一・岡田暁生

本年は15回の研究会を開催した。通常の報告が7回。とりわけアジアと大戦という問題に力点が置かれた。次に2010年から始めた小シンポジウムが2回。ここでは、これまでの研究成果を踏まえた上で、研究班の新たな展開を探る試みがなされた。最後に、本年の活動の特徴づけるものとして合評会が挙げられる。これは、シリーズ「レクチャー 第一次世界大戦を考える」（人文書院）が、2010年から2011年にかけて6冊出版されたことをうけたものである。なおこの合評会は公開とし、研究成果の社会還元にも努めた。

1月8日 「1917年春のフランス軍兵士の「反乱」」 松沼 美穂

1月24日 「ドイツ、中欧、ヨーロッパ統合 ― 結節点としての第一次世界大戦」

板橋 拓己

2月12日 「小シンポジウム：「未完の戦争」としての第一次世界大戦」

小関 隆・藤原 辰史
（パネラー 津田博司）

4月9日 「第一次世界大戦前夜までのオスマン帝国 ― 帝国・政治社会・国際関係」

鈴木 董

4月23日 「合評会 藤原辰史『カブラの冬』をめぐって」 服部 伸

5月16日 「戦争神経症と表象の終焉」

立木 康介

5月30日 「合評会 岡田暁生『「クラシック音楽」はいつ終わったのか?』をめぐって」

片山 杜秀

6月11日 「合評会 山室信一『複合戦争と総力戦の断層』をめぐって」

- 小島 亮, 小野寺史郎 3月4日(会読 36[再読 11])
 7月11日「外交指導者としての加藤高明 ― 二十一ヵ条要求問題を中心として」 Vadhula-Srautasutra 10, 4, 1-32
 奈良岡聰智 堂山英次郎
- 9月24日「合評会 河本真理『葛藤する形態』をめぐって」 高階絵里加
 10月8日「合評会 久保昭博『表象の傷』をめぐって」 塚原 史
 11月5日(小シンポジウム)「西洋の没落? ― 思想史のなかの第一次世界大戦」
 王寺 賢太
 (パネラー 田辺 明生, 池田 浩士, 森本 淳生)
 11月12日「合評会 小関隆:『徴兵制と良心的兵役拒否―イギリスの第一次世界大戦経験』」 後藤 春美, 草光 俊雄
 11月28日「第一次世界大戦中の中国人労働者研究の現在」 小野寺史郎
 12月10日「マンダラ国家から国民国家へ ― 東南アジア史のなかの第一次世界大戦」 早瀬 晋三
- 王権と儀礼** 班長 藤井正人
 王権と儀礼との関係を古代インドの王権儀礼を中心に研究することを目的とした本共同研究は、2011年3月で終了した。ヴェーダ文献を基礎資料にしたが、インド学の諸分野のほか、言語学、歴史学、考古学、美術史、人類学などの複数の視点から資料を分析するとともに、さまざまな時代と地域における王権と儀礼に関わる問題を比較研究の対象とした。研究成果として、ヴェーダ王即位式関係資料のうち未訳のもの2種に関して、校訂原典と英訳に詳細な解説と索引を付した英文の研究書の出版を準備している。
- 研究会記録
 1月14日(会読 34[再読 10])
 Vadhula-Srautasutra 10, 3, 29-73
 小林 正人
 1月28日(会読 35)
 Vadhula-Srautasutra 10, 14, 46-76
 大島 智靖
- 灌頂と即位の文化史** 班長 藤井正人
 本共同研究(2011.4-2014.3)は、共同研究「王権と儀礼」(2005.4-2011.3)を進展させるため、テーマを新たにして発足させるものである。前共同研究では王権とそれに関わる儀礼全般を対象としてきたが、この共同研究では、古代インドなどにおいて即位や入門の儀礼で中心的な行為となっている「灌頂」に焦点をあて、その行為の基本形態、類型、変化、伝播、異文化との混交などに関して、文化史のアプローチから研究する。広範囲の地域と時代にわたる文化事象として、古代インドの、王即位式をはじめとするさまざまな祭式に現れる「灌頂」から、インド、中国、日本の仏教の入門入信儀礼における「灌頂」、さらには、天皇の即位儀礼としての「灌頂」などが研究の対象となりうる。
- 研究方法としては、各種事例の比較研究を進めるとともに、他分野の研究者に負担をかけない形で文献資料の基礎研究をも行なう。具体的には、課題に関する研究報告を集中的に行なう「研究集会」と、古代インドの王即位式に関するサンスクリット資料の校訂と訳注を行なう「会読」という2種の研究会を、切り離した形で開催して研究を進める予定である。
- 研究会記録
 4月1日(会読)
 Vadhula-Srautasutra 10, 15, 1-37
 梶原三恵子
 12月9日(会読)
 Taittiriya-Brahmana 1, 7, 3, 1-4
 横地 優子
- 古典のなかのアジア史** 班長 籠谷直人
 2011年3月
 「古典のなかのアジア史」の研究報告書を名古屋大学出版会より刊行することが決定。

日本の文学理論・芸術理論

班長 大浦康介

本研究会では、3月14日に準備会を開いたあと、4月から、おもに明治以降の主要な文学・芸術理論関係の文献を班員全員で読み、それについて討論するという形式で研究会を開催した。内容は以下のとおり。

4月18日 「上田真『日本の文学理論 — 海外の視点から』を読む (1)」 岩松 正洋

5月9日 「上田真『日本の文学理論 — 海外の視点から』を読む (2)」 岩松 正洋

5月23日 「漱石の『文学論』をめぐる」 大浦 康介

6月6日 「岡崎義恵『文藝學概論』を読む (1)」 河田 学

6月20日 「岡崎義恵『文藝學概論』を読む (2)」 河田 学

7月4日 「『筋のない小説論争』をめぐる」 日高 佳紀

9月19日 「竹内敏雄『文藝學序説』を読む (1)」 久保 昭博

10月3日 「竹内敏雄『文藝學序説』を読む (2)」 久保 昭博

10月17日 「小西甚一『日本文藝史 — 別巻 日本文学原論』を読む (1)」 重田 みち

11月7日 「小西甚一『日本文藝史 — 別巻 日本文学原論』を読む (2)」 重田 みち

11月21日 「野家啓一『物語の哲学』を読む」 齊藤 涉

12月5日 「鈴木貞美『日本の「文学」概念』、『日本文学』の成立』を読む」 大浦 康介

12月18日 「『日本文学からの批評理論』をめぐるミニシンポジウム」
(ゲスト: 高木 信, 木村 朗子, 安藤 徹)

色道書の言語をめぐる文明史的研究

班長 横山俊夫

安定社会が閉塞せず、文にして明なる状態に赴くかどうかは、その社会を構成する諸要素を適切に交わり続けさせる媒介があるかどうかによる。とりわ

け問われるのは、言語がはたす媒介機能である。この研究では、17世紀末からの安定期の京、大坂に栄えた丸腰の閉鎖空間である遊里を、文明化の要素をはらむ安定社会のいわば小規模実験例と見立て、そこでの言語の虚実柔剛明暗を観察、そのはたらきの人類史的価値について考える。

資料として、西水庵無底居士の『難波鉦』(大坂, 1680)を選び、そこに記された言語の諸相を文明化とのかかわりで検討する。そのことにより、当班の旧組織「文明と言語」班が試みた同書の校訂試訳を修補するとともに、未校部分を加え、独自の意味づけを持たせた1篇を編もうとしている。3年目は、傾城や大尽よりも、媒介としての働きが期待される人びとの言語に注目する機会が増えた。なお、『難波鉦』輪読以外の研究報告では、各班員が属している多様な現代学術分野での特殊な言語習慣の文明史的批評を提起した。

また、本年は上記「文明と言語」班の報告書の最終入稿に向けて、当研究班の成果もとり込むかたちで、共同編集作業を遂行した。その結果、『ことばの力 — あたしき文明を求めて —』が、平成23年度末に、人文科学研究所ならびに京都大学学術出版会から刊行することになった。

班 員: 岩城卓二, 菊地 暁, 古勝隆一, 武田時昌, 田中祐理子(以上, 所内) 梶 茂樹, 木村大治, 塩瀬隆之, 全 容範, 田辺明生, 松田文彦, 山極壽一(以上, 学内) 上村多恵子(日本エッセイストクラブ), 遠藤 彰(立命館大), 後藤静夫(京都市立芸術大), 斎藤清明(文筆業), 廣瀬千紗子(同志社女子大), 深澤一幸(大阪大)

1月17日 加藤和人論文「パーソナルゲノム時代の人間を語る言葉」をめぐる座談会

加藤 和人, 木村 大治, 斎藤 清明, 田辺 明生, 松田 文彦, 横山 俊夫

1月22日 「『難波鉦』〈品定 君川〉〈初髻 まん太夫〉」 古勝 隆一

「韓国民族芸術祝祭瞥見 — 民俗芸能の保存活用をめぐる日韓比較」

菊地 暁

2月26日 「ユネスコ無形文化遺産になるということ — 奥能登アエノコトの21世紀」

人 文 学 報

- 3月19日 菊地 暁 「ゲノム解析と新予防医学 — 長浜市での試み」 松田 文彦
 「『難波鉦』〈恋手引 あげや〉」 横山 俊夫
 「今西自然学における地図と言語」 12月19日 斎藤 清明
 5月7日 「展示見学・ウメサオタダオ展」(国立民族学博物館) 横山 俊夫
 5月14日 「講演・中国古代の都市・国家・青銅器」 小南 一郎
 5月18日 「鼎談・梅棹文明学をめぐって」 やなぎみわ, 山極 寿一, 横山 俊夫, 河野 通和, 辛島 美奈(新潮社『考える人』編集部, 同誌夏号掲載)
 5月28日 「『大興安嶺探検』とマル秘『調査隊報告書』」 斎藤 清明
 「廓の言葉」 廣瀬千紗子
 6月11日 「『難波鉦』〈回文 むらさき〉」 深澤 一幸
 「梅棹時代の社会人類学共同研究班オープンリール録音テープ」 菊地 暁
 6月18日 「『難波鉦』〈雲井月 遣手〉」 後藤 静夫
 「報告書『文明化と言語力(仮題)』序文案」 横山 俊夫
 7月9日 「講演・色道手引きを読む — 『難波鉦』」 横山 俊夫
 8~10月 上記報告書編集のため, 各章の文体推敲は, 執筆者と横山がそれぞれ数次にわたり共同。座談会記録編集は松田, 横山が担当。また書籍化全般については京都大学術出版会編集部, 鈴木哲也氏, 福島祐子氏, 当方は菊地, 横山が担当。
 (おもな推敲作業は, 8月 加藤, 木村, 斎藤, 田辺, 松田, 山極, 後藤, 倉島 哲, 9月 遠藤, 深澤, 10月 後藤, 廣瀬, 斎藤, 倉島, 菊地, 11月 加藤)
- 10月15日 「『ことばの力 — あらたな文明を求めて』出版準備共同作業拾遺」 横山 俊夫
 「横山報告評・インタラクシオン研究の立場から」 木村 大治
 「講演・文楽における義太夫節の伝承と稀曲」 後藤 静夫
 「講演・『播州皿屋敷』の成立と上演史」 神津 武男
 「演奏・播州皿屋敷 青山館の段」 豊竹嶋大夫, 鶴澤 團七(京都府立文化芸術会館)
 12月25日(土) 「『難波鉦』〈諸手縄 はつしま〉」 横山 俊夫
 「『難波鉦』校訂訳本出版について」 廣瀬千紗子
- 近代日本と異文化接触 — 「同時代化」を生きた人々の記録 — 班長 ヴィータ, シルヴィオ
 「近代日本と異文化接触 — 「同時代化」を生きた人々の記録」というタイトルで行った2年間の研究会の成果に立脚し, 研究成果の最終的報告を視野に入れつつ, 本年はテキスト会読と資料整理を中心とした活動を行った。また, 近代日本を訪れたヨーロッパ人のみならず同時期に欧米に渡った日本人の旅をも対象に含め, 文化接触と交流の場としての近代に関する研究を進めた。
- 1月24日 「幕末明治初期日本関係欧文報告書の検討」
 1月26日 (研究報告)「Anglophone Travelogues and the Japanese Interior, 1852-1899」 Andrew Elliott
 2月16日 (研究報告)「大乘協会とその周辺~大正時代の欧米人仏教徒たち」 吉永 進一
 2月21日 (会読)「The logbook of the captain's clerk: adventures in the China seas」
 2月23日 (研究報告)「エドウィン・アーノルドの日本紀行とその受容」 橋本 順光
 3月2日 (研究報告)「カフェを舞台とした文学

- 作品から見る日本の西欧化 — 永井荷風を中心として」 林 信蔵
- 4月25日 (会読) The logbook of the captain's clerk: adventures in the China seas
- 5月16日 (会読) The logbook of the captain's clerk: adventures in the China seas を
- 6月13日 (会読) *Notes sur le Japon, la Chine et l'Inde* (Charles de Chassiron)
- 7月25日 (会読) *Notes sur le Japon, la Chine et l'Inde* (Charles de Chassiron)
- 9月26日 (会読) *Notes sur le Japon, la Chine et l'Inde* (Charles de Chassiron)
- 10月10日 (会読) Heco, Joseph, *The Narrative of a Japanese: What He Has Seen and the People He Has Met in the Course of the Last 40 Years* (1895)
- 11月21日 (会読) *The Narrative of a Japanese: What He Has Seen and the People He Has Met in the Course of the Last 40 Years* (1895)
- 12月19日 (書評) 「真銅正宏著『近代旅行記の中のイタリア』」

啓蒙とフランス革命・I — 1793年の研究

班長 富永茂樹

本研究班では2011年にはフランス革命期、とりわけいわゆる恐怖政治期のテキストの会読を進めるとともに、研究報告、講演会、合評会を実施した。その内容および担当者は以下のとおりである。

・2011年例会開催記録

- 1月7日 会読：ロベスピエール「共和国の政治状況について」① 王寺 賢太
- 1月21日 会読：ロベスピエール「共和国の政治状況について」② 王寺 賢太
- 2月4日 会読：ロベスピエール「共和国の政治状況について」③ 谷田 利文・橋本 周子・藤井 俊之
- 2月18日 会読：ロベスピエール「共和国の政治状況について」④ 上野 大樹
- 3月4日 会読：ロベスピエール「共和国の政治状況について」⑤ 阪本 尚文

- 4月15日 研究報告：「『恐怖』のはじまり」 富永 茂樹
- 4月22日 公開講演会：Montesquieu et la crise du droit naturel moderne. L'exégèse straussienne. (Céline Spector)
- 4月29日 合評会：「富永茂樹『トクヴィル — 現代へのまなざし』」 松本 礼二・佐藤 淳二
- 5月6日 会読Ⅰ・ロベスピエール「共和国の政治状況について」⑥ 阪本 尚文
- 会読Ⅱ・ビヨ＝ヴァレンヌ「公安委員会の独裁樹立」① 前川
- 5月20日 会読・ビヨ＝ヴァレンヌ「公安委員会の独裁樹立」② 前川 真行
- 6月3日 会読・ビヨ＝ヴァレンヌ「公安委員会の独裁樹立」③ 前川 真行
- 6月17日 会読・ビヨ＝ヴァレンヌ「公安委員会の独裁樹立」④ 前川 真行
- 7月1日 会読・ビヨ＝ヴァレンヌ「公安委員会の独裁樹立」⑤ 前川 真行
- 7月15日 会読・ビヨ＝ヴァレンヌ「公安委員会の独裁樹立」⑥ 前川 真行
- 9月30日 会読・ビヨ＝ヴァレンヌ「公安委員会の独裁樹立」⑦ 前川 真行
- 10月21日 会読・ロベスピエール「政治道德の諸原理について」① 上田 和彦
- 11月4日 会読・ロベスピエール「政治道德の諸原理」② 上田 和彦
- 11月25日 会読・ロベスピエール「政治道德の諸原理」③ 上田 和彦
- 12月2日 会読・ロベスピエール「政治道德の諸原理」④ 上田 和彦
- 12月16日 会読・ロベスピエール「政治道德の諸原理」⑤ 上田 和彦

東方学研究部

西陲發現中國中世寫本研究 班長 高田時雄

19世紀末以来、敦煌・トルファンさらに東トルキスタン各地の遺蹟から数多くの寫本が発見された。しかし、これらの寫本の研究は、資料の公開整備が

格段に進んだこと、寫本研究の方法が厳密化したことなどにより、近年全く新しい段階に入ったと言える。本研究班では、漢文寫本を中心とし、歴史・宗教・言語・文学など様々な角度から検討を加え、西陲發現寫本の総合的な研究を展開した。なお最終年度の報告は2012年3月に『敦煌寫本研究年報』（第5號）として刊行された。

中國中世寫本研究

班長 高田時雄

「西陲」班の運営及び成果刊行の方式を、基本的にすべて受け継ぎながら、対象となる寫本の範囲をさらに別の方面に擴大することを主眼とする。擴大のターゲットは主として日本國內の寺社及び圖書館、博物館等に所藏される日本古寫本である。日本古寫本の重要性はこれまでも注目を集めていたが、近年の調査によって新たな発見が行われ、その豊富な内容が明らかになるにしたがい、中國の學界でも日本古寫本に對する關心はいよいよ高まっている。さらに同時代の材料として敦煌吐魯番寫本と日本古寫本の比較研究は、中國中世におけるテキストの傳播と變遷を考察する上で重要な視點を提供するものと言える。これら日本國內に傳承されてきた古寫本を取り上げ、より廣いパースペクティブの中で研究を進めることにより、新たな知見が數多く得られることが期待される。

本年4月以降、年末までに班員による以下のよう
な報告を得た。

- 4月11日 「新出李滂資料について」 高田 時雄
- 4月25日 「羽53《吳安君分家契》について — 家産相續をめぐる一つの事例」

山口 正晃

- 5月9日 「大英博物館藏甲戌年四月沙州妻鄧慶連上肅州僧李保祐狀」 坂尻 彰宏

- 5月23日 「陳寅恪論及敦煌文獻雜記 — 利用經路を中心に」 永田 知之

- 6月6日 「和製類書所引《說苑》小考」

藤井 律之

- 6月20日 「敦煌における《占雲氣書》」

岩本 篤志

- 7月4日 「夏譚《論語全解》研究之進展」

池田 巧

8月29日 夏季大會

「敦煌寫本中の『法苑珠林』と『諸經要集』」 本井 牧子

「長安宮廷寫經の敦煌傳來をめぐる一考察」 大西磨希子

「甘肅高臺出土幾件前凉、前秦時期的喪葬文書」 郭 永利

「“見之悲傷、念之在心” — 道教の唱導をめぐる」 遊佐 昇

10月24日 「敦煌本《祇園因由記》考」

高井 龍

「新出の行瑠《内典隨函音疏》に關する小注」 高田 時雄

11月14日 「書儀の普及と利用 — 内外族書儀と家書の關係を中心に」 山本 孝子

「敦煌文書紛れ込み問題小考」 岩尾 一史

12月5日（月）

「現行本《搜神記》諸本テキストと埋藏文獻について」 中村 有香

12月5日（月）

「敦煌の喪葬儀禮と唱導」 荒見 泰史

12月19日（月）

「敦煌・トルファン出土唐代法典文獻研究の現在」 辻 正博

12月19日（月）

「《閻羅王授記經》俄藏第11-17冊所收資料整理記 — 免罪符としての寫經資料」 玄 幸子

漢簡語彙辭典の出版

班長 富谷 至

本研究版は、「漢簡語彙辭典」出版にむけての原稿作りをすすめており、現時点での語彙数は4500字（熟語を含む）。2012年度中に8割の完成を目指す。2011年度の担当者は以下の通り。

4/1…吉村昌之、鷺尾祐子

4/8…大川俊隆、鷺尾祐子

4/15…吉村昌之、鷺尾祐子

4/22…鷺尾祐子、辻正博

5/6…鷺尾祐子、辻正博

5/13…井波陵一

5/20…井波陵一, 辻正博
 5/27…辻正博, 土口史記
 6/3…土口史記, 陳捷
 6/10…土口史記, 陳捷
 6/17…陳捷, 劉欣寧
 6/24…劉欣寧, 門田明
 7/1…門田明
 7/8…門田明, 吉川佑資
 7/15…吉川佑資
 7/22…吉川佑資
 7/29…吉川佑資, 藤井律之
 9/2…角谷常子
 9/9…角谷常子, 藤井律之
 9/16…藤井律之
 9/30…佐藤達郎
 10/14…佐藤達郎
 10/21…佐藤達郎
 10/28…佐藤達郎, 土口史記
 11/4…土口史記
 11/18…土口史記, 鷹取祐司
 11/25…鷹取祐司
 12/2…鷹取祐司, 森谷一樹
 12/9…森谷一樹
 12/16…森谷一樹, 吉村昌之

唐代道教の研究

班長 麥谷邦夫

本研究班は、唐代に撰述された道教教理書、とりわけ佛教教理の影響を強く受けた『玄珠録』等の解讀を通じて、唐代道教の教理上の特徴を解明することを目的として組織された。本年は、『玄珠録』および『道體論』の解讀を完了し、引き續いて『三論元旨』の解讀と譯注の作成に着手した。

北朝石刻資料の研究(Ⅱ)

班長 井波陵一

内容：人文研所蔵石刻資料の会読

1月17日 「齊趙郡李氏碑」 矢木 毅
 1月24日 「齊趙郡李氏碑」 矢木 毅
 1月31日 「齊趙郡李氏碑」 矢木 毅
 2月7日 「齊趙郡李氏碑」 矢木 毅
 2月14日 「齊趙郡李氏碑」 矢木 毅
 4月18日 「蘭陵忠武王碑」 池田 恭哉

4月25日 「蘭陵忠武王碑」 池田 恭哉
 5月9日 「蘭陵忠武王碑」 池田 恭哉
 5月16日 「蘭陵忠武王碑」 池田 恭哉
 5月23日 「蘭陵忠武王碑」 池田 恭哉
 5月30日 「蘭陵忠武王碑」 池田 恭哉
 6月6日 「蘭陵忠武王碑」 池田 恭哉
 6月20日 「蘭陵忠武王碑」 池田 恭哉
 6月27日 「蘭陵忠武王碑」 池田 恭哉
 7月4日 「蘭陵忠武王碑」 池田 恭哉
 7月11日 「蘭陵忠武王碑」 池田 恭哉
 9月12日 「蘭陵忠武王碑」 池田 恭哉
 9月26日 「蘭陵忠武王碑」 池田 恭哉
 10月17日 「高翻碑」 宮宅 潔
 10月24日 「高翻碑」 宮宅 潔
 10月31日 「高翻碑」 宮宅 潔
 11月14日 「高翻碑」 宮宅 潔
 11月21日 「高翻碑」 宮宅 潔
 11月28日 「高翻碑」 宮宅 潔
 12月5日 「高翻碑」 宮宅 潔
 12月12日 「高湛墓誌」 藤井 律之

長江流域社会の歴史景観

班長 森 時彦

本研究班は、中国の中枢部ともいべき長江流域社会が如何に形成され、如何に發展して近代世界と向きあうようになり、そして中国社会に如何なる影響を及ぼしてきたのかといった様々な問題を、人文的、とりわけ歴史学的なパースペクティブから多角的に解明することを目指して、2008年4月にスタートした。当初は3年計画の予定だったが、延長の結果、4年目の本年度が最終年度となった。今年度は特に、地域史・対外関係史・共産党史・日中戦争史など、多様な視角から本テーマへの接近を試みた研究報告がなされたが、これは本研究班の主旨に適うものであったと言える。今後は報告論文集のとりまとめに全力をあげたい。

2月4日 「村委会の旧筆筒の中から現代中国を読む ― 華北四ヶ村の档案文献について」 張 思
 2月25日 「王清穆『農隱廬日記』より見た民国前期江浙紳士の活動について・2」 小野寺史郎

- 5月27日 「1930年・上海と武漢 ―「李立三路線」をめぐる」 江田 憲治
- 6月10日 「植民地と移民ネットワークの相克 ―辛亥革命期、廈門における英領北ボルネオ移民募集事業を中心に」 村上 衛
- 6月17日 「清朝による「裏付け」―雲南南部国境画定と「国境外」への承認」 望月 直人
- 7月1日 「陳炯明広東統治期の郷村社会」 宮内 肇
- 10月7日 「モンゴル留日学生と「満洲国」」 田中 剛
- 11月11日 「戦時中の重慶で作られた異色な国防映画について」 韓 燕麗
- 11月25日 「長江流域教案と“子ども殺し”」 蒲 豊彦
- 12月9日 「韋君宜と中共湖北委員会」 楠原 俊代
- 12月16日 「都市図からみた成都の都市空間 ―世紀転換期成都の都市プランとコスモロジー」 小島 泰雄

東アジア古典文献コーパスの研究 班長 安岡孝一

本年は、3月に予定されていた OSDH2011 が震災の影響で9月に延期されたため、それに伴う研究発表の見直しをおこないつつ、漢文コーパスのデータ製作および品詞処理等の共同研究をおこなった。なお、本研究班では、参加者全員が文献や書籍を見ながら論じ合うというスタイルを取っているため、特定の発表者等は記さないことにする。

2011年

- 1月21日 OSDH2011 発表に向けて
- 2月4日 OSDH2011 投稿原稿読み合わせ
- 4月15日 科学研究費補助金の配分と今後の研究計画について
- 5月20日 漢文大系 PDF
Git の新規ディレクトリ製作
- 6月3日 Emacs For Mac OS X
反切に関するコーパスデータ検討
- 6月17日 Emacs23 (Cocoa Emacs) 入門から中

毒まで (IME パッチの適用)

- 7月1日 OSDH2011 投稿原稿再読み合わせ
複数の Emacs 環境の並立

上海博物館蔵戦国竹書を読む

― 中国古代の基礎史料 ― 班長 浅原達郎

引き続き上海博物館蔵楚簡にとりくんだ。天子建州を読み (1月21日～2月4日), 『上海博物館蔵戦国楚竹書』第6冊を読了。2月11日には、容成氏の配列についてまとめた。4月からは、武王踐ソ (4月15日～5月20日), 鄭子家喪 (5月27日～6月10日), 君人者何必安哉 (6月17日～7月1日), 凡物流形 (7月8日～11月4日), 呉命 (11月11日～12月9日) と読み進んで、第7冊も読了した。『曰古』第17号 (4月1日) を発行し、上海博物館蔵楚簡・容成氏の読書札記、容成氏の配列についての概括、および用曰の配列修正案を掲載した。『曰古』第18号は遅れて、2012年1月発行を予定している。

術数学 ― 中国科学と占術 班長 武田時昌

術数学は、自然科学の諸分野と易を中核とする様々な占術とが複合的に絡み合った中国に特有の学問分野である。東アジア世界の科学文化を構造的に把握し、学問的な本質や特色を明確にするには、近代科学の先駆的業績として離散的な発見、発明を時系列に並べて顕彰するだけではなく、当時の科学知識がいかなる役割を担っていたかを分析的に考察する必要がある。そのような研究を遅滞させている最大の要因は、術数学がほとんど未開拓のままに放置されているところにある。そこで、術数学を総合的に研究するプロジェクトを立ち上げることにした。

研究の手がかりとして、近年出土した簡帛資料には先秦から漢代に至る科学や占術に関する論説が満載されていることが注目される。また、日本に残存した『五行大義』『医心方』や陰陽道資料にも、中世の術数書の佚文が多数引用されており、きわめて有益である。それらの読解を通して、術数学の全体像を解明し、理論構造の特色を探る。

2011年度は、科学と宗教、宗教の境界領域にわたる文献を会読しながら、術数学の形成と展開を検

討する読書会を毎月2回行った。取り上げたテキストは、張衡『靈憲』、虞搏『医学正伝』、方以智『物理小識』及び『鵠冠子』である。訳注担当者は、前原あやの、熊野弘子、尾鍋智子、金東鎮である。また、ゲストスピーカーの特別講演と班員による研究発表を行う研究集会を毎月1回開催した。そこでの中心的な論題には陰陽五行説の五音をめぐる考察を取り上げ、『五行大義』巻三、論配声音や敦煌『宅経』等の読解を通して、五音が占術理論にどのように応用されているのかを全員で討議した。

なお、中国、韓国で術数学関連の研究を推進している研究者とのネットワークを構築し、国際共同研究プロジェクトを発進させる準備として、本年8月には韓国術数学学会の中心メンバーである李東哲教授（龍仁大学）、全勇勲准教授（ソウル大学奎章閣韓国学研究院）の両氏を招聘し、2012年に開催予定の日韓術数学ワークショップの打ち合わせ会を行い、同時に特別講演会を開催した。また、10月から3ヶ月間、研究所の客員教授に招聘した陳松長教授（湖南大学岳麓書院副所長）に出土簡帛の関する特別講演を行ってもらうとともに、中国古代占術をテーマとする国際集会の開催に向けての協議を行った。

特別講演・研究発表の演題と発表者は、以下の通りである。

- | | | |
|------|-------------------------|-------|
| 1月8日 | 「三十六禽小考」 | 清水 浩子 |
| | 「『敦煌秘笈』中の具注暦日について」 | 岩本 篤志 |
| 4月9日 | 「五音の数理的考察」 | 武田 時昌 |
| 5月7日 | 「西洋光学と気思想」 | 尾鍋 智子 |
| 6月4日 | 「蔡邕『天文志』佚文に見られる渾天儀の構造」 | 小澤 賢二 |
| 7月2日 | 「『訓民正音』序文を読む（上）」 | 鄭 宰相 |
| | 「中国古代天文学の思想史的考察」 | 田中 良明 |
| | 「陰陽道の発見」 | 山下 克明 |
| 8月6日 | 「『訓民正音』序文を読む（中）」 | 鄭 宰相 |
| | 「19世紀の韓国に渡来した西洋占星術について」 | 全 勇勲 |

「韓国における術数学研究の現況と展望」

李 東哲

10月1日 「『訓民正音』序文を読む（下）」

鄭 宰相

11月5日 「朝鮮の祖先崇拜の起源 — 高句麗墳墓遺跡調査報告」

ラプチェフ・セルゲイ

「明代後期の「宴」空間に関する一考察 — 『金瓶梅』を読み解く」

上 なつき

12月3日 「中国古代の魂魄について — その概念の変遷をめぐって」

白 飛雲

「長沙馬王堆術数類帛書略説」

陳 松長

なお、3月13日に大正大学にて術数学東京ワークショップ2011を企画したが、東日本大地震のために当初に予定した大規模な研究集会が実施できなかったが、9月4日に延期して開催した（場所：大正大学（巣鴨校舎）1号館第2会議室）。その特別講演・研究発表の演題と発表者は、以下の通りである。

「流転する書物 — 小島寶素堂始末」

多田 伊織

「怪異占と辟邪 — 中国中世鬼神観研究の視点から —」

佐々木 聡

「馬王堆出土医書『雜療方』の復元試案例」

宮川 浩也

「日書の科学知識 — 先秦方術から術数学へ」

武田 時昌

「四柱推命における陰陽五行説 — 実践の立場から」

船橋 優希

東アジア地域間交渉と情報 班長 岩井茂樹

16世紀の東アジアは社会経済の轉形期を経験した。日本における銀の増産やポルトガル人を嚆矢とするヨーロッパ人の來航などがその背景をなす。利益の追求に促されて、人々は海洋に乗り出して交易に従事した。「天朝」をもって自認する中國の王朝は海禁と朝貢制度を有力な手段として通交秩序を維持しようとしてきたが、この中國中心の秩序は私的な交易の擴大によって動搖することになる。

この時代、外からの脅威に對處するという觀點から、中國では域外についての知識への希求が高まり、かつてない精度と情報量をもつ著述が出現した。1550年代、蘇州出身の鄭若曾は、倭寇防衛の責務を擔った總督胡宗憲の幕下にあつて、情報の収集と戦略の策定に従事し、『籌海圖編』を編纂した。この共同研究班では、鄭若曾が出身地の蘇州に晩年を過ごした時期に、當局からの要請にもとづいて著述した『江南經略』を素材にして、戦略的觀點からの地域情報、武器や船舶の技術、沙洲の住民、水上居民、「倭寇」や盜賊の情報などの傳播と普及について考察する。この作業をつうじて、轉形期の東アジアの地域間交渉の特質についての理解が深まることを期待している。

2011年1月～12月の活動を下に示す。

- | | | |
|--------|---|-------|
| 1月11日 | (會讀)「『江南經略』兵務舉要 海防～御將」 | 加藤 雄三 |
| 1月20日 | (會讀)「『江南經略』兵務舉要 攬權選兵 養兵」 | 植松 正 |
| 2月8日 | (會讀)「『江南經略』兵務舉要 練兵」 | 矢木 毅 |
| 2月22日 | (會讀)「『江南經略』兵務舉要 設險分合 賞罰」 | 小野 達也 |
| 5月31日 | (會讀)「『江南經略』兵務舉要 兵戒」 | 岩井 茂樹 |
| 6月14日 | (會讀)「『江南經略』兵務舉要 兵器」 | 加藤 雄三 |
| 6月28日 | (會讀)「『江南經略』兵務舉要 兵器・續」 | 加藤 雄三 |
| | (研究報告)「陽明學派と嘉靖初年の政治 — 陽明學の政治倫理について —」 | 焦 堃 |
| 7月5日 | (研究報告)「明代の政策決定プロセスにおける意見集約をめぐる — 廷議の分析を中心に —」 | 城地 孝 |
| | (研究報告)「明末の經略と督師 — 督撫制度との關わりから見た —」 | 辻原 明穂 |
| 7月19日 | (會讀)「『江南經略』兵務舉要 重守令守城」 | 石野 一晴 |
| 10月18日 | (研究報告)「明代中朝邊境における補 | |

給戰 — 明朝軍管糧官から見た文祿の役」

長谷川正人

(研究報告)「清入關前的對日認識」

薛 明

11月1日 (研究報告)「18世紀の日中外交における「日本國王」—『漂海咨文』所收外交文書」

岩井 茂樹

11月29日 (研究報告)「18世紀の日中外交における「日本國王」・補」

岩井 茂樹

(會讀)「『江南經略』兵務舉要 土寇」

岩井 茂樹

12月13日 (會讀)「『江南經略』南畿總論 備留都六議 蘇松常鎮總論」

加藤 雄三

真諦三蔵とその時代

班長 船山 徹

本研究班は最終年度として下記の活動を行い、2011年3月に終了した。

1月21日 「真諦『仁王般若疏』佚文 序品第一と觀空品第二の再検討」

船山 徹

2月4日 「真諦『仁王般若疏』佚文の再検討」

船山 徹

2月18日 「真諦による仏教教義理解の側面」

室寺 義仁

3月4日 「真諦と「撰論宗」について」

池田 将則

「明了論と広律について」

生野 昌範

3月18日 「真諦関連文献の用語と語法 — NGSMによる比較分析 —」

石井 公成

現在、本研究班の研究報告論文集として『真諦三蔵研究論集』を印刷中である。2012年3月刊行予定。

地域化する仏教 — 研究の視点と可能性

班長 船山 徹

本研究班は東アジアの歴史において重要な役割を果たした仏教の多様な事象を「地域」をキーワードとして読み解き、研究上の新たな視点を模索しようとする試行的研究班である。2年間のうち、初年度である本年はまず、各班員の研究報告を聞き、多様な領域の研究でいま何が問題とされているかを理解

し、知識を相互に共有することを目指した。具体的には以下の報告が行われた。

4月15日 「研究班「地域化する仏教 — 研究の視点と可能性」趣旨説明」
(話題提供)「仏教の中国化 Sinification of Buddhism について」

船山 徹

5月6日 「六朝隋唐期の仏典書写をめぐる思想的考察」 村田 滯
「仏典漢訳から見た仏教の中国化 — 音訳を中心に」 船山 徹

5月20日 「仏・法・僧を笑い楽しむ伝統 — 漢訳仏教諸国における仏教非聖化の諸例」 石井 公成

6月3日 「『法没盡經』に見えるインドから中国への三聖派遣説について」 金 文京

6月17日 「魏晋南北朝都城の仏教遺跡の発見について」 朱 岩石

「仏教マントラの中国化 — 普庵咒における varṇamālā (サンスクリットの字母表) について」 麦 文彪

7月1日 「中国初期仏教文物とその源流について」 岡村 秀典

「唐の皇帝の受菩薩戒 — 武后・中宗・睿宗朝を中心に —」 河上麻由子

7月15日 「仏塔の中国的変容」 向井 佑介

7月29日 「ボン教における仏教思想の受容」 熊谷 誠慈

なお9月から12月は班長の海外出張(プリンストン大学)により研究班を休会せざるを得なかったが⁵、2012年1月から研究班の隔週開催を再開する。

元代雜劇の研究

班長 金 文京

本年度は『元刊雜劇三十種』のうち、「鯁直張千替殺妻」を講読し、校勘記、注釈、翻訳および語彙集を作成した。またこれまでに講読した「古杭新刊關目的本李太白貶夜郎」および「新編關目晉文公火燒介子推」の校勘、訳注原稿を整理し、解題と語句索引を付して、『元刊雜劇の研究(二) — 貶夜郎・介子推』(汲古書院 2011年5月)として刊行した。

中国古鏡の研究

班長 岡村秀典

紀年鏡銘の集成と注釈を作成したほか、漢・三国・西晋時代の鏡とその関連文物にかんする研究発表をおこない、3月をもって本研究班は終了した。前年の研究成果は『東方学報』京都第86冊に後漢鏡と三国西晋鏡の銘文にかんする論文2本と集釋2本を掲載し、2012年刊行予定の『東方学報』には紀年鏡の集積1本とその関連論文3本を投稿する予定である。また、共同研究の話題として『人文』第58号に岡村「古鏡研究と収蔵家たち」を載せた。研究会の会読と研究発表は以下のとおり。

班員

所内：稲葉 穰、安岡孝一、安藤房枝、向井佑介、朱岩石、諫早直人、郭永利

所外：外山潔(泉屋博古館)、齋藤龍一(大阪市立美術館)、山名伸生(京都清華大学)、田中健一・金銀兎・徐男英・内記理(京都大学大学院)

1月11日 「紀年鏡銘の会読」 光武 英樹

1月18日 「敦煌における西晋・十六国時代の壁画墓」 郭 永利

1月25日 「紀年鏡銘の会読」 光武 英樹

2月1日 「後漢華西鏡群の研究」 森下 章司

2月8日 「紀年鏡銘の会読」 光武 英樹

2月15日 「後漢鏡における淮派」 原田 三壽

3月8日 「紀年鏡銘の会読」 光武 英樹

3月15日 「紀年鏡銘の会読」 光武 英樹

3月22日 「漢三国西晋紀年鏡における作鏡日と干支記述の変化」 光武 英樹

3月29日 「紀年鏡銘のまとめ」 岡村 秀典

東アジア初期仏教寺院の研究

班長 岡村秀典

東方文化研究所が1938~1944年に調査した中国山西省雲岡石窟について、京都大学デジタルアーカイブでの画像公開を目的に、ガラス乾板の写真を石窟ごとに整理した。あわせて班外からゲストスピーカーをまねいて講演会を実施した。また、3月に水野清一・長廣敏雄『雲岡石窟』全16巻33冊、12月に同『龍門石窟』・『響堂山石窟』のPDFを京都大学学術情報リポジトリに公開した。開催した研究会は以下のとおり。

班員

所内：稲葉 稯，安岡孝一，安藤房枝，向井佑介，
朱岩石，諫早直人，郭永利

所外：外山潔（泉屋博古館），齋藤龍一（大阪市
立美術館），山名伸生（京都清華大学），
田中健一・金銀児・徐男英・内記理・高
橋早紀子（京都大学大学院）

1月11日	「雲岡石窟第五洞」	田中 健一
1月25日	「雲岡石窟第五洞」	田中 健一
2月8日	「中国南北朝期の仏教供養者像」	石松日奈子 （清泉女子大学文学部講師）
3月8日	「雲岡石窟第五洞」	田中 健一
3月22日	「雲岡石窟第五洞」	田中 健一
4月12日	「雲岡石窟第五洞」	田中 健一
4月26日	「雲岡石窟第五洞」	田中 健一
5月10日	「雲岡石窟第五洞」	田中 健一
5月24日	「雲岡石窟第六洞」	田中 健一
6月14日	「雲岡石窟第六洞」	田中 健一
6月28日	「雲岡石窟第六洞」	田中 健一
7月12日	「南北朝佛寺遺址考古学研究」	朱 岩石
7月26日	「雲岡石窟第六洞」	田中 健一
9月27日	「雲岡石窟第六洞」	田中 健一
5月24日	「雲岡石窟第六洞」	田中 健一
10月11日	「雲岡石窟第六洞」	田中 健一
10月25日	「雲岡石窟第六洞」	田中 健一
10月11日	「雲岡石窟第六洞」	田中 健一
11月8日	「雲岡石窟第六洞」	田中 健一
11月22日	「雲岡石窟第六洞」	田中 健一

現代中国文化の深層構造 班長 石川禎浩

【期間】2010年4月—2014年3月

【時間・場所】隔週金曜日14時00分—17時00分
本館セミナー室4（311室）

【概要】2010年4月に発足した共同研究班「現代中国
文化の深層構造」は、百花繚乱の如く見える現代
中国文化が内包している歴史の刻印や記憶、そして
政治との軋轢を、20世紀初頭から今日に到るおよ
そ100年を対象に、歴史学的手法によって解明しよ
うとするものである。昨年度に引き続き共同研究班

Bとして共同研究班員を公募した本研究班は、主に
研究報告の発表とそれの討議を行うという形式で、
1～12月に以下の日程で13回にわたり研究活動を
行った。なお、本研究班は、京都大学現代中国研究
拠点（人文研附属現代中国研究センター）の研究グ
ループ1の事業という性格を合わせ持っている。

1月21日	「戦後中国の仏教外交 — 世界仏教徒 会議をめぐる」	坂井田夕起子
2月18日	「民国初期県知事兼理司法制度におけ る「判決」と上訴の問題」	田辺 章秀
3月4日	「1930年代における「読経」運動と湖 南教育界」	宮原 佳昭
4月22日	「中国近現代史研究における革命史の 位置」	石川 禎浩
5月20日	「戦後日本の現代中国研究と現代中国 学会」	瀬戸 宏
6月3日	「第二次世界大戦末期国民政府の対ソ 政策：アルタイ事件からウォレス使節 団訪中の前後まで」	吉田 豊子
6月24日	「1930年代前半の台湾島内における政 治運動と対外膨張 — 台北における台 湾人商工業者の活動を中心に」	都留俊太郎
	「汪精衛和平工作における梅思平」	好永州 宏
7月8日	「清末中国における「借材異国」方策 の試み」	葉 倩瑩
9月30日	「清末以降民国期の北戴河海濱におけ る「自治」の様相」	袁 広泉
10月21日	「1929年の中東鉄道事件前後における “中ソ友好論”とその命脈」	伊丹 明彦

「国民革命軍における政治工作につい
て」 久保 佳彦

11月4日 「近年の「農村社区建設」について」
瀧田 豪

11月18日 「老華僑と新華僑のあいだ：元「蒙疆
政權」派遣学生から見た戦後日本の中
国人留日学生」 田中 剛

12月2日 「近代中国と冒険・探検」 高嶋 航

南アジア北辺地域における文化交流の諸相

班長 稲葉 稜

2011 年は、研究班のテーマに従った研究報告と、11 世紀にペルシア語で書かれた史料の中央アジアおよび南アジアに関する記述の会読を併せて行った。詳細は以下の通り。

1 月14日 (会読)「*Zayn al-Akhbār*」

宮本 亮一

2 月12日 (研究報告)「悟空(車奉朝)の入竺路について」

稲葉 稜

3 月25日 (研究報告)「ソグド人と遊牧民」

吉田 豊

4 月22日 (会読)「*Zayn al-Akhbār*」

二宮 文子

5 月13日 (会読)「*Zayn al-Akhbār*」

杉山 雅樹

5 月27日 (研究報告)「ガンダーラの仏伝図像の考察 — 太子時代のレスリングを中心に —」

6 月10日 (会読)「*Zayn al-Akhbār*」

杉山 雅樹

6 月24日 (研究報告)「北辺地域とインドの接点 II: デリー・サルタナト前半期の独立勢力を中心に」

二宮 文子

7 月 8 日 (研究報告)「隋代の仏教系散佚書『耶舎伝』と同佚文より知られるインド関連の記載について」

船山 徹

7 月22日 (研究報告)「古代チベット帝国の軍事制度再考」

岩尾 一史

9 月 9 日 (調査報告)「ミーラーン・敦煌調査記」

岩尾 一史

(調査報告)「シュグナーン・バミール調査記」

稲葉 稜

10月14日 (研究報告)「チャガタイ・ハン国, カラウナス, インド」

川本 正知

10月21日 (会読)「*Zayn al-Akhbār*」

二宮 文子

11月11日 (会読)「*Zayn al-Akhbār*」

杉山 雅樹

11月25日 (研究報告)「アーディリーヤ妃の紋殺 — ルーム・セルジューク朝とアイ

ユーブ朝交渉史上の一事件 —」

井谷 鋼造

12月 9 日 (会読)「*Zayn al-Akhbār*」

稲葉 稜

研究状況
(2012 年)

公募型研究班

グローバル化する思想・宗教の重層的接触と人文学の可能性

班長 奥山 直司

本年、本共同研究班は公開講演会を 1 回、研究会を 4 回開催した。そのうち第 8 回研究会は 2 泊 3 日の研究合宿であった。本研究班では当初 12 月中旬に外国人研究者を招聘して講演会・研究会を行う予定で準備を進めていたが、先方のやむを得ない事情によって計画の変更を余儀なくされた。これに替わるものとして、2013 年 3 月上旬に別の外国人研究者を招聘して、公開講演会と研究会を開催する予定である。

1 月21日 公開講演会

テーマ「開発僧 — タイ仏教と地域開発」

講演①: プラユキ・ナラテポー (タイ・スカト寺)「タイ開発僧との出会いから出家へ、そして自他の心の開発へ」

講演②: 泉経武 (東京成徳大学)

『『開発の時代』とタイ仏教』

(コメンテーター: ロバート・ローズ (大谷大学))

2 月11日~12 日 第 8 回研究会 (高野山合宿)

2 月11日 講演①: 日野西真定 (元高野山大学教授)「高野山の民俗」

研究発表①: 谷口真梁 (高野山真言宗総本山金剛峯寺国際局)「国際布教」

(コメンテーター: 福西加代子 (京都大学大学院人間・環境学研究科博士後

- 期課程))
- 研究発表②：沼野圭翠 (香川県天光寺高照院)「遍路 一つながる」
(コメンテーター：奥山直司 (高野山大学))
- 2月12日 講演②：藤田光寛 (高野山大学)「高野山の歴史と文化」
- 研究発表③：アンドレア・デ・アントーニ Andrea De Antoni (京都大学人文科学研究所研究員)「あの世から心霊スポットへ? — 現代恐山における体験とモノのエージェンシーをめぐる」
(コメンテーター：山下博司 (東北大学))
- 研究発表④：河西瑛里子 (京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程)「現代の欧米の女神運動にひかれる人たち — イギリス、グラストンベリーの事例から」(コメンテーター：萩原卓也 (京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程))
- 5月19日 第9回研究会
「原担山再考 仏教と生理心理学」
吉永進一氏 (舞鶴工業高等専門学校)
「近代中国における進化論の批判 — 章炳麟と李春生の場合」
陳継東氏 (青山学院大学)
- 6月30日 第10回研究会
「第二次大戦前の北アメリカにおける日本仏教の近代的発展」
阿満道尋氏 (アラスカ大学)
- 11月17日 第11回研究会
「進化論における宗教進化の位置とその影響」
滝澤克彦氏 (東北大学専門研究員)
- 3年間の総括
本共同研究班は、2013年3月までの残された研究期間内に、さらに研究会を3回 (うち1回は2泊3日の研究合宿)、外国人研究者の招聘による公開講演会を1回予定しており、研究活動の学術的な総

括は、これらを通して行うことにしている。そこで以下では、2年9ヵ月にわたる本研究班の活動を振り返り、その概略を述べることにしたい。

われわれの研究目的は、グローバル化の進行する現代社会において思想や宗教の流通と消費にどのような特徴があるのかを、複数文化の重層的接触という観点でとらえ、現代のみならず、過去150年程度のスパンでこれを分析、考察することであった。そのための柱として宗教と進化論 (ダーウィニズム) をテーマに据え、それらの伝播の諸相を人文学の諸分野にわたって検討することに努めた。また宗教と進化論の伝播というテーマを共通の広場として、専門を異にする研究者が発想型で自由に意見を交換し合うことを通じて、包括的な視点の獲得を目指した。

このような構想の下、本研究班が実施した研究会は、今後の予定も加えると14回 (うち2回は2泊3日の研究合宿)、公開講演会は3回を数える。報告者・講演者は延べ34人、コメンテーターとしての参加者は延べ14人である。また奥山直司による人文研アカデミー講演 (2012年5月18日) も本研究班の研究目的に沿ったものである。これらの報告・講演を通じて上述のテーマをめぐる多様な視点が提供された。それらをトピックの内容ごとにグループ化するとおおよそ次のようになる。

(1) 宗教のグローバル化の事例

アーユルヴェーダの世界的な伝播、シンガポールのヒンドゥー教寺院の変容、グライ・ラマ14世の思想と行動、現代欧米の女神運動などを事例として、グローバル化の進行の中で宗教に起きているさまざまな事象が紹介・検討された。

(2) 複数文化の接触による宗教変容

明治のセイロン留学生の異文化体験、アメリカにおける日系仏教の歴史的展開、ヒンドークシュ南北におけるイスラームとインド宗教の接触、明治の仏教者原担山の仏教哲学における生理・心理学の導入などが複数文化の接触という観点から分析された。

(3) エンゲイジド・ブッディズム

エンゲイジド・ブッディズム (Engaged Buddhism) は1960年代にベトナムで提唱され、その後世界各地に広まった仏教運動であるが、研究者は、現代の仏教者による反戦平和、環境問題、差別や圧

政からの解放などに関わるさまざまな実践をエンゲイジド・ブディズムの名の下に一括する傾向がある。本研究班では、エンゲイジド・ブディズムの定義とその課題が総括的に議論されたことを皮切りに、B. R. アンバードカルの仏教改宗と現代インドの仏教運動、カンボジアにおける仏教系諸団体の活動状況、タイの開発僧などがトピックとして取り上げられた。

(4) 進化論の伝播

進化論の伝播とその影響が、日本の近代美術、近代中国思想などの分野において検討された。また進化論における宗教進化の位置付けとその影響が概括的に論じられた。

(5) その他

シンクレティズム論の再考、恐山を例にした聖地の心霊スポット化、仏教の国際布教の問題点、四国遍路の現状報告など

以上のうち (3) のエンゲイジド・ブディズムは (1) (2) のような研究を進める中、それとの関係で新たに視野に入ってきたテーマであり、今後深められるべき方向の一つを示していると考えられる。

情報処理技術は漢字文献からどのような情報を抽出できるか：人文情報学の基礎を築く

班長 山崎直樹

前年度のシンポジウムでの報告と議論より、「ネットワーク解析技術の人文科学への応用」は、検討する価値のある課題であるとの認識が得られた。そこで、本年度は、「ネットワーク構造の物理モデルへの基本的理解」「大規模ネットワーク分析の人文科学への応用」をテーマに、下記の公開セミナーを開催した。

公開セミナー『ネットワーク科学は道工具箱』

(1) ネットワーク解析の道具を理解しよう

藤原 義久 (兵庫県立大学シミュレーション学研究科)

(2) 大規模社会ネットワーク分析の事例と展望

湯田 聡夫 (株式会社 CREV)

(1) では、ネットワーク構造の物理モデルに関する初歩的な知識 (グラフ構造・探索の基本など) から高度な内容 (次数・相関・推移性などの統

計的な性質や、媒介中心性やコミュニティの構造など) について、まず学び、その後、大規模ネットワークに関する研究の応用例 (コミュニティ抽出の実例など) までを学んだ。参加者は、人文科学におけるネットワーク科学の応用について、一定の見通しを得ることができた。

この公開セミナーの全容は、下記で視聴できる。

人文: USTREAM

<http://ustream.tv/channel/zinbu-n/>

5-2-2 シンポジウムの開催

本プロジェクトがその目的に掲げている「人文情報学の基礎を築く」に関して、昨年のシンポジウムに引き続き、「テキストとはどのような構造をしているのか、それはどのようにモデル化できるのか」「人文学で扱う情報とはどのような構造をもつか、それはどのように扱うべきか」の諸点について、各分野の現状と今後の展望について、さらに理解を深めるべく、下記の公開シンポジウムを開催した (※印は当研究プロジェクトのメンバーによる報告)。

公開シンポジウム『情報の構造とメタデータ』

(1) マンガにおける異本研究

安岡 孝一 (京都大学)*

(2) TEI テキスト・モデルの今昔

Christian Wittern (京都大学)*

(3) 漢字文献における電子的翻刻の課題 ― 或いは翻刻者の使命

白須 裕之

(4) CiNii のメタデータ・デザイン

大向 一輝 (国立情報学研究所)

(1) は、従来、構造化が困難であると考えられていた文字と画像が非線形に展開する資料をどのようにマークアップすべきかという課題に取り組んだものである。

(2) は、「テキストの構造化」といえば必ず言及される TEI (Text Encoding Initiative) が、テキスト構造をどのようにモデル化してきたか、その変遷と現状の報告である。

(3) は、漢字文献を電子化する際に問題となる「情報の劣化」という側面に対し、「圏論 (Category Theory)」の立場から、新しいテキストモデルの提出を試みたものである。これは、やはり上掲の検討課題 (丙) に関連する。

(4) は、近年、その高度な検索性能で話題になることが多い、国立情報学研究所の図書・論文検索サービス“CiNii”がどのようなメタデータデザインを行っているかに関して、その設計担当者からの報告である。これは上掲の検討課題(乙)に関連する。

このシンポジウムでの議論を通じて、テキストのモデル化にあたっては、確固たる理論的基盤が必要であること、また、データを相互に関連させる手法としての Linked Open Data (LOD) にも関心を払う必要があることを学んだ。

5-2-3 研究成果の公開

当年の公開シンポジウムの予稿集を、『情報の構造とメタデータ』(全国共同利用・共同研究拠点「人文学諸領域の複合的共同研究国際拠点」, 京都, 2012 年 2 月) として発行した。このシンポジウムに関する諸情報は、下記の [1] で、また、シンポジウムの各報告の映像記録とパネルディスカッションの映像記録は、[2] で手に入れられる。

[1] <http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~ymzknk/kanzi/>

[2] 人文: USTREAM

<http://ustream.tv/chann-el/zinbun/>

生命知創成に向けたプラットフォームの構築

班長 小林傳司

生物学研究は、1970 年代を起点として、実験室に閉じたかたちで営まれていた自然哲学的色彩を伴う研究から、医学領域のみならず人々の日常生活における生と死の領域全般に具体的な影響を持つ生命科学へと変容を遂げた。このような科学の構造転換の状況において、生命科学を社会の中にあらためて位置づけ、社会の視点を加味した新しい「知」として把握しなおすことが必要である。本研究班では、このような社会的視野と見識を備えた生命の科学に関する新しい捉え方を「生命知」と呼ぶこととし、その創出のために、科学者、社会学者、人類学者、哲学者、歴史学者などが共同で検討を行うことを目的とした。

平成 22 年 7 月から 24 年 12 月まで総計 13 回の研究会(うち 3 回は公開研究会)を行い、生命科学系、人文系の両方の立場からの報告を聞き、検討を行っ

た。また、2 回の公開シンポジウムと 2 回の公開セミナーを開催した。

全体を通して明らかになったことは多岐にわたるが、一つには、生命科学の先端研究の現状についてより認識を深めることができたことがある。生命科学の研究現場では、数学や物理学、工学などの、これまでになかった分野との交流や共同研究が本格的に行われ、個別生命現象の理解は進んでいる。その一方で、「生命らしさ」の解明を含む、生命現象の本質に迫るには、いまだ研究者は試行錯誤していることも明らかになった。また、社会との関わりが大きくなってきていることも、予想通りとは言え、再生医療や脳科学といった具体的な領域を事例に明らかにすることができた。生命科学の研究者自身が自らの研究が生み出す倫理的・社会的課題に取り組もうという動きがあることも知ることができた。

3 年間を通して、生命科学系の現場にいる人々と人文系の研究者がともに検討するという当初の目的はある程度達成できたと言える。今後は、この活動を踏まえてさらに多様な研究者、専門家、その他の人々が参加できる場を作ること計画している。

1 月 23 日 第 3 回研究会

話題提供「最近のライフサイエンス研究の動向について」 加藤 和人
会場: 京大人文研本館 3 階 330 号室(セミナー室 3)

2 月 8 日 合同セミナー

立命館大学衣笠キャンパス創思館 4 階 411 にて

(平成 22~24 年度日本学術振興会科学研究費補助金[基盤研究(B)]「“科学の参謀本部” — ロシア/ソ連邦/ロシア科学アカデミーの総合的研究」(研究代表者—市川 浩), 立命館大学グローバル COE「生存学」創成拠点/立命館大学生存学研究センター, 京都大学人文科学研究所共同研究「生命知創成に向けたプラットフォームの構築」(代表: 小林傳司) 共催)

(1) 講演「冷戦初期の科学と権力〜ソヴィエト遺伝学の大転換をめぐって

- ～」キリル・ロシヤノフ（ロシア科学アカデミー・自然科学史＝技術史研究所）
 (2) コメント：藤岡毅（同志社大学嘱託講師）
- 3月15日 第4回研究会（公開研究会として開催）
 京大人文研本館3階331号室にて
 (研究報告)「生命科学技術のデュアル・ユースと倫理 ～バイオセキュリティ教育及び、デュアル・ユース研究についての最近の話題」
 四ノ宮成祥（防衛医科大学校・分子生体制御学講座）
- 7月2日 第1回研究会（公開セミナーとして）
 (研究報告)「脳科学に何を求めるべきか～研究の倫理と、科学と社会の関係について考える —『精神を切る手術』岩波書店、2012/5より—」
 棚島 次郎（東京財団研究員，自治医科大学客員研究員）
- 9月17日 第2回研究会
 (研究報告)「動物の体のパターン形成」
 近藤 滋（大阪大学大学院 生命機能研究科）
- 10月15日 第3回研究会
 (研究報告)「日本と科学の厳しい現状と問題点，そして科学者が果たすべき役割」
 中辻 憲夫（京都大学 物質—細胞統合システム拠点）
- 11月19日 第4回研究会
 (研究報告)「再生医療という文化：STSの視点から」
 見上 公一（総合研究大学院大学 学融合推進センター）
- 12月20日 第5回研究会
 独立行政法人理化学研究所 神戸研究所 発生・再生科学総合研究センター（理研CDB）にて
 (1) 研究所見学

- (2) 研究報告「合成生物学によるライフ・イノベーション —『細胞を創る』から『個体を創る』へ—」
 上田 泰己（理化学研究所・発生再生科学総合研究センター）

- ヨーロッパ現代思想と政治 班長 市田良彦
 2011年4月に発足した公募研究班A班「ヨーロッパ現代思想と政治」では、2012年1月から12月までの間に、以下の6回の研究会と1回のシンポジウムを行なった。
- 2月4日 「D-G/M 試論 ver.2」（ドゥルーズ＝ガタリとマルクスの信用論再検討）
 長原 豊（法政大学教授）
 「政治と媒介戦後ドイツにおけるアドルノ」 多賀健太郎（翻訳家）
- 2月5日 人文研アカデミーシンポジウム「日本から見た68年5月」長崎浩（評論家），西川長夫（立命館大学名誉教授），安丸良夫（一橋大学名誉教授），上野千鶴子（東京大学名誉教授），伊藤公雄（京都大学教授），中島一夫（近畿大学准教授），市田良彦（神戸大学教授・司会）
- 3月10日 「“ポストマルクス主義”とラクラウ」
 布施哲（名古屋大学准教授）
 「オペライスタはプロレタリア革命の夢を見たか —1970年代のトロンティ，ネグリ，カッチャーリの文献を読む」
 中村勝己（中央大学非常勤講師）
- 4月21日 「市田良彦著（平凡社新書）『革命論』マルチチュードの政治哲学序説をめぐって」合評会
 市田良彦・國分功一郎（高崎経済大学准教授）・小泉義之（立命館大学教授）
- 7月28日 「初期ルカーチと政治」 長崎 浩
 「アルチュセールにおける政治をめぐって」
 伊吹浩一（専修大学非常勤講師）
- 9月29日 「精神分析家の養成・組織・分派」
 立木 康介

「労働者の政治～言語的観点から見た
20世紀マルクス主義の一傾向瞥見」

松本潤一郎（翻訳家）

12月1日 「ネグリ／ボーコック～『構成的権力』
と『マキアヴェリアン・モーメント』
についてのメモ」 王寺 賢太

「Foucault, Mal faire, dire vrai (2012)
前半部を中心とした1980年代フー
コー統治論の概観」

箱田 徹（立命館大学PD研究員）

このうち、京都大学百周年記念時計台記念館で昨年2月5日に開催されたシンポジウムは、西川長夫『パリ五月革命私論 ―転換点としての68年』（平凡社新書）の発刊を記念して行なわれた。世代と立場を異にする6人のパネラーを招き、西川氏が現地で直に経験したフランスの68年5月と、同時代の日本の経験、さらに「68年」に象徴される政治的・思想的な変動の帰結を現時点から批判的に再検討しようとしたこのシンポジウムは、500人近い聴衆を集める大盛会で、毎日新聞での新聞報道も受けた。また、このシンポジウム開催を契機として、西川長夫氏が収集されてきた68年5月の原資料（諸党派・学生小集団のピラ・機関誌）・研究文献などのコレクションが人文研に寄贈されることになった。このうち一部については、研究班の事業としてウェブ上で公開すべく、現在準備を進めている。

このシンポジウムにも見られるように、本研究班の目標は、「現代思想」・「ポストモダニズム」として知られる60年代以降の西欧の思想的潮流を、その政治的な性格に焦点を当て、スターリン批判以後、60年代以来の正統派マルクス主義に対する批判の文脈に位置づけることにある。この観点から、市田良彦は、2012年2月に『革命論 ―マルチチュードの政治哲学序説』（平凡社新書）を公刊し、おおよそアルチュセールからフーコー、ドゥルーズをへて、ネグリ、バディウ、アガンベンらにいたる現代思想の諸潮流の見取り図を描いた。そこでは、正統派マルクス主義の史的弁証法と「経済主義」・「労働者本体論」に対して、歴史における「偶然性」や「出来事」の意義を強調するアルチュセールやバディウや、政治における「主体化」の意義を強調するドゥル

ーズやネグリが位置づけられ、さらにこのポスト・マルクス主義的な地平で、あらためて政治―経済を経体的に捉え直す理論的な端緒を示すものとして、フーコーの生政治論が考察されている。2012年4月21日の公開研究会は、本研究班の叩き台となるこの著作の合評会として行なわれた。

以上の問題設定を踏まえ、2012年の共同研究班例会では、10名の班員が研究発表を行なった。焦点となったのは、60年代から70年代にかけてのフランスの思想的動向だが、このフランスのコンテクストを相対化し、汎ヨーロッパ的・世界的な視野で問題を捉えるためにも、それ以前のドイツ語圏でのマルクス主義の動向（ルカーチからフランクフルト学派まで）、ネグりを生み出した70年代イタリアの労働運動の変貌についての報告は貴重であった。また、本研究班では、とくに「主体」・「主体化」の問題系に関連して、アルチュセール派のマルクス主義とも強い関係を持ったラカン派精神分析の理論・実践の動向を視野に入れている。他方、70年代以来の「現代思想」と政治との関わりを見極めるためには欠かせない、現代政治哲学の諸潮流（ラクハウのラディカル・デモクラシー論やボーコックの共和主義論など）との比較検討も提起された。さらに、本研究班では、正統派マルクス主義批判以後の新しい政治経済（学）批判のモデルを「現代思想」の残した業績から、理論的に展開しようとする試みも現れている。

本年の研究会は、総じて、共同研究の成果を以下の諸点に留意しながらまとめる方向づけを与えるものであった。

- ① 60年代以前の非正統派マルクス主義の理論と「現代思想」の関連を明らかにすること。この点に関しては、とくに「史的弁証法」・「経済主義」ないし「労働者本体論」・資本主義先進国中心主義などの批判に留意する。
- ② 「現代思想」内部における政治と「主体」の問題系の関連を明らかにすること。この点に関しては、60年代から70年代にかけてのアルチュセール、フーコー、ドゥルーズらとラカン派精神分析の合流と分岐に留意する。
- ③ 「現代思想」諸潮流と、1989年のソ連崩壊以後

隆盛を極めている現代政治哲学の諸潮流（政治的自由主義・共和主義・さまざまな「民主主義論」）との異同を、70年代以来の両派の展開に即して明らかにすること。

- ④ ポストマルクス主義の時代（脱産業化、グローバル化、情報社会、金融資本主義の新たな展開）を踏まえた新たな政治－経済学批判の理論的モデルを「現代思想」の成果（ドゥルーズ＝ガタリの資本主義論、フーコーの生政治論）を継承・発展しながら構築すること。

なお、本研究会は2014年3月までの3年間の予定で始まったが、予算の限定もあり、これまで十分な回数の研究会を開催できなかった（ほぼ年5、6回のペース）。このため、来る2013年度には2014年度1年の延長を申請する予定である。この延長が認可された際には、2014年度の研究班運営はできるかぎり現在申請中の科研費でまかない、共同研究の締めくくりとして、スラヴォイ・ジジエク（スロヴェニア）、ヤン・ムーリエ＝ブータン（フランス）を招聘し、大規模な国際討論集会を開催したいと考えている。

人文学研究部

トラウマ経験の組織化をめぐる領域横断的研究 — 物語からモニュメントまで

班長 田中雅一

トラウマやPTSDなどの医療用語が、日常的に使われるようになって久しい。心理学や精神医学用語が普及していった背景には、わたしたちの世界が「脱神学化」してきたことがある。このことをふまえて本研究では、トラウマをより広い意味で苦悩（suffering）や痛み（pain）とみなし、この苦悩に對し人びとがどのような形で對峙し、克服しようとしてきたかについて様々な事例を通して考えようとしてきた。

今年度は研究会発足3年目に当たるため、これまでの2年間で十分に議論されてこなかった社会の心理学化というテーマについて重点的に議論を行うことにした。このテーマに関連し、ゲストスピーカーとして、小池靖氏（立教大学）、樫村愛子氏（愛知大学）を招聘し、集中的に議論を重ねることができ

た。

このテーマを中心に、平成24年度は1月30日、4月9日、4月23日、5月7日、5月28日、6月4日、6月18日、7月9日、10月29日、11月26日、12月17日に研究会を開催した。

さらに、本研究会で会談を行ってきたPTSD関連の重要文献の著者であるアラン・ヤング氏（マッギル大学）を招聘し、国際シンポジウム「精神病理からみる現代 — うつ、ひきこもり、PTSD、発達障害」を6月30日に開催することができた。発表者はヤング氏の他に、マリー・ジャン・ソレ氏（トゥールーズ第Ⅱ大学）、北中淳子（慶應義塾大学）、堀口佐知子（テンブル大学）、古橋忠晃（名古屋大学）が集まり、PTSDを含めた病理から現代社会を考えるためのきわめて収穫の多いシンポジウムとなった。

こうした研究の成果をさらに深化・発展させるために、来年度はいくつかにカテゴリー分けされた個別のテーマ毎に小規模のシンポジウムを組織し、これらのシンポジウムでの議論を中心に本研究会を組織・運営していく予定である。

日中戦争・アジア太平洋戦争期朝鮮社会の諸相

班長 水野直樹

日中戦争勃発から日本敗戦までの戦時期に朝鮮において実施された「皇民化政策」やその下での朝鮮社会の実相を明らかにすることを目的にして、研究発表、資料紹介、関連研究の紹介・書評などの形で進めている。とりわけ、この時期に関する資料が少ないため、埋もれている資料の探索・調査・整理に重点をおいている。

4月21日 「研究班を始めるに当たって：戦時期朝鮮社会の歴史研究のために」

水野 直樹

5月19日 （資料紹介）「雑誌『外地評論』の紹介 — 特に朝鮮特集号について —」

宮本 正明

（発表）「戦時期国民防空指針書の刊行と朝鮮における普及」

李 大和

6月16日 （資料紹介）「1920年～1941年京城発行『法政新聞』」

吉川 絢子

- (発表)「民族の序列化と「転覆」の可能性 — 映画「望楼の決死隊」と植民地朝鮮 —」 水野 直樹
- 7月15日 国際シンポジウム「戦時期朝鮮の映画と社会」
「朝鮮映画の戦時体制」
鄭 琮樺 (韓国映像資料院
韓国映画史研究所研究員)
「民族の序列化と「転覆」の可能性 — 映画「望楼の決死隊」と植民地朝鮮 —」 水野 直樹
「戦時期朝鮮における言語空間の再編と映画」 李 和眞
(京都大学外国人共同研究者,
延世大学校講師)
「朝鮮映画における Code-switching」
ナヨン・エイミー・クォン
(デューク大学助教授)
(コメンテーター)
ディック・ステゲウェルンス
(オスロ大学准教授, 日本近代史・日本映画論)
呉徳洙 (オ・ドクス) (映画監督)
渡辺直紀 (武蔵大学教授, 朝鮮・韓国文学史)
- 9月15日 (資料紹介)「戦時期の朝鮮関係新聞について」 水野 直樹
(発表)「日中戦争期朝鮮華僑の「親日」及び「抗日」活動について」
李 正熙
- 10月20日 (発表)「戦時期名古屋在住朝鮮人の東亜聯盟運動」 松田 利彦
(紹介)「韓国における戦時期研究の現状」 庵造 由香
- 11月17日 (発表)「〈解題：李清源著作集〉作成のためのメモ」 洪 宗郁
(紹介)「戦時期朝鮮スポーツ史に関する研究状況と今後の課題」小野 容照
- 12月15日 (発表)「日中戦争期の朝鮮鉱業 — 雑誌『朝鮮鉱業』を中心に —」
長沢 一恵
- (資料紹介)「『家庭之友』『家庭の友』『半島の光』(朝鮮文版)(朝鮮金融組合聯合會発行) 金 恵淑
- 日本の文学理論・芸術理論 班長 大浦康介
2年目にあたる平成24年は、前年に引き続き、日本の主要な文学・芸術理論関係の文献(とくに昭和期の文献)を班員全員で読み、それについて討論するという会読形式で研究会を開催した。また、石原千秋、野網摩利子、齋藤希史の各氏をゲストとして招き、文学理論関係の報告をしていただいた。内容は以下のとおり。
- 1月16日 (会読)「江藤淳『リアリズムの源流』を読む」 岩松 正洋
- 2月6日 (会読)「興膳宏「中国における文学理論の誕生と発展 — 六朝から唐・宋へ」を読む」 高木 雅恵
- 2月20日 (会読)「野口武彦『三人称の発見まで』を読む」 中村ともえ
- 3月5日 (報告)「戦後、日本近代文学研究の方法」 石原 千秋
- 3月19日 (会読)「坂部恵『かたり』を読む」 北村 直子
- 4月16日 (報告)「小林秀雄の初期批評とポール・ヴァレリー」 森本 淳生
- 5月7日 (会読)「柳田国男「口承文芸とは何か」を読む」 菊地 暁
- 5月21日 (会読)「藤井貞和『物語理論講義』を読む」 久保 昭博
- 6月4日 (会読)「伊藤整『小説の方法』を読む」 飯島 洋
- 6月18日 (会読)「吉本隆明『言語にとって美とはなにか』を読む(I, 第I章, 第II章)」 齊藤 渉
- 7月9日 (会読)「吉本隆明『言語にとって美とはなにか』を読む(I, 第III章, II, 第六章)」 中村ともえ
- 10月8日 (報告)「漱石による文学理論の補完を目指して — 『夏目漱石の時間の創出』の先へ」 野網摩利子
- 10月15日 (会読)「岡本太郎の芸術論」

藤田 茂

11月5日 (会読)「河出書房『新文学論全集』(第5巻『文芸思潮』, 第6巻『国民文学と世界文学』)を読む」 大浦 康介

11月19日 (報告)「明治日本の批評言語」

齋藤 希史

12月3日 (会読)「千野帽子『読まず嫌い。』『俳句いきなり入門』」 岩松 正洋

12月17日 (資料紹介と報告)

(1) 研究社「文学論パンフレット」

開 信介

(2) 自然主義の描写論のアンソロジー

中村ともえ

日本・アジアにおける差異の表象 班長 竹沢泰子

本研究班は、人種表象をめぐる社会的リアリティを、「見えない人種」の非視覚表象、人種の科学表象と学知、「混血/ミックス」表象の3つのサブテーマに着目して、分野横断型の共同研究を進めている。本年は通常の月例研究会に加えて、文理融合のワークショップ、日系アメリカ人に関する日米合同ワークショップ、日本映画に見る混血表象、論文集執筆のための合宿などを行った。本年の特筆すべき成果は、12月に国立京都国際会館において開催した国際シンポジウム「人種神話を解体する」であり、25名にのぼる登壇者が内容の濃い報告をただけでなく、延べ350名以上のフロアの参加者とも活発な質疑応答を行うことができた。その成果として、シンポジウム報告書を3月に刊行した。

1月7日 [国際ワークショップ]「人文学とゲノム研究のインターフェイスⅡ」

場所：京都大学東京オフィス

Introduction

竹沢泰子・加藤和人(大阪大学)

太田博樹(北里大学)

Current status and prospect of genome-wide approach to identify genes associated with human traits

鎌谷直之(理化学研究所)

Japanese population structure based on genome-wide SNP genotypes

山口(加畑) 由美(理化学研究所)

Whole genome sequence by massively parallel sequencing technology

藤本明洋(理化学研究所)

Race : and Genetic Research : Portrayals and Problem

Timothy Caulfield(アルバータ大学)

1月8日 [国際ワークショップ]「人文学とゲノム研究のインターフェイスⅡ」

場所：京都大学東京オフィス

「医療・公衆衛生研究における人種概念」 瀬口典子(モンタナ大学)

全体討論(日本語と英語で実施)

3月2日 「映画のなかの人種表象」

場所：東京国立近代美術館フィルムセンター(京橋)

『キクとイサム』(今井正, 1959年), 117分

『おなじ太陽の下で』(望月優子, 1962年), 50分

解説 齊藤綾子

ディスカッション

3月3日(土)

「映画のなかの人種表象」

場所：東京国立近代美術館フィルムセンター(京橋)

『からゆきさん』(木村莊十二, 1937年), 59分

『赤線基地』(谷口千吉, 1953年), 90分

『パナナ』(渋谷実, 1960年), 90分

解説 齊藤綾子

ディスカッション

4月13日 場所：京都大学人文科学研究所

“A Girl from Matsuyama: Legacy of the Japanese International Brides of World War II.”

Velina Hasu Houston

(南カリフォルニア大学)

6月9日 場所：京都大学人文科学研究所

「規律と欲望のクリオン島 — アメリ

カ統治下フィリピンにおける公衆衛生
とハンセン病者の暴動」

日下 渉 (京都大学)

“Race and Rescue in Early Asian In-
ternational Adoption History”

Catherine Ceniza Choy

(カリフォルニア大学バークレー校)

コメント：安里和晃 (京都大学)

6月10日 場所：京都大学人文科学研究所
「近世の賤民体制と近代化過程の諸問
題 — 日本社会と身分秩序」

吉村智博 (大阪人権博物館)

7月28日 [公開座談会] Nikkei Studies and Be-
yond: Dialogue between Scholars in
Japan and the U.S.

場所：京都大学東京オフィス

ゲアリー・オキヒロ/東栄一郎

(ペンシルバニア大学)

マイケル・オウミ

(カリフォルニア大学バークレー校)

ゲアリー・オキヒロ

(コロンビア大学)

河上幸子 (京都外国語大学)

ロン・クラシゲ

(南カリフォルニア大学)

菅美弥 (東京学芸大学)

アヤコ・タカモリ (東京大学)

竹沢泰子 (京都大学)

南川文里 (立命館大学)

ブライアン・マサル・ハヤシ

(京都大学)

松本悠子 (中央大学)

9月5日 (水)

論集執筆者合宿

場所：KKR びわこ

日下渉, 関口寛, 坂野徹, 木名瀬高嗣,

斉藤綾子, 前嵩西ペーパーへのコメン

ト, 水谷智, 菅野優香, 竹沢泰子

「見えない人種」ディスカッション

全体ディスカッション

9月6日 (木)

論集執筆者合宿

場所：KKR びわこ

加藤和人, 瀬口典子, 石井ペーパーへ
のコメント,

「人種の科学表象」ディスカッション

成田龍一, 李昇燁, 工藤正子

「混血の表象」ディスカッション

10月13日 (土)

タイトル：Crossing Boundaries: Art
and History

場所：京都精華大学 kara-S スタジオ
(COCON KARASUMA 3F)

企画：渡辺紀子 (人文科学研究所),
後藤千織 (人文科学研究所)

「『社会を映し出す鏡』としての表現
— アメリカと台湾での『日本イメー
ジ』を中心に」 岡本 光博

「見えないものを映像化する — 多民
族的な背景をもつ日系カナダ人=『ハ
バ』の経験を描く『ハバニメーショ
ン』」 ジェフ・千葉・スターンス

「二項対立を崩す — 肖像画法による
マイノリティ経験に関する非本質主義
的な対話」 シズ・サルダマンド

「語られぬものの記憶 — 近代遊郭の
痕跡を探して」 高田 智美

菅野優香 (北海道大学) コメント

10月14日 京都大学人文科学研究所

若手研究者ワークショップ Crossing
Boundaries in History

企画：渡辺紀子 (人文科学研究所),
後藤千織 (人文科学研究所)

“The Paradox of Subjectivation: The
Imagined West and Modern Japanese
Intellectuals”

竹内里欧 (椋山女学園大学)

“Marital Strife in the Japanese Immi-
grant Community, 1924-1930: Rein-
terpreting U.S. Divorce Law”

後藤千織 (京都大学人文科学研究所)

“After the Banquet: Representing

Japanese Femininity in and through
Memoirs”
渡辺紀子（京都大学人文科学研究所）
“One Big Hapa Family”（Jeff Chiba
Stearns）上映会・討論
12月15日 国際シンポジウム「人種神話を解体す
る」
場所：京都国際会館
第1部 Invisibility
「見えない人種」の表象
「天皇制・グローバル近代・視覚人種
主義がもたらす不安」
タカシ・フジタニ（トロント大学）
「見えない差異と映画表象 ― 被差別
部落の映画表象に関する一考察」
斉藤綾子（明治学院大学）
「見えない人種の編成 ― 朝鮮半島に
おける『白丁』の事例」
金 仲燮（慶尚大学）
「米国の法廷における人種の科学とパ
フォーマンス」 アリエラ・グロス
（南カリフォルニア大学）
司会：関口寛（四国大学）
コメント：宋基燦（大谷大学）
若手リレートーク/ポスターセッショ
ン「日本で人種・エスニシティを研究
すること」
岡村兵衛（神戸大学）
鶴戸 聡（日本学術振興会）
佐藤丈寛（琉球大学）
山本めゆ（京都大学）
中村理香（成城大学）
司会：南川文理（立命館大学）
12月16日（日）
国際シンポジウム「人種神話を解体す
る」
場所：京都国際会館
第2部 Knowledge
科学と社会の共生産
「フィリピンにおける米国の公衆衛生
とハンセン病者の暴動」

日下 渉（京都大学）
「フランス人類学における『人種』概
念批判」 アルノ・ナンタ
（フランス国立科学研究センター）
「インドにおける血液・贈与『コミュ
ニティ』」 石井美保（京都大学）
竹沢泰子（京都大学）
加藤和人（大阪大学）
太田博樹（北里大学）
「遺伝学と生物医学における集団のラ
ベリング」
司会：坂野 徹（日本大学）
コメント：松原洋子（立命館大学）
第3部 Hybridity
「血」の政治学を越えて
「日本人・日系人の『ミックスブレイス
』の歴史」 ダンカン・ウィリアムズ
（南カリフォルニア大学）
「近現代日本における『混血児』の
ディスカール」
成田龍一（日本女子大学）
「日本映画のなかの『混血児』表象」
高 みか（立教大学）
「日本とパキスタンの国境を越える子
どもたち」 工藤正子（京都女子大学）
司会：川島浩平（武蔵大学）
コメント：貴堂嘉之（一橋大学）

12月17日（月）

専門家会議
場所：京都大学吉田泉殿
タカシ・フジタニ（トロント大学）、
斉藤綾子（明治学院大学）、金仲燮
（慶尚大学）、アリエラ・グロス（南カ
リフォルニア大学）、関口寛（四国大
学）、日下渉（京都大学）、アルノ・ナ
ンタ（フランス国立科学研究セン
ター）、石井美保（京都大学）、竹沢泰
子（京都大学）、加藤和人（大阪大学）、
坂野徹（日本大学）、高みか（立教大
学）、工藤正子（京都女子大学）

近代古都研究

班長 高木博志

最終年度の本年度は、近代における古都和城下町の「歴史都市の歴史性」の問題を中心に据えて、夏までに研究報告を積み重ね、それ以降、共同研究報告書のとりまとめに入った。共同研究報告書は、18篇の論考からなる、『近代日本の歴史都市 ― 古都和城下町』（思文閣出版、2013年）として刊行した。

近代天皇制と社会

班長 高木博志

本研究班では、近世後期から近現代までを見通して、町や村といった地域や、文化・宗教・思想・教育・社会運動・民俗などを視野に入れた広い意味での「社会」と天皇制との関係を考えてゆきたい。また政治史・教育史・文化史・思想史・運動史・美術史・植民地研究・民俗学・地域史などの諸分野の研究者とともに、初年の今年度は、比較的少人数で十分議論できるように心がけた。7月には尾谷雅彦氏の案内で南河内楠公・南朝史蹟の巡見を行った。

4月21日 「共同研究会をはじめるにあたって」

高木 博志

「近代天皇制と宗教社会 ― 泉涌寺と陵墓の問題を題材に」

高木 博志

5月12日 （書評会）「上田長生『幕末維新期の陵墓と社会』書評」

岩城 卓二

6月16日 「明治期における不敬事件について」

小股 憲明

7月28・29日

南河内楠公・南朝史蹟巡見（金剛寺・観心寺・楠妣庵・千早城跡など）
コーディネーター：尾谷雅彦

10月27日 「近代京都における大礼建造物の下賜過程」

原戸喜代里

11月17日 「隠岐の長者村上助九郎と京都」

鍛冶 宏介

「明治初期の天皇制のイメージ：紙幣にみえる「国家主義」と「国際主義」

Mark Ravina

12月15日 「江藤新平と佐賀の乱の檄文：英語と日本語で表現した天皇制の比較」

Mark Ravina

「近世後期の朝廷・大名領主と稲作儀

礼」

羽賀 祥二

第一次世界大戦の総合的研究

班長 山室信一

岡田暁生

本年は17回の研究会を開催した。通常の研究報告の他、海外からの講演者を迎えての公開研究会も実施した。2010年から始めた小シンポジウムでは取りまとめに向けた論点整理などを重ねた。また、中間報告の意味をもつシリーズ「レクチャー 第一次世界大戦を考える」（人文書院）の公刊を続けると共に最終報告書・論集4冊（岩波書店）の編集作業も終えた。さらに、ベルリン自由大学を拠点として進行している International Encyclopedia of the First World War 1914-18 プロジェクトへの寄稿も進めている。

1月14日 「ヨーロッパ統合史は可能か」

遠藤 乾

1月28日 「小シンポジウム：帝国を使いつくす ― 第一次世界大戦と植民地統治」

伊藤 順二

（パネラー：石井美保、堀内隆行）

2月11日 「クルーシブル（坩堝） ― 第一次世界大戦とアメリカニズム」

中野耕太郎

2月27日 「補給戦と合衆国」

布施 将夫

4月14日 「ドイツ自然療法運動の第一次世界大戦への道 ― 医療「アウトサイダー」から大戦下「動員」へ」

服部 伸

4月23日 「チェコスロヴァキア軍団と日本：1918-1922年」

林 忠行

5月12日 「ドイツ精神医学と“精神分析療法の道”」

上尾 真道

5月28日 「カフカスと東アナトリアの戦線 ― 諸民族のルネサンス」

伊藤 順二

6月9日 「大戦期日本の郷土誌編纂」

黒岩 康博

6月25日 「「パレスチナ移民と「イスラエルの残り」 ― 大戦下のユダヤ・メシアニズム」

向井 直己

7月14日 「「帝国の総力戦」と恒久平和の夢 ― 大戦間期イギリス帝国にとっての国際連盟」

津田 博司

- 9月22日 「フランス植民地から考える第一次世界大戦と歴史認識」 平野千果子 梶原三恵子
- 9月29日 (特別講演会)「Russian to Polish to Soviet: Vilnius in Two World Wars」 Theodore R. Weeks 梶原三恵子, 堂山英次郎
- 10月13日 「第一次世界大戦前後の史跡・名勝保存と「伝統文化」」 高木 博志
- 10月22日 「捕虜が働くとき」 大津留 厚
- 11月10日 「アメリカにおける映画・芸術・国家—D. W. グリフィスの場合」 石田 美紀
- 12月8日 「音楽におけるナショナリズムの発現形態: ラブソディの歴史と第一次大戦」 伊東 信宏
- 3月9日 (会読) VadhSS 10. 4. 33-5. 34 (2); TB 1. 7. 4 梶原三恵子, 堂山英次郎
- 3月23日 (会読) VadhSS 10. 4. 33-5. 34 (3) 梶原三恵子
- 5月18日 (会読) VadhSS 10. 6. 0-12; TB 1. 7. 1-2 手嶋 英貴
- 6月1日 (会読) VadhSS 10. 6. 12-42; TB 1. 7. 6. 2-5 井狩 彌介
- 6月15日 (会読) VadhSS 10. 6. 43-53; 10. 7. 1-20 大島 智靖
- 7月13日 (会読) TB 1. 7. 6-9 (1) 大島 智靖
- 11月16日 (会読) TB 1. 7. 6-9 (2); VadhSS 10. 7. 21-42 (1) 大島 智靖, 横地 優子
- 11月30日 (会読) VadhSS 10. 7. 21-42 (2) 横地 優子
- 12月14日 (会読) TB 1. 7. 9; VadhSS 10. 7. 43-8. 10 (1) 横地 優子, 小林 正人
- 12月24日 (研究集会) The International Symposium “Consecration, Initiation, and Coronation Rituals in Ancient and Medieval India” 基調講演: Alex Sanderson (オックスフォード大学)
- 発表者: 永ノ尾信悟, 井狩彌介, 大島智靖, 藤井正人, 手嶋英貴, 梶原三恵子, 横地 優子, Diwakar Acharya, Som Dev Vasudeva
- 灌頂と即位の文化史** 班長 藤井正人
- 本共同研究(2011.4-2014.3)は、共同研究「王権と儀礼」(2005.4-2011.3)を進展させるため、テーマを新たにして発足させたものである。前共同研究では王権とそれに関わる儀礼全般を対象としてきたが、この共同研究では、古代インドなどにおいて即位や入門の儀礼で中心的な行為となっている「灌頂」に焦点をあて、その行為の基本形態、類型、変化、伝播、異文化との混交などに関して、文化史的アプローチから研究する。研究方法としては、各種事例の比較研究を進めるとともに、他分野の研究者に負担をかけない形で文献資料の基礎研究も行なう。具体的には、課題に関する研究報告を集中的に行なう「研究集会」と、古代インドの王即位式に関するサンスクリット資料の校訂と訳注を行なう「会読」という2種の研究会を、切り離した形で開催して研究を進めている。2年目の本年度(2012)、タントラの第一人者であるオックスフォード大学サンダーソン教授を招いて、班員を中心に、「古代・中世インドにおける潔斎、入門・入信、即位の諸儀礼」をテーマにした国際シンポジウムを開催した。
- 2月10日 (会読) Taittiriya-Brahmana (TB) 1. 7. 3. 4-8; Vadhula-Srautasutra (VadhSS) 10. 4. 1-32 (2) 小林 正人, 堂山英次郎
- 2月24日 (会読) VadhSS 10. 4. 33-5. 34 (1)
- アジアの通商ネットワークと社会秩序** 班長 籠谷直人
- 第1年度にあたる2012年は、おもに華人によって書かれた史料についてのレビューなどを中心に、研究会を開催した。2012年11月より人文科学研究所に招へいた、レオナルド・ブリュッセイ氏(ライデン大学)、聶德寧氏(廈門大学)とともに華僑華人らの公文書『公案簿』、『開吧歴代史紀』などの史料について検討をすすめた。これらの漢文(福建語)の資料は、バタヴィア(現在のジャカルタ)の華人自治組織であった「公館」の公文書群であり、現在はライデン大学の東洋史研究センターに保管さ

されている。文書からは、オランダ東インド会社の時代からオランダ植民地の時代にかけてのオランダのジャワ統治が、華人ととの協働によるものであることがわかる。またオランダの植民地統治における華人の「徴税請負」制度は、こうした資料をとおしてその実態を読み解くことができる。

4月8日 東京・東京大学東洋史学研究室

「『権力論、農村からの2つの余剰、アジア間貿易の中の島国』について」

籠谷 直人

自己紹介、今後の予定、予算計画

5月27日 「『開吧歴代史紀』について解説」

岩井 茂樹

「オランダ語で書かれたバタヴィア華人関係の文献について」 島田 竜登

6月10日 「スマラン華人史の中国語版『三宝壟歴史』の内容をレビュー」 陳 来幸

「総論「都市史の方法」について説明、都市と農村を繋ぐ2つの余剰、バタヴィアが中心拠点となり得た理由など」 籠谷 直人

「『17～18世紀のバタヴィアの水路網と空間形成』について」 松田 浩子
「1930年代のジャワ都市部における日本人商店の活動」について」

泉川 晋

10月6日 インドネシア調査報告会

12月16日 2013年の研究計画について

色道書の言語をめぐる文明史的研究

班長 横山俊夫

安定社会が閉塞せず、文にして明なる状態に赴くかどうかは、その社会を構成する諸要素を適切に交わり続けさせる媒介があるかどうかによる。とりわけ問われるのは、言語がはたす媒介機能である。この研究では、17世紀末からの安定期の京、大坂に栄えた丸腰の閉鎖空間である遊里を、文明化の要素をはらむ安定社会のいわば小規模実験例と見立て、そこでの言語の虚実柔剛明暗を観察、そのはたらきの人類史的価値について考える。

資料として、西水庵無底居士の『難波鉦』（大坂、

1680）を選び、そこに記された言語の諸相を文明化とのかかわりで検討する。そのことにより、当班の旧組織「文明と言語」班が試みた同書の校訂試訳を修補するとともに、未校部分を加え、独自の意味づけを持たせた一篇を編もうとしている。3年目は、傾城や大尽よりも、媒介としての働きが期待される人びとの言語に注目する機会が増えた。なお、『難波鉦』輪読以外の研究報告では、各班員が属している多様な現代学術分野での特殊な言語習慣の文明史的批評を提起した。

また、本年は上記「文明と言語」班の報告書の最終入稿に向けて、当研究班の成果もとり返むかたちで、共同編集作業を遂行した。その結果、『ことばの力 — あたしき文明を求めて —』が、平成23年度末に、人文科学研究所ならびに京都大学学術出版会から刊行することになった。

班員：岩城卓二、菊地 暁、古勝隆一、武田時昌、田中祐理子（以上、所内） 梶 茂樹、木村大治、塩瀬隆之、全 容範、田辺明生、松田文彦、山極壽一（以上、学内） 上村多恵子（日本エッセイストクラブ）、遠藤 彰（立命館大）、後藤静夫（京都市立芸術大）、斎藤清明（文筆業）、廣瀬千紗子（同志社女子大）、深澤一幸（大阪大）

啓蒙とフランス革命・I — 1793年の研究

班長 富永茂樹

2012年の前半は昨年にひきつづいてロベスピエールやサン＝ジュストの議会における演説のテクストの会読と議論を行い、後半にはパトリス・ゲニフェー（社会科学高等研究院）の講演をはじめ、班員数名による1990年代以後（つまりフランス革命200周年からあと）に出た研究書ないし論文の紹介をとおして、啓蒙とフランス革命の連続ないし断絶にかかわる問題の理解を深めることができた。

1月13日 （会読）「ロベスピエール「政治道徳の諸原理」⑥」 上田 和彦

1月20日 （会読）「ロベスピエール「信仰の自由のために」」 川村 文重

2月10日 （会読）「ロベスピエール「信仰の自由のために」②」 川村 文重

2月24日 （会読）「ロベスピエール「信仰の自由

- のために」③」 川村 文重
- 3月9日 (会読)「ロベスピエール「信仰の自由のために」④」 川村 文重
- 3月23日 「18世紀フランスにおける「Terreur 恐怖」の概念」 王寺 賢太
- 4月13日 (公開講演)「ベルトラン・ピノシュ (パリ第1大学) « L'opinion publique en Révolution française »」
(通訳・王寺)
- 4月27日 (会読)「サン=ジュスト「投獄された人たちについて」」 増田 真
- 5月11日 (会読)「サン=ジュスト「投獄された人たちについて」②」 増田 真
- 5月25日 (会読)「サン=ジュスト「投獄された人たちについて」③」 増田 真
- 6月8日 (会読)「ロベスピエール「革命政府の諸原理について」」 王寺 賢太
- 6月22日 (会読)「ロベスピエール「革命政府の諸原理について」②」 王寺 賢太
- 7月13日 (会読)「ロベスピエール「革命政府の諸原理について」③」 王寺 賢太
- 9月28日 「『修正派』以降のフランス革命研究の動向について」 橋本 周子
- 10月12日 「修正派の『恐怖政治』研究の再検討」
上野 大樹
- 10月23日 (公開講演)「パトリス・ゲニフェー (社会科学高等研究院) « Violence et Terrur dans la Révolution française »」
(通訳・川村)
- 11月9日 (文献紹介)「Jean-Clement Martin, *La Terreur. Part maudite de la Révolution* — 政治哲学から/と歴史」
前川 真行
- 11月16日 « Le discours le plus tragique et le plus pur : Rhétorique et politique chez Robespierre » エリック・アヴォカ
(ゲスト・スピーカー)
- 12月7日 「恐怖の語るとき」 藤井 俊之
- 12月14日 「〈ルソー・の・名〉: シュミット/アーレント/ネグリとフランス革命」
佐藤 淳二

本共同研究の最終年度には、前年度に引きつづいて、国民公会におけるいくつかのディスクールの会読を行うとともに、とりわけ後期からは「恐怖政治」をめぐる文献紹介を中心とした研究報告(ゲスト・スピーカー1名をふくむ)も開始した。また、フランス人研究者が来日した機会に合計2回の公開講演会を開いた。このあと2013年1-3月には合計5回の研究報告を予定しており、これでもって本共同研究は終了することになる。

近代日本と異文化接触 —「同時代化」を生きた人々の記録—

班長 ヴィータ、シルヴィオ

「近代日本と異文化接触 —「同時代化」を生きた人々の記録」というタイトルで行った2年間の研究会の成果に立脚し、研究成果の最終的報告を視野に入れつつ、本年はテキスト会読と資料整理を中心とした活動を行った。また、近代日本を訪れたヨーロッパ人のみならず同時期に欧米に渡った日本人の旅をも対象に含め、文化接触と交流の場としての近代に関する研究を進めた。

東方学研究部

中國中世寫本研究

班長 高田時雄

本研究班では、敦煌・トルファンおよび東トルキスタン各地の遺蹟から発見された古寫本に加え、日本國內の寺社及び圖書館、博物館等に所藏される日本古寫本を対象として、より廣いパースペクティブの中で中國中世におけるテキストの傳播と變遷を考察しようとするものである。初年度の報告は2012年3月に『敦煌寫本研究年報』(第6號)として刊行されたほか、新年度の例會には以下の報告を得た。

4月23日 「日本古抄本《王勃集》について」

道坂 昭廣

5月7日 「敦煌契約文書における關係者の續柄表記について」 山口 正晃
「唐代遺書分家之研究 — 以敦煌寫本羽五三號《吳安君遺書》為中心」

林 生海

5月21日 「書道博物館藏『春秋左氏傳』殘卷に見える新出『左傳』服虔注に就いて」

- 白石 將人 「『閻羅王授記經』と『金剛經』—何故並寫されたのか」 玄 幸子
- 6月4日 「古代チベット帝國の敦煌支配と寺領：Or. 8210/S. 2228の検討を中心に」 岩尾 一史
- 「敦煌本讀文類小考—唱導、俗講、變文との関わりより」 徐 銘
- 「羽田 094R-1「(擬)天台智者大師智顗別傳」について」 佐藤 礼子
- 6月18日 「五胡十六国覇史輯佚補遺」 藤井 律之
- 「敦煌吉凶書儀に見る官僚らの公私書札禮—書簡文の實例との比較を通して」 山本 孝子
- 「『搜神記』諸テキストに関する一考察」 中村 友香
- 7月2日 「西方淨土變の白描畫 Stein painting 76, P. 2671vの解釋について」 大西磨希子
- 「敦煌王の婚禮—榮親客目からみた10世紀敦煌社會」 赤木 崇敏
- 「舌による開眼故事について」 高井 龍
- 7月16日 「關於敦煌文書 P2625 號寫本研究の幾個問題」 劉 安志
- 「羽〇四三醫方文獻初探」 辻 正博
- 「公主君者者の手紙—S. 2241の受信者・發信者・作成背景について」 坂尻 彰宏
- さらに2012年7月7日に國際シンポジウム「敦煌寫本と日本古寫本」を開催し、以下の研究發表および討論を行った。
- 高田時雄 敦煌寫本與日本古寫本—代開幕辭
- 7月7日 「日本國聖武天皇雜集與敦煌寫卷相關内容之比較研究」 王 三慶
- 「論日本藏敦煌寫本及古寫經靈驗記的價值」 鄭 阿財
- 「敦煌《妙法蓮華經講經文》(普門品)殘卷新論」 朱 鳳玉
- 「敦煌本孝子故事類の展開と日本殘存資料」 荒見 泰史
- 「敦煌本『四分律比丘含注戒本』の研究—特に系譜と成立に關して」 定 源
- 「『琉璃堂墨客圖』覺書」 永田 知之
- 以上の論考は、2013年4月に刊行豫定の『敦煌寫本研究年報』(第7號)に掲載される。
- 漢簡語彙辭典の出版** 班長 富谷 至
- 前年度に続き、居延簡・新簡を中心としつつ、敦煌漢簡・額濟納漢簡中の語彙もあわせて検討し、語義を確定した。また、居延簡の語彙はほぼ取り終え、新簡のみにみえる語義の検討へと移行する予定である。本研究班で確定させた語彙数は、2012年末の時点で、約5400項目となった。
- 2012年の担当者は次の通りである(排列は担当順)。
- 吉村昌之、辻正博、大川俊隆、鷲尾祐子、土口史記、井波陵一、劉 欣寧、陳 捷、門田明、吉川佑資、佐藤達郎、鷹取祐司、角谷常子、藤井律之、森谷一樹。
- 唐代道教の研究** 班長 麥谷邦夫
- 本研究班は、唐代に撰述された道教教理書、とりわけ佛教教理の影響を強く受けた『玄珠錄』等の解讀を通じて、唐代道教の教理上の特徴を解明することを目的として組織された。本年は、『三論元旨』および『大道論』の解讀を終了し、引き續いて『坐忘論』の譯注作成に着手した。
- 北朝石刻資料の研究(II)** 班長 井波陵一
- 内容：人文研所藏石刻資料の会読
- | | |
|----------------|-------|
| 1月16日 「高湛墓誌」 | 藤井 律之 |
| 1月23日 「高湛墓誌」 | 藤井 律之 |
| 1月30日 「高湛墓誌」 | 藤井 律之 |
| 2月6日 「高湛墓誌」 | 藤井 律之 |
| 2月13日 「高湛墓誌」 | 藤井 律之 |
| 2月20日 「高湛墓誌」 | 藤井 律之 |
| 4月16日 「東魏敬史君碑」 | 向井 佑介 |
| 4月23日 「東魏敬史君碑」 | 向井 佑介 |
| 5月7日 「東魏敬史君碑」 | 向井 佑介 |
| 5月14日 「東魏敬史君碑」 | 向井 佑介 |

彙 報

5月21日 「東魏敬史君碑」	向井 佑介		実詞と虚詞（日本漢文へのいざない）
5月28日 「東魏敬史君碑」	向井 佑介	2月10日	分類語彙表による分類 [動詞]
10月15日 「東魏敬史君碑」	向井 佑介	3月9日	来年度作業の指針
10月22日 「東魏廉富等造像記」	成田健太郎	4月20日	科研費の作業内訳
11月5日 「東魏廉富等造像記」	成田健太郎		品詞分類
11月12日 「東魏廉富等造像記」	成田健太郎	5月18日	全国漢文教育学会 教科書本文データ集
11月19日 「東魏廉富等造像記」	成田健太郎		品詞分類
11月26日 「東魏廉富等造像記」	成田健太郎		「矛盾」（韓非子）での作業例
12月3日 「東魏廉富等造像記」	成田健太郎	5月25日	「矛盾」（韓非子）での作業結果
12月10日 「李仲璇修孔子廟碑」	藤井 政彦	6月1日	品詞分類
12月17日 「李仲璇修孔子廟碑」	藤井 政彦		「矛盾」（韓非子）での作業結果精査
「長江流域社会の歴史景観」 班長 森 時彦		6月22日	辞書ファイルの制作手順
本研究班は、2008年4月に発足、2012年は2～3月に以下の日程で3回の研究班を開催し、終了した。今後、報告論文集を出版する予定である。			品詞分類
2月3日 「清末民初の「読経」教育について」	報告者：宮原 佳昭 コメンテーター：袁 広泉	7月6日	新しい品詞分類に基づく辞書ファイル
2月17日 「日本国籍の華商：糖業と海陸産物をめぐる上海・日本・台湾」	報告者：陳 來幸 コメンテーター：村上 衛	7月20日	品詞分類
3月9日 「東アジアの民族主義問題：中国および日中関係をテーマとする討論」	報告者：王 也揚 コメンテーター：小野寺史郎	7月20日	じんもんこん 2012 に向けて 新しい品詞分類に基づく辞書ファイル MeCab における再学習機能の追加
東アジア古典文献コーパスの研究 班長 安岡孝一		8月1日	品詞分類
2012年は、形態素解析のための漢文コーパスを完成すべく、品詞分類作業を中心に共同研究をおこなった。また、11月17～18日に北海道大学で開催された人文科学とコンピュータシンポジウム「じんもんこん 2012」で、これまでの共同研究成果の概略を発表した。なお、本研究班では、参加者全員が文献や書籍を見ながら論じ合うというスタイルを取っているため、特定の発表者等は記さないことにする。		9月14日	新しい品詞分類に基づく辞書ファイル じんもんこん 2012 発表に向けて 『MeCab を用いた古典中国語形態素解析器の改良』 品詞分類
1月20日 東方学資料叢刊	分類語彙表による分類 [名詞]・分類語彙表抜粋	10月5日	来年度以降の新規研究班立ち上げに関して 十八史略コーパス作業データ 品詞分類
		10月19日	来年度以降の科学研究費申請に関して 漢文文法と訓読処理『文言文法』
		11月2日	『春色梅兒譽美』における仮名の用字法 平安・鎌倉時代における平仮名字体の変遷 住民基本台帳ネットワーク統一文字の変体仮名
		11月16日	近代以前の仮名体系の性質 JIS Z 8906
		12月7日	共同研究班報告書に向けて

上海博物館蔵戦国竹書を読む — 中国古代の基礎史料

班長 浅原達郎

『上海博物館蔵戦国楚竹書』も第8冊に入り、子道餓（1月13日～1月20日）、顔淵問於孔子（1月27日～2月3日）、成王既邦（2月10日～2月24日）、命（4月13日～5月11日）、王居・志書乃言（5月18日～6月22日）、李頌（6月29日～7月20日）、蘭賦（7月27日）、有皇将起・婁栗（9月28日～10月12日）と読み進んで、第8冊を読了した。第9冊は未刊行なので、『清華大学蔵戦国竹簡』に転じて、ざっと概観（10月19日）、続いてその第一冊にとりかかり、尹至・尹誥（10月26日～11月16日）および程寤（12月7日～12月21日）を読んだ。

『日古』第18号（1月13日）、第19号（3月30日）、第20号（10月26日）を発行し、上海博物館蔵楚簡の中弓より東大王泊早までの読書札記、凡物流形のいくつかの字句の解釈、成王既邦と命・王居・志書乃言の配列についての試案、子道餓と東大王泊早を題材にした小話、さらに班員の論文一篇を掲載した。

術数学 — 中国の科学と占術

班長 武田時昌

術数学は、自然科学の諸分野と易を中核とする様々な占術とが複合的に絡み合った中国に特有の学問分野である。東アジア世界の科学文化を構造的に把握し、学問的な本質と特色を明確にするには、近代科学の先駆的業績として離散的な発見、発明を時系列に並べて顕彰するだけではなく、当時の科学知識がいかなる役割を担っていたかを分析的に考察する必要がある。そのような研究を遅滞させている最大の要因は、術数学がほとんど未開拓のままに放置されているところにある。そこで、術数学を総合的に研究するプロジェクトを立ち上げることにした。

研究の手がかりとして、近年出土した簡帛資料には先秦から漢代に至る科学や占術に関する論説が満載されていることが注目される。また、日本に残存した『五行大義』『医心方』や陰陽道資料にも、中世の術数書の佚文が多数引用されており、きわめて有益である。それらの読解を通して、術数学の全体像を解明し、理論構造の特色を探る。

2012年は、科学と宗教、宗教の境界領域にわたる文献を会読しながら、術数学の形成と展開を検討する読書会を毎月2回行った。取り上げたテキストは、張衡『靈憲』、敦煌出土『宅経』、『卜筮元亀』、張杲『医説』、虞搏『医学正伝』などである。また、ゲストスピーカーの特別講演と班員による研究発表を行う研究集会を毎月1回開催した。そこでの中心的な論題には陰陽五行説の五音をめぐる考察を取り上げ、『五行大義』巻3、論配声音の読解を通して、五味が医学、本草学や養生思想、食文化などにどのように応用されているのかを全員で討議した。なお、訳注担当者は、木村亮太、熊野弘子、古藤友子、高井たかね、武田時昌、前原あやのである。

2月2日—4日には韓国術数学学会の主要メンバー6名（李東哲教授（龍仁大学教授）趙仁哲教授（円光デジタル大学）李容周副教授（光州科学技術院）徐大源教授（忠北大学）朴権寿教授（忠北大学）全勇勳講師（ソウル大学））及び国内から任正嫻教授（朝鮮大学）を招聘して、日韓術数学ワークショップ2012（拠点経費による人文研国際集会、総合テーマ「東アジア術数学研究の現状と課題」）を開催した。主な内容は、合同討論会（テーマ「東アジア世界の科学と占術」）、シンポジウム（「術数学の射程 — 東アジアの思想・宗教と科学文化」）、彦根城博物館所蔵琴堂文庫・吉田神社節分祭追儺式・高麗美術館の見学、資料調査など。

6月22日—24日には、ソウル大学にてソウル大学科学史研究室、奎章閣韓国学研究院と共催で、第1回 Templeton 東アジアの科学と宗教”国際ワークショップ（総合テーマ「東アジア世界の「知」の伝統：科学と思想、宗教のあいだ」）を開催した（韓国 Templeton 財団の研究助成金による）。中国から薩日娜副教授（上海交通大学）を招いたほか、術数学研究班から研究発表者10名、通訳担当者1名が参加した。3日間の内容は、5セッションに分けて全部で18名の研究発表、討論会及び奎章閣書庫の観覧、資料調査を行った。

また、7月21日には、日本科学史支部例会京都支部例会との共催で Gerhard Leinss（ケンブリッジ大学研究員）、杉本舞助教（関西大学）両氏を招いて国際研究集会を催し、8月25日—27日には天地

瑞祥志研究会と合同で研究発表会を開催し、陽明文庫、京都府立総合資料館所蔵若杉家文書、大將軍八神社所蔵皆川家文書を調査した。

この他、国外から馮錦榮（香港大学教授）、孫英剛副（復旦大学人文学院教授）、国内から小曾戸洋（北里大学東洋医学総合研究所教授）、久保輝幸（茨城大学講師）、奈良場勝（暁星高校教諭）の諸氏をゲストスピーカーとして招き、また客員教授に招聘した陳松長教授（湖南大学岳麓書院副所長）による特別講演を行った。

特別講演、研究発表の演題と発表者は、以下の通りである。

- 1月7日 「古医書の形態変遷 — 馬王堆から近世和刻本まで」 小曾戸 洋
「岳麓秦簡《占夢書》の結構略説」 陳 松長
- 2月3日 「数学研究プロジェクト構想」 武田 時昌
「朝鮮後期時憲暦の施行と選択書の変化」 全 勇勲
「近世東アジアの自然哲学的宇宙論」 任 正憐（朝鮮大学）
「日本の天文文物 — 天球儀を中心に —」 宮島 一彦
- 2月4日 「中国の古代に於ける夢」 李 容周
「『参同契』と太極図」 徐 大源
「18世紀朝鮮王室の儀礼と択日択地」 朴 權寿
「現代韓国の風水」 趙 仁哲
「類書と術数」 李 東哲
「『氣』と術数的世界」 坂出 祥伸
- 3月3日 「五姓法と五音」 田中 郁也
- 3月27日 「Galileo and Jesuit Science in 17th Century China」 馮 錦榮
- 5月5日 「鄭注月令五畜考」 平澤 歩
- 6月2日 「渋川春海の分野説」 白石 將人
- 6月21日 「東アジア科学史研究の新展開 — 術数学研究プロジェクト」 武田 時昌
「蔡元定と西学」 安 大玉
「周易占に対する丁若鏞の見解」 金 永植

「古代中国における上帝信仰と千畝の戦い」 小澤 賢二

「馬王堆漢墓帛書『陰陽五行』乙篇の構造と思想」 名和 敏光

「『開元占経』に見る太陽觀」 李 文揆

「陰陽五行説の構造的把握」 清水 浩子

6月22日 「『太一』の宇宙論と荀子」 鄭 宰相
「道教における養胎の技法」

加藤 千恵
「道教の身体論と医学知識 — 黄庭經及び大洞真經の読みを中心に」

金 志玟
「黄胤錫の自然学の性格に対する検討」 金 文鎔

「近世医書の流通とその行方：小島宝素堂関連資料をめぐって」 多田 伊織
「東アジア食文化の新考察 — 本草学を手がかりとして」 古藤 友子
「明清居住空間考 — 八仙卓を中心に」 高井たかね

「19世紀の朱子学的潮汐説の再構成」 具 万玉

「ニュートン科学に対する韓日知識人の態度比較」 全 勇勲
「19世紀初李圭景の天文地理学の片鱗」 文 重亮
「明治期におけるユークリッド幾何学の伝播」 薩 日娜

7月7日 「宋以前の牡丹と芍薬について — 名物学の可能性と限界」 久保 輝幸

7月21日 「デジタル計算機における生物学的メタファー：1930年代から1950年代まで」 杉本 舞

「奈良・平安時代の暦文化 — その起源と日本的展開」 Gerhard Leinss

8月25日 「『天地瑞祥志』訳出プロジェクト」 水口 幹記

「京大本『卜筮元龜』について」 古藤 友子

「京都の天文文物とその周辺」		藤本 猛
宮島 一彦	(會讀)「『江南經略』海防論2」	
「人文研所蔵術数書と新城新蔵」		城地 孝
武田 時昌	2月14日 (會讀)「『江南經略』海防論3」	
8月26日 「『若杉家文書』と『天地瑞祥志』」		辻原 明穂
梅田 千尋	2月28日 (會讀)「『江南經略』海防論4・5」	
8月27日 「『皆川家文書』と『天地瑞祥志』」		小野 達哉
山下 克明	5月8日 (會讀)「『江南經略』卷一、蘇常鎮江防図、江防論上」	山崎 岳
9月29日 「モンゴル時代の百科全書的知識」	5月22日 (研究報告)「管志道と嘉靖帝 — 明末における専制政治思想 —」	
宮 紀子		岩本真利絵
11月3日 「古代、中世の緯学と政治思想」		
孫 英剛	6月5日 (會讀)「『江南經略』卷一、蘇常鎮江防図、江防論中、下、他」	岩井 茂樹
12月1日 「江戸の易学研究」奈良場 勝	6月19日 (研究報告)「宋金代における出門税銀錠について」	市丸 智子
東アジア地域間交渉と情報 班長 岩井茂樹		
16世紀の東アジアは社會經濟の轉形期を経験した。日本における銀の増産やポルトガル人を嚆矢とするヨーロッパ人の來航などがその背景をなす。利益の追求に促されて、人々は海洋に乗り出して交易に従事した。「天朝」をもって自認する中國の王朝は海禁と朝貢制度を有力な手段として通交秩序を維持しようとしてきたが、この中國中心の秩序は私的な交易の擴大によって動搖することになる。		7月3日 (研究報告)「マーキュリー号事件始末 — 英国汽船による舟山漁場の警護と上海高等法院開設前の英国領事裁判 —」
この時代、外からの脅威に對處するという觀點から、中國では域外についての知識への希求が高まり、かつてない精度と情報量をもつ著述が出現した。1550年代、蘇州出身の鄭若曾は、倭寇防衛の責務を擔った總督胡宗憲の幕下にあつて、情報の収集と戰略の策定に従事し、『籌海圖編』を編纂した。この共同研究班では、鄭若曾が出身地の蘇州に晩年を過ごした時期に、當局からの要請にもとづいて著述した『江南經略』を素材にして、戰略的觀點からの地域情報、武器や船舶の技術、沙洲の住民、水上居民、「倭寇」や盜賊の情報などの傳播と普及について考察する。この作業をつうじて、轉形期の東アジアの地域間交渉の特質についての理解が深まることを期待している。		7月17日 (研究報告)「咸寧侯仇鸞と徽州歙県の人脈 — 安徽省圖書館蔵『舊寫本王充仇氏家乗』を中心に —」
		城地 孝
		山崎、岩井
		9月4日 (合評会)「『長城と北京の朝政』(城地孝著)」
		9月18日 (研究報告)「官卷的研究 — 清代科挙考試制度—内容之探討 —」
		項 巧鋒
		11月13日 (研究報告)「江南に「宗族」有りしや — 嘉興郷紳李日華より看る —」
		濱島 敦俊
		11月27日 「マンジュ人の読書生活について — 漢文化の受容を中心に —」
		庄 声
		12月11日 (研究報告)「明清交替の科挙と出仕について — 兼ねて明清の間の連続性問題を論ずる —」
		項 巧鋒
2012年1月～12月の活動を下に示す。		
1月17日 (會讀)「『江南經略』蘇松海防圖」	地域化する仏教 — 研究の視点と可能性	
藤本 猛	班長 船山 徹	
1月13日 (會讀)「『江南經略』海防論1」	下記の通り、各回の研究報告を行い、活発な議論	

を交わした。本研究班は本年3月をもって終了予定であり、現在、報告論文のとりまとめを企画中である。

- 1月20日 「北朝石刻資料より見る仏教の地域性（邑義を中心に）」 倉本 尚徳
- 2月3日 「日本における禪の受容 — 真福寺所蔵写本を中心に」 末本文美士
- 2月17日 「宗祖研究の問題点と可能性」 藤井 淳
- 3月2日 「禪とは何か？ — 燈史資料に見られる禪宗の自像を中心に —」
ウィッテルン, クリスティアン
- 4月20日 「僧衣の色に見る中国中世仏教の特徴と中国内の地域的相違」ならびに「地域化という視点の新たな可能性に向けて — 初年度の報告を手がかりに」
船山 徹
- 5月18日 「六朝隋唐期の道教儀礼と仏教：伝経儀礼における三師・三宝觀念を中心に」 金 志玟
- 6月29日 「写本の作成過程 — 仏教文献を例として」 村田 滯
- 7月6日 「南インド・スリランカへのイスラーム初伝について」 稲葉 稯
- 9月21日 「仏教における地域化の意味 — 「想」を基点として」 宮崎 泉
- 10月19日 「チベット仏教の地域的展開：ブータン仏教を中心に」 熊谷 誠慈
- 11月16日 「『諸法無我』と『諸行無常』 — アートマンを知る文化地域から知らない文化地域への仏教教義の伝播受容を巡って」 室寺 義仁
- 11月30日 「『道教義枢』序文に見える「王家八竝」をめぐる — 道教教理学と三論学派の論法 —」 麥谷 邦夫
- 12月7日 「大慧禪をめぐる諸問題 — 士大夫との交渉より」 中西 久味

東アジア初期仏教寺院の研究 班長 岡村秀典
東方文化研究所が1938~1944年に調査した中国山西省雲岡石窟について、京都大学デジタルアーカ

イブでの画像公開を目的にガラス乾板の写真を石窟ごとに整理し、水野清一・長廣敏雄『雲岡石窟』の図版解説を会読するとともに、班員の研究発表を実施した。また、水野・長廣『雲岡石窟』全16巻33冊のPDFを京都大学学術情報リポジトリに公開したことをうけて、その全巻の中国語版と未収録写真を集めた別巻を新たに出版する計画が中国の科学出版社より提案があり、その編集に向けた検討会も実施した。開催した研究会は以下のとおり。

- 1月10日 「雲岡石窟第六洞」 田中 健一
- 1月24日 「雲岡石窟第六洞」 田中 健一
- 2月14日 「雲岡石窟第六洞」 田中 健一
- 2月28日 「雲岡石窟第六洞」 田中 健一
- 3月13日 「雲岡石窟第六洞」 田中 健一
- 3月27日 「雲岡石窟第六洞」 田中 健一
- 4月10日 「雲岡石窟第六洞」 田中 健一
- 4月24日 「雲岡石窟第六洞」 田中 健一
- 「雲岡石窟第七洞」 高橋早紀子
- 5月8日 「雲岡石窟第七洞」 高橋早紀子
- 5月22日 「雲岡石窟第七洞」 高橋早紀子
- 6月12日 「雲岡石窟第六洞の位置付けをめぐる諸問題」 安藤 房枝
- 6月26日 「雲岡石窟第七洞」 高橋早紀子
- 7月10日 「雲岡石窟第七洞」 高橋早紀子
- 7月24日 「雲岡石窟第七洞」 高橋早紀子
- 10月9日 「雲岡石窟第七洞」 高橋早紀子
- 10月23日 「雲岡石窟第七洞」 高橋早紀子
- 11月13日 「雲岡石窟第七洞」 高橋早紀子
- 11月27日 「雲岡石窟第七洞」 高橋早紀子
- 12月4日 「雲岡石窟第一〜第四洞補遺」 岡村 秀典
- 12月11日 「雲岡石窟第七洞」 高橋早紀子
- 12月18日 「雲岡石窟第五・第六洞補遺」 岡村 秀典

現代中国文化の深層構造 班長 石川禎浩
2010年4月に発足した共同研究班「現代中国文化の深層構造」は、百花繚乱の如く見える現代中国文化が内包している歴史の刻印や記憶、そして政治との軋轢を、20世紀初頭から今日に到るおよそ100年を対象に、歴史学的手法によって解明しようとする

るものである。昨年度に引き続き共同研究班 B として共同研究班員を公募した本研究班は、主に研究報告の発表とその討議を行うという形式で、1～12 月に以下の日程で 16 回にわたり研究活動を行った。なお、本研究班は、京都大学現代中国研究拠点（人文研附属現代中国研究センター）の研究グループの事業という性格を合わせ持っている。

- 1 月 27 日 「近代中国における「哲学」— 蔡元培の「哲学」を中心に」 川尻 文彦
 2 月 10 日 「1938-1945 年の日本の対広州貿易の再建と統制」 張 傳宇
 2 月 24 日 「清における科挙家族と婚姻との研究：潘祖蔭家族を中心に」 項 巧鋒
 3 月 2 日 「1940 年代の生活書店について：国共両党とのかかわりを中心に」 楊 韜
 4 月 27 日 「1950 年代の中共党史研究と雑誌『党史資料』」 石川 禎浩
 5 月 18 日 「清末民初のミリタリズムとその制度化の課題」 小野寺史郎
 6 月 1 日 「近代日本と中国におけるシヴィル・エンジニアリング—「土木」への翻訳と工学の導入をめぐる」 武上真理子
 6 月 15 日 「1910 年代における張東蓀の政治制度構想」 森川 裕貫
 6 月 22 日 「トボスとしての東アジアを結ぶ— 日中国交回復後の海底ケーブル建設をめぐる」 貴志 俊彦
 7 月 13 日 「中共理論闘争史序説」 江田 憲治
 9 月 28 日 「日貨排斥運動からみる中国社会の変容」 徐 小潔
 10 月 12 日 「文革期の『湖北文藝』」 瀬辺 啓子
 10 月 26 日 「中国における伝記の生成」 森岡 優紀
 11 月 9 日 「広東農民運動期の民団に関する一考察：珠江デルタ地域を中心に」 宮内 肇
 11 月 30 日 「当代散文の研究：記憶の中の中国革命史再構築の歩み」 楠原 俊代
 12 月 4 日 「米洲致公堂と孫文」 宋 玉梅

南アジア北辺地域における文化交流の諸相

班長 稲葉 穰

本研究班は、南アジアが中央アジア、西アジアと接触する境界領域周辺で、古代から近代にかけて生じた接触・交流・衝突・融合の様々な事例を可能な限り網羅的に検討し、前近代における文化交流をどのように捉えうるかを考察することを目的として組織された。本年は、南アジア北辺地域における古代から近代にかけての文化交流、文化変容にかかわる研究報告と並行し、11 世紀半ばに著された Gardizi の歴史書 *Zayn al-Akhbar* におさめられた中央アジア民族誌に関する記述の会読と訳注作成を行った。これは 12 世紀以降のインド・イスラム時代において、支配者たるテュルク（truska）がどのような存在として理解されたのかを考察する材料とするためである。各回の内容は下記の通り。

なお、本研究班は所定の期間を終え 2012 年 3 月末を以て終了した。研究班の成果は、下記の通り 3 月に行った国際シンポジウムで報告した他、数回に分けて、東方學報に個別論文として発表する予定である。

- 1 月 13 日 （会読）「*Zayn al-Akhbār*」 稲葉 穰・中西竜也
 1 月 27 日 （会読）「*Zayn al-Akhbār*」 中西 竜也
 2 月 10 日 （研究報告）「Some Remarks on Bactrian Kadagstan」 宮本 亮一
 「Temporal Decline of Buddhist Sites in Tokharistan」 岩井 俊平
 3 月 5 日・6 日 （国際シンポジウム）
 「Afghanistan Meeting 2012: Between Sogdiana and Gandhara in the Pre-Islamic Period」
 3 月 23 日 （研究報告）「フロンティアを巡る諸問題」 稲葉 穰

イスラムの東・中華の西—前近代ユーラシアにおける文化交流の諸相

班長 稲葉 穰

本研究班は、西のイスラム世界と東の中華世界の間の前近代における交渉、交流について 19 世紀以来蓄積されてきた、いわゆる東西交渉史研究のバイ

オニア達がうちたてたパースペクティブを、最新の発現資料に基づいて検討、検証し、古代から近代におよぶ文化交流と文化変容のあり方を多角的に解明することを目指す。具体的には、班員各自によるテーマに即した研究報告と、9-10世紀の中央アジアの地理について述べたアラビア語地理書写本の会読を交互に行っている。各回の内容は下記の通り。

- 4月13日 (会読)「*Zayn al-Akhhār*」 宮本 亮一
 4月27日 (研究報告)「ガンダーラ美術年代学と技術様相の関係」 内記 理
 5月11日 (研究報告)「イスラームと中華の対話、その歴史的展開 — 19世紀雲南の「聖戦」をめぐる対話を中心に」 中西 竜也
 5月25日 (研究報告)「4世紀～8世紀のバクトリアとソグディアナの服飾」 影山 悦子
 6月8日 (会読)「*Kitāb al-Buldān*」 稲葉 稜
 6月22日 (会読)「*Kitāb al-Buldān*」 稲葉 稜
 7月13日 (研究報告)「15世紀ヘラートにおける書記文化の継承と変容 — インシャー作品の書記術論と書簡作成既定をもとに —」 杉山 雅樹
 7月27日 (会読)「*Kitāb al-Buldān*」 川本 正知
 9月28日 (会読)「*Kitāb al-Buldān*」 川本 正知
 10月12日 (会読)「*Kitāb al-Buldān*」 二宮 文子
 12月14日 (会読)「*Kitāb al-Buldān*」 二宮 文子

元代雜劇の研究

班長 金 文京

本年度も昨年度に引き続き、『元刊雜劇三十種』の会読と訳注作成を行った。会読箇所と担当者は以下のとおりである。

- 4月28日 「『焚兒救母』雜劇 楔子・第一折前半」 担当：金 文京
 6月16日 「『焚兒救母』雜劇 第一折後半」 担当：小松 謙
 7月14日 「『焚兒救母』雜劇 第二折前半」 担当：佐藤 晴彦
 8月4日 「『焚兒救母』雜劇 第二折後半」

担当：高橋 繁樹

8月25日 「『焚兒救母』雜劇 第三折前半」

担当：高橋 文治

9月29日 「『焚兒救母』雜劇 第三折後半」

担当：竹内 誠

10月27日 「『焚兒救母』雜劇 第四折前半」

担当：土屋 育子

12月1日 「『焚兒救母』雜劇 第四折後半」

担当：松浦 恒雄

近現代中国における社会経済制度の再編

班長 村上 衛

本研究班は、前近代中国の社会・経済を規定してきた慣習・秩序・常識といった「制度」が、近現代においていかに変容したかを多角的に検討することを目的とし、2012年4月に発足、4～12月に以下の日程で10回の研究班を開催した。

4月20日 「共同研究班“近現代中国における社会経済制度の再編”をはじめるにあたって — 鎮江における通過貿易問題を例に」 報告者：村上 衛

5月11日 「奉天の近代化と奉天同善堂」

報告者：上田 貴子

コメンテーター：吉澤誠一郎

5月25日 「棉麦借款からみた日中関係の一考察：棉花を中心に」 報告者：秋田 朝美
 コメンテーター：富澤 芳亜

6月8日 「南北アメリカにおける草創期華僑コミュニティの形成と華商」

報告者：園田 節子

コメンテーター：菊池 秀明

6月29日 「中華人民共和国初期における養豚振興の模索」

報告者：吉田建一郎

コメンテーター：小島 泰雄

10月5日 「民国期の上海公共租界における会審公堂の組織と会審制度」

報告者：郭 まいか

コメンテーター：本野 英一

10月19日 「東アジアにおける広東人ネットワーク：在韓華商同順泰の活動を中心に」

人 文 学 報

11月2日	報告者：姜 珍亜	近代朝鮮の政治と社会	水野 直樹
	コメンテーター：岡本隆司・石川亮太	在日米軍を中心とする軍事共同体の人類学的研究	
	「近代中国と広域市場圏：海関統計によるマクロ的アプローチ」	文学理論の研究	田中 雅一
11月16日	報告者：木越 義則	ヴェーダ文献の生成と伝承の研究	大浦 康介
	コメンテーター：岡本 隆司	人種・エスニシティ論	藤井 正人
	「清代絹織物業における主体の変遷とその意義：官営織造局，都市民間機業，郷鎮農村機業」	戦前期日本の工業化と華僑ネットワーク	竹沢 泰子
12月7日	報告者：烏蘭其格	近代天皇制の文化史的研究	籠谷 直人
	コメンテーター：岩井 茂樹	近代日本の芸術と西洋	高木 博志
	「18世紀前半，督撫による地方官選任規定とその実態」	現代社会における生物学・生命科学	高階絵里加
	報告者：山本 一	音楽におけるロマン派とメロドラマ的音楽	加藤 和人
	コメンテーター：伍 躍	19世紀末イギリスのポピュラー・コンサヴァティズム	岡田 暁生
	東アジア訳学書の研究	近世ヨーロッパの歴史叙述と政治思想	小関 隆
	本研究班は，東アジア訳学書の一つである朝鮮の『朴通事諺解』を会読し，訳注を作成することを目的とする。本年度の会読箇所と担当者は以下のとおりである。また12月22日に，在日中のカナダ，ブリティッシュ・コロンビア大学アジア研究センターのロス・キング教授を招聘し，「欧米における韓国語学研究的現状」と題して講演をしていただいた。そのほか，7月28・29両日，韓国ソウルの同徳女子大学で開催された第4回訳学書学会国際学術会議に，班員多数が参加し，研究発表を行った。	幕末期の畿内・近国社会	王寺 賢太
	4月21日 「94話・95話」	精神分析的知を思想史的に位置づける試み	岩城 卓二
	6月30日 「61話・62話」	立木 康介	
	7月21日 「27話・28話」	ザガフカスの「義賊」と戦争	伊藤 順二
	10月20日 「73話・74話」	南インドにおけるプータ祭祀に関する人類学的研究	石井 美保
	11月24日 「43話・44話」	近代日本民俗誌システムの研究	菊地 暁
	12月22日 「88話」	近代西洋医学発展史研究および身体論	田中祐理子
	担当：佐藤 晴彦	近代詩の虚構性	久保 昭博
	ロス・キング教授講演	再構築されるオリシャ崇拝 — 異なる「人種・宗教」をとりこむアフリカ系アメリカ人の社会運動 —	
		戦間期日本の大衆社会・文化	小池 郁子
		古代インド家庭儀礼の研究	黒岩 康博
		フィリピンにおける差異と共同性の構築	梶原三恵子
		啓蒙と文学 — アドルノ美学における「人間性」の位置づけ —	日下 渉
			藤井 俊之

個人研究

東方学研究所

人文学研究部

前近代日本の文明史的研究
近代東アジアにおける日本の法と政
フランス革命と近代的主体の成立

横山 俊夫
山室 信一
富永 茂樹

近代中国の財政と社会
近代中国の綿紡織業
道教思想研究
敦煌写本の言語史的研究
中国古代中世の法制

岩井 茂樹
森 時彦
麥谷 邦夫
高田 時雄
富谷 至

中国の小説、演劇及び説唱文学の歴史 金 文京
 清代の文化と社会 井波 陵一
 中国科学の思想的考察 武田 時昌
 先秦時代の金文 浅原 達郎
 古代中国の考古学研究 岡村 秀典
 イスラーム東漸史の研究 稲葉 稜
 川西走廊の漢藏諸語の記述言語学的研究

池田 巧

インド・中国における仏教の学術と実践

船山 徹

仏教研究知識ベース — 禅仏教を例として

ウィッテルン, クリスティアン

文字コード理論

安岡 孝一

中国共産党史の研究

石川 禎浩

秦漢時代の制度史

宮宅 潔

高麗官僚制度研究

矢木 毅

中国注釈学史研究

古勝 隆一

華南沿海の社会経済制度の変容

村上 衛

東アジア仏教美術史の研究

稲本 泰生

文字定義情報に基づく文書表現系に関する研究

守岡 知彦

中国古代中世の官制史

藤井 律之

モンゴル時代の文化政策と出版活動

宮 紀子

明代後期北虜南倭時代の中国社会

山崎 岳

中国家具とその使用に関する研究

高井たかね

中国唐宋の文学批評

永田 知之

中国中世の考古学研究

向井 佑介

近代中国におけるナショナリズムと政治シンボル

小野寺史郎

中国北魏時代の仏教石窟寺院

安藤 房枝

六朝隋唐期の宗教研究

金 志玟

中国古代における領域支配の研究

土口 史記

仲正昌樹 著『今こそルソーを読み直す』をめぐる

講演と討議

立教大学文学部准教授 桑瀬章二郎

金沢大学法学類教授 仲正 昌樹

司会 王寺 賢太

・人文研アカデミー・シンポジウム

西川長夫著『パリ五月革命 私論 転換点としての
 六八年』刊行記念

『日本からみた 68 年 5 月』

2012 年 2 月 5 日

於 京都大学百周年時計台記念館国際交流ホール

第 1 部 対論 「私」の叛乱

評論家 長崎 浩

立命館大学名誉教授 西川 長夫

第 2 部 シンポジウム 転換点としての 68 年

一橋大学名誉教授 安丸 良夫

東京大学名誉教授 NPO 法人理事長 上野千鶴子

文学研究科教授 伊藤 公雄

文芸評論家 中島 一夫

総合司会 神戸大学教授 市田 良彦

・SENDAI 漢籍 SEMINAR

2012 年 3 月 9 日

於 東北大学百周年記念会館「川内萩ホール」

古籍の帰還もしくは孝経の蒐集 — 竹内義雄名誉教
 授旧蔵書と狩野文庫 —

講師 東北大学教授 三浦 秀一

討論者 京都大学准教授 宇佐美文理

ふみといしぶみの六祖慧能 — 常磐大低旧蔵拓本コ
 レクションを中心として —

講師 東北大学准教授 齋藤 智寛

討論者 京都大学准教授 古勝 隆一

事業概況

・退職記念講演会

2012 年 3 月 14 日

於 京都大学百周年時計台記念館

国際交流ホール 3

・セミナー・シリーズ（人文研アカデミー）

2012 年 1 月 於 本館共通 1 講義室

政治を考える

1 月 21 日 ルソー 桑瀬章二郎 編『ルソーを学
 ぶ人のために』

文明学への道

横山 俊夫

清末経済思想初探

森 時彦

人 文 学 報

・連続セミナー（人文研アカデミー）

2012年5月、6月

於 本館セミナー室1

20世紀前半 東アジアにおける人の移動

5月17日 東アジアにおける人の移動・概観

水野 直樹

5月24日 日本から朝鮮へ ― 在朝日本人社会の
形成と消滅 ―

仏教大学歴史学部准教授 李 昇燁

5月31日 朝鮮から日本へ ― 在日朝鮮人社会の
形成と変容 ―

国際日本文化研究センター准教授

松田 利彦

6月7日 中国から朝鮮へ ― 朝鮮在住華僑の歴
史 ―

成美大学経営情報学部教授

李 正熙

6月14日 朝鮮から中国東北へ ― 帝国日本と中
国朝鮮族の歴史 ―

水野 直樹

・特別講演会（人文研アカデミー）

2012年5月18日

於 本館セミナー室1

1893年シカゴ万国宗教会議と日本仏教

講師 高野山大学教授 奥山 直司

・夏期公開講座（人文研アカデミー）

2012年7月7日

於 本館共通1講義室

名作再読 ― 鉄道 ―

いま読んだらこんなに面白い (7)

「地下鉄のザジ」(レーモン・クノー) 久保 昭博

「点と線」(松本清張) 安岡 孝一

「鉄道事故」(トーマス・マン)

クリスティアン・ウィッテルン

・連続セミナー（人文研アカデミー）

2012年9月、10月

於 本館セミナー室1

交錯するアジア ― 前近代ユーラシアにおける文化
交流の諸相

9月27日 世界の屋根を越えて：ガンダーラ、ア
フガニスタン、パミール 稲葉 穣

10月4日 信仰か観光か：南アジアのスーフィー
聖者廟 二宮 文子

10月11日 チベット文化の誕生：諸文化が交錯す
るところ

神戸市外国語大学客員研究員・非常勤講師
岩尾 一史

10月18日 変わるもの・変わらないもの：トルコ
共和国のアラビア文字碑文

文学研究科教授 井谷 鋼造

・文学カフェ（人文研アカデミー）

2012年11月24日

於 本館共通1講義室

公開句会「東京マッハ」番外編 京大マッハ 第2
芸術の逆襲

講師 ゲーム作家 立命館大学映像学部教授

米光 一成

小説家 長嶋 有

小説家 藤野 可織

俳人 堀本 裕樹

司会 日曜文筆家 千野 帽子

・東アジア人情報学研究センター講習会

・2012年度漢籍担当職員講習会（初級）

第1日（10月1日）

オリエンテーション 富谷 至

漢籍について（四部分類概説を含む）井波 陵一

カードの取り方 ― 漢籍整理の実践 土口 史記

第2日（10月2日）

工具書について 高井たかね

実習を始めるにあたって 梶浦 晋

漢籍目録カード作成実習

第3日（10月3日）

目録検索とデータベース検索 安岡 孝一

漢籍データ入力実習 (1)

第4日（10月4日）

和刻本について

文学研究科教授 宇佐美文理

漢籍データ入力実習 (2)

第5日(10月5日)

朝鮮本について 矢木 毅
実習解説 土口 史記
情報交換 井波 陵一
・2012年度漢籍担当職員講習会(中級)

第1日(10月29日)

オリエンテーション 富谷 至
経部について 文学研究科教授 宇佐美文理
叢書部について 藤井 律之
叢書と漢籍データベース 安岡 孝一

第2日(10月30日)

史部について 宮宅 潔
漢籍データ入力実習(1)

第3日(10月31日)

子部について 武田 時昌
漢籍データ入力実習(2)

第4日(11月1日)

集部について
人間・環境学研究科教授 道坂 昭廣
漢籍データ入力実習(3)

第5日(11月2日)

漢籍関連サイトの利用について
文学研究科閲覧掛 大西 賢人
実習解説 土口 史記
情報交換 井波 陵一

科准教授就任。

- ・横山俊夫教授(人文学研究部)は、定年により退職(3月31日付)。
- ・森時彦教授(東方学研究部)は、定年により退職(3月31日付)。
- ・三成寿作特定研究員(科学研究)は、辞任の上(3月31日付)、大阪大学大学院医学系研究科特任研究員就任。
- ・栗田奈津子(旧姓 山本奈津子)特定研究員(産官学連携)は、辞任の上(3月31日付)、大阪大学大学院医学系研究科特任研究員就任。
- ・吉沢剛特定講師(新学術領域研究)は、辞任の上(3月31日付)、大阪大学大学院医学系研究科准教授就任。
- ・高木博志准教授(人文学研究部)は、当研究所(人文学研究部)教授に昇任(4月1日付)。
- ・ウィッテルン・クリスティアン准教授(附属東アジア人文情報学研究センター)は、当研究所(附属東アジア人文情報学研究センター)教授に昇任(4月1日付)。
- ・武田時昌教授(附属東アジア人文情報学研究センター)は、東方学研究部に配置換(4月1日付)。
- ・山崎岳助教(附属東アジア人文情報学研究センター)は、東方学研究部に配置換(4月1日付)。
- ・麥谷邦夫教授(東方学研究部)の、附属東アジア人文情報学研究センター長併任を解除(4月1日付)。
- ・富谷至教授(東方学研究部)は、附属東アジア人文情報学研究センター長を併任(4月1日～2013年3月31日)。
- ・藤原辰史東京大学大学院農学生命科学研究科講師を准教授に採用(4月1日付)。
- ・土口史記を助教(附属東アジア人文情報学研究センター)に採用(4月1日付)。
- ・藤本幸夫 麗澤大学言語研究センター長は、客員教授(文化研究創生研究部門、4月1日～2013年3月31日)。
- ・JACQUET, Benoit Marcel Maurice フランス国立極東学院京都支部長は、客員准教授(文化研究創成研究部門、4月1日～2013年3月31日)。
- ・加藤和人 大阪大学大学院医学系研究科教授は、

所員動静

- ・白井哲哉特定助教(新学術領域研究)は、辞任の上(2月29日付)、京都大学研究国際部特定専門業務職員(リサーチ・アドミニストレーター)就任。
- ・向井佑介助教(附属東アジア人文情報学研究センター)は、辞任の上(3月31日付)、京都府立大学文学部歴史学科講師就任。
- ・加藤和人准教授(人文学研究部)は、辞任の上(3月31日付)、大阪大学大学院医学系研究科教授就任。
- ・梶原三恵子助教(人文学研究部)は、辞任の上(3月31日付)、東京大学大学院人文社会系研究

客員教授（文化研究創生研究部門，4月1日～2013年3月31日）。

- ・武上真理子 人間文化研究機構地域研究推進センター研究員は、客員准教授（附属現代中国研究センター，4月1日～2013年3月31日）。
- ・VITA, Silvio イタリア国立東方学研究所所長は、客員教授（文化研究創成研究部門，4月1日～2013年3月31日）。
- ・稲本泰生奈良国立博物館学芸部教育室長を准教授（東方学研究部）に採用（5月1日付）。

外国人研究員

- ・VOGELSANG, Kai ハンブルグ大学教授
尚書和刻本等の研究
（文化連関研究客員部門） 受入教員 富谷教授
期間 1月31日～7月30日
- ・FANSELOW, Frank
ブルネイ・ダルサラーム大学 学科長
アジアにおける民族紛争と表象との相互関係についての研究
（文化生成研究客員部門） 受入教員 田中教授
期間 5月7日～9月14日
- ・RAVINA, Mark エモリー大学教授
日本近世史・近代史
（文化連関研究客員部門） 受入教員 岩城准教授
期間 8月15日～2013年1月10日
- ・薩日娜
上海交通大学科学史与科学文化研究院 准教授
東アジアにおける西洋数学受容の研究
（文化生成研究客員部門） 受入教員 武田教授
期間 11月7日～2013年2月6日
- ・BLUSSE, Leonard ライデン大学 名誉教授
アジアの通商ネットワークと社会秩序
（文化生成研究客員部門） 受入教員 籠谷教授
期間 11月10日～2013年5月10日

招聘外国人学者

- ・張 景俊 高麗大学人文大学国語刻文科副教授
日本と韓国の漢文訓読に使用される符号の比較研究
受入教員 金教授
期間 4月1日～8月5日
- ・林 素清 中央研究員歴史語言研究所研究員
中国古代青銅器の銘文研究 受入教員 岡村教授
期間 10月29日～11月11日
- ・聶 德寧 厦門大学南洋研究院教授
バタフィア・カピタン文書による華人通商ネットワーク研究
受入教員 岩井教授
期間 12月1日～2013年5月31日

外国人共同研究者

- ・Scherrmann, Sylke Ulrike
青島旧蔵ドイツ語文献中の法制関係資料の調査
受入教員 岩井教授
期間 2011年4月1日～2013年3月31日（継続）
- ・李 大和
建国大学校韓国台湾比較史研究所研究員
戦時下朝鮮の防空体制と朝鮮社会の変容
受入教員 水野教授
期間 2011年4月22日～2013年2月28日（継続）
- ・金 恵淑
建国大学校韓国台湾比較史研究所研究員
植民地朝鮮の商取引における度量衡制の混在様相に関する研究
受入教員 水野教授
期間 4月1日～2013年3月31日
- ・許 瓊丰
台湾中央研究院台湾史研究所・博士後研究
戦後神戸における台湾人商人の真珠事業 ― その経済的・社会的活動 受入教員 籠谷教授
期間 7月4日～8月31日
- ・STORM, Kerstin ミュンスター大学・PD研究員
法律と文学：晩唐における「判」のレトリック
受入教員 富谷教授
期間 7月17日～2013年1月26日

- ・TAJAN, Nicolas
 トゥールーズ第2大学・博士課程学生
 日本の「ひきこもり」についての心理学的・社会
 文化史的研究 受入教員 立木准教授
 期間 10月5日～2013年10月4日

- ・ZINBUN number 43
 2012年3月刊
- ・人文学報 第102号(紀要第169冊)
 2012年3月30日刊

外国人研究生

- ・TAJAN, Nicolas
 社会的ひきこもりの日仏比較研究
 受入教員 立木准教授
 期間 2011年4月1日～2012年8月31日(継続)
- ・PHAN, Cam Van Thi
 悔恨の儀式：前近代中国におけるテキストとして
 の伝統から宗教儀礼へ 受入教員 船山教授
 期間 2月1日～2013年1月31日
- ・陳 彦君
 岡倉天心におけるアジア主義の再考
 受入教員 山室教授
 期間 4月1日～7月31日

出版 物

紀要

- ・東方学報 87冊(紀要第170冊)
 2012年12月10日刊
- ・東洋学文献類目 2009年度
 2012年2月29日刊

研究報告その他

- ・眞諦三藏研究論集 船山徹編
 2012年3月25日刊
- ・東方学資料叢刊 第20冊
 2012年3月30日刊
- ・ことばの力 横山俊夫編著
 2012年3月21日刊
- ・日本東方学(第2号)
 日本京都大学人文科学研究所主編
 2012年4月12日刊
- ・所報人文 第59号
 2012年6月30日刊
- ・シンポジウム「情報と構造のメタデータ」
 (2012年月21日実施)
 2012年2月21日刊
- ・東洋学へのコンピュータ利用
 第23回研究セミナー(2012年3月16日実施)
 2012年3月16日刊
- ・イタリア国立東方学研究所大会
 「ヨーロッパ文書館から描く近世日本」
 (2012年9月28日実施)
 2012年9月28日刊